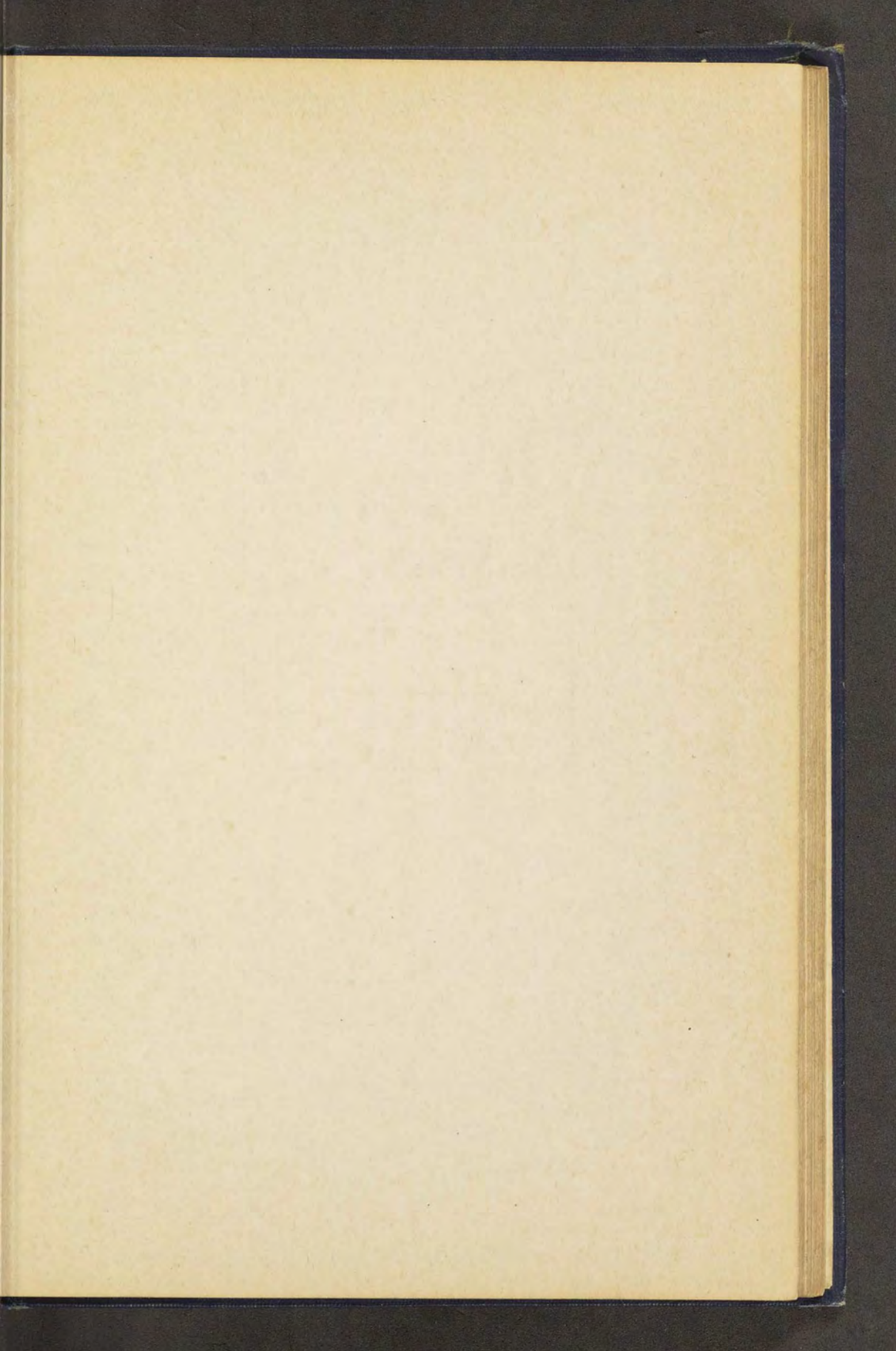
大正三年九月十日印刷
大正三年九月十五日發行
〔眞珠奥附〕

編輯兼發行者　東京市麻布區東鳥居坂町　西川新十郎
印刷者　東京市本郷區湯島四丁目五番地　石井清
印刷所　東京市京橋區弓町二十四番地　三協印刷株式會社

ページ	行	誤	正
二三	一	護	獲
二七	九	巨池	巨椋池
二九	一四	抗	拘
六〇	九	第二圖	第三圖
同	一三	第三圖	第二圖
七二	一四	面して	而して
八六	二	眞見	眞珠
九四	三	第八圖	第六、七兩圖
一一三	一	學名の間のコンマ	除き去る
一一五	一及び一四	同右	同右
一一六	三及び一〇	同右	同右
一一九	九	同右	同右

得て掌上に取り上げ見るに疑ふ方なきシャコ眞珠の食指頭大球形のものなり、幾年を經たりけん處々に曇さへ現はれ、光澤も新しきのに比して少しく消失せるなり。

主人は眞珠を熟視せる池田氏に向つて曰く、「珍しいものでしよー」池田氏答て曰ふ「なる程圓いものですなー」(珍しいとは義理にも云へずこの答は漸く案出したるなりと云ふ)、主人悟らず得意なり、更に曰ふ「君は眞珠商なるもこれ程の眞珠は見たことはありますまい」、池田氏答て曰く「澤山は見ませんが、年に十四五は扱ひます」と。これよりこの眞珠の性質を説いて所信を述ぶ。　主人驚き且つ不快の色あり、これより多くを語らず、池田氏携ふる處の「本口」を示して、これこそ貴重なる眞珠なりと説明す、主人曰く「なる程この方が大分奇麗だすなー」、池田氏早々に辭して歸る、其後如何になりしや知らずと。　氏は余に語りて曰く、あの時ほど滑稽にして而も挨拶に窮したることなしと。

眞珠　終

のなり、只珍奇なる物として賞せらるゝのみ。

曾て大阪の或新聞に京都の大眞珠と題して「某氏傳家の重寶として大眞珠を藏す、或時ホテルに滯在する洋人これを見て曰く、確に十萬圓の價格ある眞珠なり、余は三萬圓ならば買求めんと某大に嬉び今更其の貴きに驚き、これを衆人に示さん爲め第五内博に出品せんとす」と記せし事ありき。余はこの記事を讀んでこの稀有の眞珠を實見したきものと思ひしが、暇なくして果さず、後に大阪の眞珠商池田氏に會し、談この事に及ぶ。氏は流石商賣柄この眞珠の實見を切望し、去る人より紹介狀を得て漸くにして某持主と會見するを得たりとて、語られたる當時の模樣を聽くに、氏は同家を訪ふて應接室に待つこと多時、主人出で云ふ君は實に幸運兒なる哉、今一日遲かりせば、彼の至寶を見る機を失ひしなり、實は非常の品なれば己れ如きものゝ私藏すべきに非ずと思ひし故、明日東京へ發送する筈なりきとの冒頭を置きて、恭しく桐の箱、紫の帛紗に叮嚀に藏められたる所謂御寶物を座に出せり、蓋を去れば必然燦然たる光輝を放たんと思ひの外、前に云ふシャコ眞珠なれば、池田氏は一見して失望し、且つ洋人の話に思ひ至り一種不思議に感じたり。許を

よるか、或は偶然にか、又は他の源因によりてか、體外に吐き出され、川底に沈み、後洪水の爲に遠く流され、又水勢に由りて一箇處に集るものならん、これ川より遠く離れたる地にて眞珠を發見する所以なるべし。然りと雖も又案ずるに、眞珠が介の肉より離脱して水中に落つる時は、水の爲めに犯されて光澤を失ひ小石と區別し難くなるべし、殊に洪水の爲めに遠く運ばるゝ時は磨滅して原形を保つこと能はざれば、アーカンサス州の如き場合は寧ろ甚だ奇と謂ふべし。前記の如く河流に遠き土中に眞珠の發見せらるゝより、ハミルトン(L. Hamilton)は説を立てゝ、介肉を食する禽獸によりて眞珠が分布せらるとなせり。即ちその食したる肉中に眞珠あれば、これのみ消化せられずして排出せらるゝが故に、原野山林等禽獸の到る處に眞珠は遺棄せらるゝなりと。

御挨拶に困る

シャコ(Tridacna)の眞珠は甚だ多きものに非ざれども、大なる介なるが故に從て大形の眞珠を產す。時に重量二匁、大さ指頭大のものあり。然れども其の色は乳白色にして恰も陶器の塊の如く、裝飾品としては用に堪へず、價格も至て廉なるも

上の問題となり、殊に湖水より五里の西にあるサーシー(Searcy)市に於ては、市長の主唱の下に會社反對の聲最大となりて、遂に市民はマーフヒイ湖に赴き、制札を無視して己等の權利を主張し、此處に眞珠漁を開始せんとせり。此に於て杭論辯駁遂に法廷に訴ふるに至りしが、其の結果サーシー市黨は他の近傍の湖水に於て眞珠漁を行ふこととなり、會社は勝訴を得て、武裝せる巡邏を置きて警戒し、夜間は瓦斯を點じて密漁者を防ぎ、盛に作業を遂行して遂に費用を償ひて猶幾分の利潤を見たりと云ふ。

又ホワイト川の測量隊が拾ひし眞珠は五千弗に上りしと云ふ。マッキントッシュ(Mr. J. W. McIntosh)はサイプレス(Cypress)河の邊に杭を建つる爲め穴を掘りしに、地下一呎半の處より數個の眞珠を得たり、然れども介殼は無かりしと云ふ。ウォーカー湖(Walker Lake)の岸に繫ぎし小舟の傍にて或漁夫が一箇處にて十二箇の眞珠を拾ひたりと云ふ。かゝる奇現象は如何にして起れるかと問ふに、此等の地方にては介が或季節にその眞珠を吐き出すものなりと云へり。斯く一ヶ處に多數の眞珠の集合せるより推すれば、元來介の肉中に生じたる眞珠は、介の種類の特質に

告ぐるには、こは何の益にも立たぬもの只兒童の弄物たるのみと、青年も貴重なる眞珠の餘りに容易に得らるゝが故に、少しく疑はしく思ひ、見本として少量をセントルイ市及びメンフィス(Memphis)の寶石商に送附したるに、正しく眞珠なりとの返答を得、且つ意外に多額の報酬を得たりければ、直に殘りの眞珠を送附したり。この事實喧傳して各人の注意を惹起し、眞珠漁業者は漸時同湖に集まるに至り、ウキリヤムス(Hon. J. J. Williams)なる人はセントルイの眞珠商と共に現場に至り、湖底の泥中より三日間に桃色の大眞珠純白の小眞珠等合せて四十個を發見し、中には一箇數百弗の價格のものありしと云ふ。是に於て同氏は湖水所在の地主と談じて、五ヶ年間四千五百弗にて借地の契約を爲して湖水の使用權を專有しメンフィス市に會社を組織し、湖畔に家屋を築造し、制札を建てゝ他人の漁業するを禁じ、湖水の泥土を秩序的に篩にかけて眞珠を搜索するとゝなせり。この湖水は長さ一里、巾は廣き處にて二町半、周圍は樹木繁茂して風景頗る可なり、元來銃獵及び漁業の好適地と稱せられ、湖畔には政府の所轄地と學校所屬地等あり、且つ湖水は公水道の一部たるが故に、一個人の所有に歸せるを聽きて地方の物議を惹起し、法律

鷄に食はし、再びこれを得て光澤を回復するの法を行へりと云ふ。これ稀薄なる酸を用ひて處理すると同理にして、光澤なき表面の眞珠層を脫落して、內部の美麗なる層を現はさしむるにあるなり。

眞珠拾ひ

凡そ眞珠漁業と云へば、眞珠を生ずる活ける介を開きて、肉中に或は殼に附着せる眞珠を搜索するものなるが、茲に泥中に眞珠を拾ふ地方あり、卽ち米國のアーカンサス(Arkansas)州これなり。

千八百九十七年の夏は、乾天續きて諸川の減水甚だしく水底の露出する處多かりし、其時セントルイ市の一青年休暇を得てホワイト川(White River)の支流に當れるマーヒー湖(Murphy Lake)に遊漁に行きしが、或日の事、湖畔の朽木に腰打ちかけ釣を垂れしに、偶々水底に輝ける物を見付け、これを採り上げしに眞珠なり。案內に傭ひし黑奴これを見て、かくの如き物はこの附近に澤山ありと告ぐ。青年則ち彼に案內を命じて凡一里許りも森林中を過ぎ行く程に、果して黑奴の言の如く、此處彼處にて同じ樣なるものを多く拾ひ得たり。案內者は青年の嬉べる狀を見て

にも亦信實なりと唱へしなり。時間に懸念なき彼等支那人は只細き鋼鐵の針を根氣に鑽み通すなり、曾て或本邦人の最も細心に試みたるものを見たるに、敢て彼等に劣らざりき。

眞珠を珠數繫ぎにせるものゝ紐を布に縫ひ付け、恰も眞珠を繡せる如くに用ゆるものあり、支那に行はれ又歐洲にもあり、眞珠を以て衣服を飾るに最も美麗を極むるの法なり。

眞珠と鷄

眞珠には黃金色のものと銀色のものとあり、而して黃色のものは其の價格銀色のものに遠く及ばず、故に眞珠商は專ら銀色眞珠を得んと勉むるなり。玆に大阪の眞珠商某氏は大に工風を凝して金色眞珠を銀色に變せしむるの法を考ふ、其の一法として小形の金色眞珠を饂飩粉の塊に包みて巧に鷄に食はしめ、後この鷄を別の箱に飼ひ置き數日間糞便を檢して眞珠を索むれども遂に見當らざりしと、これ試用の眞珠は餘りに小形なりし故、鷄の消化機系統を通ずる際、酸の爲めに溶解して遂に消失せしものならん。印度にては眞珠の年を經て光澤を失へるものを

て殼を開かしめ以て眞珠を索むるなり。此故に土人所有の眞珠は毀損せるもの多しと云ふ。又塚作り人種も眞珠に孔を通ずるには、火力を用ひたるものにして、從て其の孔太しと云へり。

現今文明國の貴婦人が用ゆる眞珠の頸輪は、鑽通眞珠に紐を通したるものなり。この眞珠に鑽通せる孔は細小なるを尊び、細き紐を以て貫き、恰も眞珠のみ相列べるが如き觀あるを貴ぶなり、而してこの眞珠に孔を鑽通するの術に最も長じたる者は支那人なり。彼等は獨特の伎倆を有し、最も精功なる孔を穿つこと、他國人の及ぶ能はざる處なりと云ふ。支那人についてこれを質せば、眞面目に答て曰く、眞珠を活る介より取り出したる初めは軟柔なるものなり。これを直に口中に入れ舌の上に置き、手に極めて細き針を持ちて徐々に孔を穿つなりと、妄誕驚く可し。彼プリニーも亦如此考を有せしものなり、元來オビッド(Ovid)の説に依れば、珊瑚は海中に在る間は柔軟なるも空中に晒せば暫くして堅固に變ずるものなりと云へり、これ硬き石灰質の軸を蔽へる柔軟なる動物組織の空氣中に在りて乾燥し、或は離脱するより誤れるものならん、プリニーはこのオビッドの珊瑚變質說は眞珠

ば眞珠貝の殼を用ゐて事足る可し、要するに眞珠の醫療上の價値は、到底其裝飾用としての價値に比す可くも非るなり。

眞珠を裝飾に用ゆる方法は、各人種一致せるものゝ如し、卽ち嵌入細工にすると、眞珠に孔を鑽通して懸垂裝飾に用ゆるとあり。帝室博物館奈良朝歷史部に陳列せる經箱を見るに、これを飾るに球形のアハビ眞珠を嵌入せるあり。鑽通眞珠の裝飾は前述の如く三月堂不空羂索觀音像の冠に見るべく、且つ前出萬葉集卷十六に

「眞珠者、緖絕爲爾伎登、聞之故爾、其緖復貫吾玉爾將爲。」

「白玉之、緖絕者信、雖然、其緖又貫、人持去家有。」

とあるを見ても、眞珠に紐を通して用ひたるを知るべし。獨帝の王冠に眞珠を列べて文字を現はせるは嵌入細工なり。古く羅馬時代に耳輪或は頸輪にしたるは鑽通して紐を通じたるなり。

亞米利加印度人がドソト(De Soto)に示したる眞珠に孔を鑽つ方法は、細き銅線の燒けたるものを以て鑽み通すものなりと云ふ、且土人は漁したる介を火中に投じ

に至らしむとせらる。中世紀の頃歐洲騎士が迷信よりして眞珠を戰場に携帶したることは既に云へるが、此等も亦亞細亞諸國に傳はれる流說の輸入せられたる結果ならんか。醫藥として眞珠を用うることも歐羅巴諸國に行はれたり。十七世紀の初ルドルフ二世(Rudoldh II.)帝の侍醫たりしアンセルムス、ド、ボー(Anselmus de Boot)は、眞珠を酢又はレモン液汁に溶かし砂糖を加へたる液に數種の果實液を混和して製したる水藥は、熱病に特効あること、凡百の藥液中よく其の右に出づるものなしと云へるが、此眞珠を溶かす際に容器を密閉し置かざれば、眞珠の粹が逃散する虞ありとなせり。眞珠の醫藥として効あることは當時啻に下級人民の間に信ぜられたるのみに非ず、有名なる醫師が王侯貴人の治療に高價なる眞珠を投用したること其例甚だ多し、英國の哲學者フランシス、ベーコン(Francis Bacon)亦大に眞珠の醫藥としての價値を賞揚したりき。又眞珠をレモン液汁に溶かしたるものは、洗面の料として他に比類なき良好のものなりとせられしことありき。

元來眞珠は炭酸石灰を主成分とせるものなれば、治療に用ひて其効果絕無とは云ふ可からず。されど、そは必ずしも高價なる眞珠を潰し用ゐずとも、他の物例へ

眞 珠 雜 話

眞珠の用途

眞珠を醫藥として用ふることは、極古代より行はれ來りしことなり、殊に東洋諸國に於て最も盛にして、神經心臟胃腸の諸症は勿論出血を止め中毒を救ひ眼病を治するにも効ありとせられ、我國にても往時頗賞用せられたるものなり。多くは粉碎して服用するものなるが、大形美麗なるものを用に供するに非ず、主として小形のものにして、市場にケシダマと稱するもの、支那にて藥珠と呼ぶものを用うるなり。本草綱目に書ける處に據れば、殆萬病に効ありとし、又常に之を服用すれば亞片毒に犯さるゝことなしといふ。面白きは支那にては無疵の眞珠のみ此効ありとし、一度鑽通して孔を穿ちたるものは、毫も其効なしといへり。印度にては眞珠は色によりて其効用異なれりとし、黃色なるものは富を招き、蜂蜜の色をなせるは理解力を養ひ、白きは名譽を博せしめ、青色なるは幸運を齎らすとせらる、而して疵あるものは疵なきものに反し、疵の大小程度により、不運不名譽に陷らしめ、狂亂、死

産地なりとす。本邦に於て最も多きシンジユガヒの殼は比較的劣等なりと雖も、これより生ずる眞珠は光澤頗る美なり。又貴重なる殼と大形の眞珠を產するシロテフも、多少棲息せるものゝ如く、クロテフの產額は、濫獲の結果減少したりと雖、琉球列島はこれが好適なる產地なり。若し夫れ適當なる蕃殖保護の途を講じ、或は養殖するに良法を以てせば、これ等介殼は本邦に於ける重要水產物たらんこと疑なし。

ビス中華に持來ると云ふ、夫を日本に載來る者と云ふ、云々多くなきものなり貴し愛玩すべし、古人用て螺鈿とす、今の螺鈿は皆千里光を用ゆ、廣東新語の珠殼出大坭と云ひ珠母出滿刺加と云ふもの是なり。

と云へるが、この厚介と稱するものは恐らくは本種シロテフガヒを指すならん。但し大坭の地何處なるか詳ならず、滿刺加に出づと稱するは恐く同地方を經て舶來せしものならん。

以上記載せる種類の他に、本邦には琉球列島殊に宮古島及び薩南大島の瀬戸に饒產するマベ(Electroma sp.)あり、この殼は非常に大形なれども眞珠層の色美ならず、且つ殼質脆く從て價格廉なり。然れどもこれより生ずる眞珠は時に稀有の大形のものあり、この介も目今濫獲の結果產額大に減少したりと云ふ。

これを通觀するに、要用なるシンジユガヒ科の種類は太平洋及び印度洋に多くして、太西洋に於ては只小形の種類の西印度附近に棲息するあるのみ。而して緯度を以て云ば南北三十度の間、即ち熱帶及び温帶地方に限られ、就中最も要用なる大形の種類は、熱帶地方に產し殊に馬來群島及び西部ポリネシヤは最も豐饒なる

もの其の殘の一なりと云ふ。これによりて見れば極めて稀に琉球列島には産するものなるが如し。

本種の介殼は介殼中最も要用なるものにして、市場に最高位を占むるものなり。濠洲クヰンスランド(Queensland)のみにても一箇年の輸出高五百萬圓以上千萬圓に及ぶことあり。殊に木曜島を本據地とせるトーレス海峽或は西濠洲及びフィリッピン群島に於けるその漁業は本邦人に深き關係を有するものなり。

本種を市場にては産地に從ひ"Western Australia" "Port Darwin" "Queensland" "Mergui" "New Guinea" "Manila" "Macassar" の七種に區別せり、各眞珠層の色彩に多少の變化あり從て價格を異にせり。概して"Queensland"即ちトレース海峽に産するものは價最も貴く、時により甚しき高低あれど先づ百二十斤の價十磅內外なりとす。目八譜或は本草細目啓蒙に厚介（アツガヒ）と稱するものを記載して。

石壽云、眞珠介の屬にして古舶來のものなり、大さ五六寸或は七八寸尺に至る、厚さ七八分寸に至る、肌白灰色淡黑斑文にして粗く虫喰の如し、或は石決明の如き所もあり、裏石決明の如き光瑩なり、和俗是を厚介と云ふ、中華に無く、南方のエ

の余に贈られしものなり。圖は左殼の內面を示す。其眞珠層は海水の爲めに浸蝕せられたる徵候を現はすを以て見れば、この貝は天命を全くして海中に斃れたるものなるべし。其の殼嘴部の殼の厚さは非常なる老介なるを示す、而してかゝる標本は稀に見る處なりとす。

この種はシンジュガヒ科中最大のものにして高さ一尺を過ぐるものあり。眞珠層は純白銀色なり、其の周緣に金色を帶べるものありこれを「キテフ」と稱せり。

この種の分布は濠洲東岸にありてはタウンスビール(Townsville)以北に西岸は南緯二十度以北あり。又ニユーギニヤの沿岸、ニユーブリテン、ソロモン群島よりモルツク、セレベス、アルー(Aru)及びボルネオ(Borneo)の諸島、北はフイリツピン群島に擴がり、マラツカ海峽を出でゝは馬來半島の西メルグイ島にありて印度洋本部にはなし。

從來本邦にはこの種類なしと思はれしが、先年薩南大島瀨戶に於て採集せられたるものあり。其數僅に三個にして、一は現に鹿兒島物產陳列場にあり、一は長崎縣廳に行きたりと云ふ、而して第五回內國勸業博覽會に古賀辰四郎氏の出品せし

群島及びスワロー(Swarrow)島に多し。最近の報告によればサンドキッチ(Sandwich)列島にも亦棲息すと云ふ。

本變種はこの種類中最大のものにして、高さ一尺に及ぶものあり。市場にては"Tahiti" "Gambier" 又はオークランド(Auckland)を經て輸出せらるゝが故に"Auckland Shell" とも稱せらる。

一一　M. margaritifera var. mazatlanica

カリホルニヤ灣及びパナマ灣に漁せらるゝもの即ちこれなり、市場には"Panama" Shell と稱するなり。

一二　シロテフガヒ　(Margaritifera maxima, Jameson)

此學名はゼームソンが命名せるものなり。この種は古くより知られ、然も市場に多き種類なるに、近年に至りて命名せられたりとは不思議の觀あれど、從來はクロテフガと同種に見倣されたるなり、されど前のクロテフガヒとは明に區別せらるゝものなり。

第二十四圖に示せるは濠洲トーレス海峽の産にして木曜島に在留せし佐藤氏

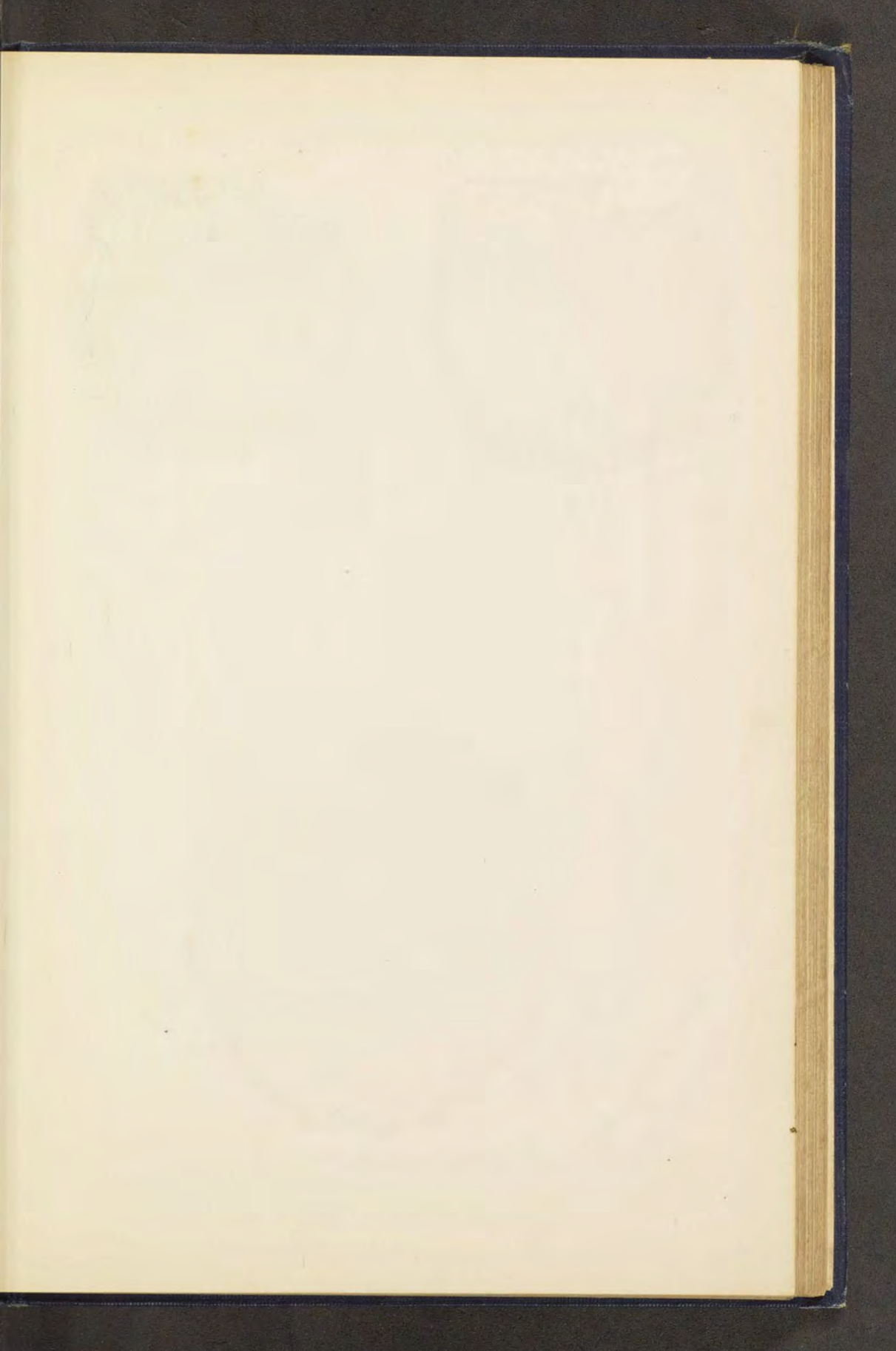
第廿三圖

クロテフガヒ右殼內面

第廿二圖

クロテフガヒ左殼外面（約五分ノ二大）

第廿四圖

シロテフガヒ左殼內面（約三分ノ一大）

倣さるゝなり。即ち

七　M. margaritifera var. zanzibarensis

マダガスカル (Madagascar) 島に多く、又亞弗利加の東岸に多し、モーリチヤス (Mauritius) 及びセイチエレス (Seychelles) 群島にもあり、市場にては "Zanzibar" 或は "Madagascar" Shell と云ふ。

八　M. margaritifera var. persica

波斯灣に饒產するものなり、印度孟買市を經て輸出せらるゝが故に、龍動市場にては "Bombay" Shell と云ふ。

九　M. margaritifera var. erythrensis

紅海に產し市場に "Egyptian" Shell と稱するものなり、其の亞典產のものは前の波斯灣の變種に酷似せり。

一〇　M. margaritifera var. cumingi

東ポリネシヤ (Eastern polynesia) を通じて之を產す、タヒチー (Tahiti) 島のみにて一箇年介殼六百噸、眞珠價額四千乃至五千磅を產すと云ふ。ペンリイーン (Penrhyn)

棲息し、トーレス海峽よりニューギニヤの沿岸、及び其附近ニューブリテーン (New Britain) ソロモン (Solomon) 等の諸群島並びに西部太平洋の諸島にあり。北は馬來群島を通じて支那南方に亘り、マラッカ海峽を出でゝは馬來半島の西、アンダマン(Andaman)群島にあり。錫蘭島並に印度の南にあるマルダイヴ (Maldive) 群島に多く、本邦に於ては臺灣より琉球列島に分布し、就中八重山に漁業せらる、先年理學士宮島幹之助君が携へられたる標本により薩摩の南端にもこれあるを知る。其他伊豫にも棲息すること確められたり。然れどもこれより以北には未だ棲息せるものを見ず。

本種の特徴は殼の内面眞珠層の周縁が綠色を帶べる暗黑色なるにあり。故にこれを「クロテフ」と稱す「テフ」とは蝶介より出しなり。其の形蝶に似たるが故なり、龍動市場にて"Black lip"と稱するもの之なり。又稀に黄金色を帶べるものあり、而して周緣以外の眞珠層は少しく黑味を帶べる銀色即ち所謂「鋼色」にして、これより生ずる眞珠は光澤他品に優越す。

クロテフガヒは太平洋及び印度洋の各地に産す。然れども皆本種の變種と見

"West Indian Pearl Oyster"と稱するものなり、西印度諸島及び南米ブラジル及びベネズエラの沿岸に產す。

五　Margaritifera carchariarum, Jameson

市場に"Sharks Bay Shell"と稱するものなり、稍〻大形の種にして、濠洲西海岸殊にシヤークス灣(Shrks Bay)に於て漁せらる、主として小形の釦を製造する原料なり。これに酷似せるものにトーレス海峽に饒產するM. sugillata Reeveあり、然れども未だ商品とならず、從て漁業とならざるものなり。

以上は比較的小形の種類にして、從て其殼は裝飾用に供せらるゝことあるも價格低廉なり。　次ぎに述ぶる二種は最も要用なるものとす。

六　クロテフガヒ (Margaritifera margaritifera, L.)

圖にせるものは琉球產にして、第廿二圖は左殼の外面なり殼の外側斑紋を明に見ることを得べし、第廿三圖は右殼の內面を示す、本種は殊に個々の形狀の變化多し、此處に圖にせるものはその最も正形のものを撰びたり。　本種の分布は頗る廣濶なり、即ち濠洲東岸にありては南緯二十七度以北に、西岸は南緯二十九度以北に

二　錫蘭シンジユガヒ (Margaritifera vulgaris, Schumacher)

所謂印度眞珠を産する介なり、即ち錫蘭島と大陸の間なるマナー灣及びパーク海峽に多く大陸南沿岸にも産す、其他本種の分布は頗る廣く、波斯灣、紅海、亞弗利加東岸、馬來半島、ニユーギニア沿岸よりトーレス海峽を經て濠洲沿岸に至るまで皆これを産するなり。この殼は市場にて "Lingah Shell of Persian Gulf" 又濠洲産のものは "Australian Lingah" 等と稱せらる。

ゼームソンは本邦産のシンジユガヒ M. martensii は本種に屬するものにして、只地方的變態なるべしと云へり。其他サンドキッチ (Sandwich) 列島に産する M. nebulosa Conrad. 東南太平洋にあるピトケーン (Pitcairn) 島に産する M. pitcairnensis 又はフィージー島の M. lucida 等も亦本種の地方的變態ならんかと云ふ。

三　Margaritifera lentiginosa Reeve

龍動市場にて "White Banda Shell" と唱ふるものなり、セレベス (Celebes) 及びモルッカ (Molucca) 群島に漁せらる。

四　Margaritifera, radiata, Leach

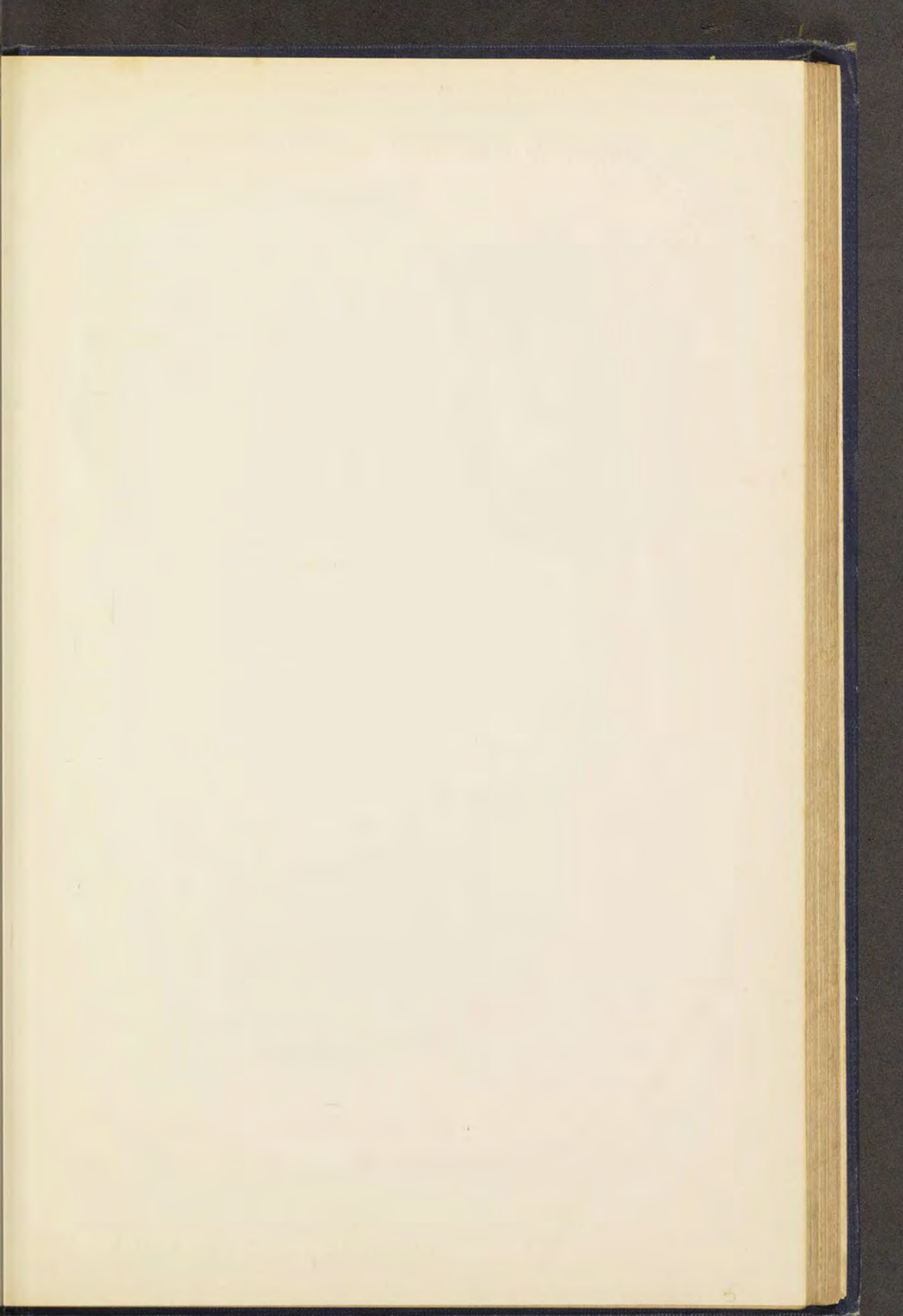
第十九圖

シンジユガヒ左殼外面(約四分ノ三大)

第二十圖

シンジユガヒ右殼內面

第廿一圖

錫蘭シンジユガヒ　(約三分ノ二大)

つ先年志州英虞灣の介を移植したることありしも、其の効果著しからず、現今此處に產するもの僅少にして漁獲するに足らず、反て內海外なる淡路福良灣、或は日向浦尻灣に饒產す。

本種の形狀は印度に產する M. vulgaris に酷似せり、其の異なる點を擧ぐれば、殼外側の色なり、即ち印度產のものは樺色なるに反し本邦のものは黑し、然れども稀に樺色のものなきに非ず、これにありては印度產のものと區別し難し、又棲息狀態に於て甚だしき相違を見るなり、彼にありては比較的深處にありて且つ外海に棲息し、時に潮流の爲めに數哩押し流さるゝことあり、故に潮流は可恐害物なりとす、然るに本邦のものは總て澳灣內にありて、七尋以上に棲息せるもの稀なり、從て潮流の影響少なく彼の如く押し流さるゝが如き憂なし。

この殼の用途は、本邦に於て安價なる釦を製造する原料に用ひらる、輸出せらるることあるも少量なり、龍動市場にてこれを "Japan Lingah Shell" と稱す。

本種の如き總て小形の殼は、市場にて "Lingahs" と稱すこれに屬するものには尙次の種類あり。

一　シンジユガヒ (Margaritifera martensi, Dunker)

第十九、廿の兩圖は本邦に產するシンジユガヒ一名アコヤガヒの介殼なり。第十九圖は左殼の外面第廿圖は右殼の內面にして、右殼は左殼よりも稍深く、その中央部稍後方に偏して大なる腎臟形の肉柱痕あり。此標本は凡三四年の齡に相當するものなるを以て、殼の厚さ餘り大ならざるも、更に高齡なる介にありては蝶番及び嘴(Umbo)の部分甚厚きを以て、一目してその老介なることを知る。余の曾て對州淺茅灣大船越附近にて得たるものは、海中にありて天命を全うして死し、介殼のみ横はれるを發見せしものなるが、其命數を察するに、恐らく十五年以上を經たるものならん。

この種は本邦に於ては琉球列島、鹿兒島縣下甑島(此處には舊藩主が移植せられたるなりと傳ふ)九州、四國、山陰、山陽、能州、若州、淡路、並に紀州より志州に至る沿岸に散在せる澳灣內、及び駿州清水灣等に產するなり、即ち本土の日本海面にありては北緯三十七度半、太平洋面にありては三十五度半、以南に於ける好適なる澳灣內には多少これを產するものなり、但し瀨戶內海に於ては自然に捿息せるものあり、且

多く、今一々之れを詳說すること容易ならざるを以て、玆には唯〻經濟上よりして重要なるシンジユガヒ科貝類のみを列擧して其性質を記載せんとす。

シンジユガヒ科貝類の分類は、其介殼の形狀に從ふものなれども、この介殼の形狀は、其個體の棲息の狀態によりて、甚だしく變化するものなれば、同種に屬するものにても、個々大なる差違を現はすものなり、且つ從來眞珠を產する種類にて、稍〻大形のものには、殆ど皆(Meleagrina margaritifera)と命名せられたり。例へばカリフオルニア灣に產するものにも、タヒチ島のものにも、この名を附せられ、又濠洲產のシロテフにもこの名を呼ぶものありしなり。余は先年この分類を企圖したりしも、引用書の缺乏と、標品の少なきの故に、其不能なるを諦らめ居たりしが、偶々濠洲に行きたれば、大に標品を聚集せんとせる時、恰もセームソンの論文出づ、同氏は英國博物館所藏の標品と、龍動市場に集まる商品に依り、豐富なる材料を得て查定したるが故に、其所說は稍〻正確にして從來の紛雜を一掃したるの感あり。即ち玆に氏の分類に從ふことゝせり。

眞珠の母貝

眞珠を産す可き母貝の種類は既に緒論に於て概說したる處なるが、全世界の漁場に於て漁獲せられつゝある貝は、其目的に依りて、分つて二類とすることを得可し。即ち一は貝中に存する眞珠を目的として漁獲せらるゝものにして、他は介殼厚く且つ大にして、眞珠の有無に係らず、介殼を目的として漁獲せらるゝものなり。前者の好例は錫蘭及びヴェネズエラの眞珠貝にして、波斯灣、日本、濠太利亞のシンジユガヒも亦之れに屬す。

後者の好例としてはトーレス海峽、マレー群島の眞珠貝を擧ぐ可し。而してメキシコ、パナマ紅海島の貝は兩者の中間に位するものにして、介殼と眞珠とを併せて目的とせらるゝものなり。

眞珠貝介殼の用途は種々あれども、其最主要なるものは釦の製造にして、介殼內面の光澤ある眞珠層を利用するなり、從つて、介殼としての價額の大なるものは、所謂「本口」を產す可きシンジユガヒ科貝類なりとす、眞珠を產する母貝の種類は甚だ

にも亦先端を割りたる竹箸を以てす、施術を了りたる貝は、深二尺乃至五尺の池中に五六寸を隔てゝ配列し置き、爾來毎月食餌として人糞を投與し、九月に至りて、貝を取り出し、小刀を用ひて介殼に附着せる眞珠を切り離す、核若し珠母の球なれば其儘なれども、鉛若しくは土なるときは一面より之れを削り去りて蠟を以て其腔を充塡し、更に珠母の小片を以て、其傷口を覆ふなり。此方法一度歐洲に報告せられてより、之れに倣ひて眞珠の人工形成を試みたる者決して少からず、例へば千七百五十一年より五十四年に至る間、ヘデンベルグ(Frederick Hedenberg)は瑞典に於て一個三百弗の眞珠を作り得たりと云ひ、芬蘭にては、白蠟を以て魚の形を作りたる物を貝中に挿入して、之れに眞珠層を被らしめたりといひ、一千八百八十四年ブランドレー(Bouchon Brandley)亦之に類する方法を案出したりといひ、其例實に枚擧に遑あらず。然れども如上の方法に依りて得らる可き眞珠は眞の眞珠にあらずして、到底天然に產する袋眞珠に及ぶべきものに非ず。吾人は天然に產する袋眞珠の成因を明にし、品質に於て實際之れに匹敵すべき良眞珠を作らしむる方法を得るに至つて、始めて人工眞珠形成の發明を爲し得たるものと謂ふを得可きなり。

のを取りて貝中に挿入し、爾後百日間毎日一回宛、人參其他植物の根の粉末を蜂蜜を以て練りて米粒大にしたるものを與ふるなりといふ。然れども實際かゝる方法にて人工眞珠形成を爲し得らるゝものに非ざれば、右に擧げたる方法の中には誤り傳へられたる點多かるべきも、當時支那人が何等か人工眞珠を作るに有効なる方法を案出して、實行しつゝありし事は疑なかる可し。

歐羅巴にて始めて人工眞珠に就て世人の注意を惹きたるは先に述べたるリンネの發明なりとす、而して其方法は介殼に穴を穿つものなりと傳へらるれども、此方法にては到底眞珠を作り得べきものにあらざること既に云へるが如し。近頃ヘルドマンの調ぶる所に據れば、リンネの秘法は單に介殼に穴を穿つにあらずして、孔を通して内部に細き銀線の先端に石灰石の小球を附したるものを挿入し置くものなりしといふ。然るに之れと同樣なる人工眞珠形成法は既に數世紀前より支那に於て行はれ居たりき、其方法は毎年五六月の頃、湖水より取り上げたる大なる蚌に珠母又は土を以て作りたる球、或は鉛を以て作りたる佛像の如きものに、樟腦の油を塗りて入るるなり、貝を開くには竹箆を以てし、球又は佛像を入るゝ

眞珠の人工形成

西暦第三世紀に於て、希臘の文學者フィロスッラータス(Philostratus)は、紅海の亞刺比亞人が人工的に眞珠を形る方法なりとて、彼國人の間に流布せしものを記載せり。其方法は、油を海面に注ぎて波を生せざらしめ、海底に潜り入りて貝を開き、或鋭利なる器械を貝の肉中に刺し入れて、液汁を取り、之れを適當なる大さ及び形に凝固せしむるなり、之れ勿論取るに足らざる妄説なるが、古代には多少かゝる方法を試みたる者無かりしにも非る可し。

一千七百三十四年アントルコーレ(E. X. de Entrecolles)が北京より發したる書束に依れば、當時支那にては既に人工眞珠形成法行はれ、若干の人民は此業に從ひたりしといふ。而して彼等が用ひし方法とは、先づ一器に半分程水を盛り、之れに最も大なる貝を入れて、女子の近づく能はず、又雞犬の聲をも聞かざる所にして、自由に露滴を受くる樣なる或隔絕したる場合に持ち行き、豫めケシ玉を磨り碎きて粉末とし、柊樹の液汁を以て練りて、豌豆大の丸子となし、弱き日光にて乾かしたるも

小計	一五、七五〇	八七五、〇〇〇	二、五〇〇、〇〇〇
亞米利加洲			
合衆國河川	八、五〇〇	六五〇、〇〇〇	三五〇、〇〇〇
ベネジユラ	一、九〇〇	二七五、〇〇〇	一〇、〇〇〇
墨西哥	一、二五〇	二一〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇
パナマ	四〇〇	四〇、〇〇〇	七五、〇〇〇
雜	一、〇〇〇	七五、〇〇〇	二五、〇〇〇
小計	一三、〇五〇	一、二五〇、〇〇〇	六六〇、〇〇〇
合計	一〇七、七五〇	八、一四〇、〇〇〇	三、六〇八、〇〇〇

波斯灣	三五、〇〇〇人	四、〇〇〇、〇〇〇弗	一一〇、〇〇〇弗
錫蘭	一八、五〇〇	一、二〇〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇
印度	一、二五〇	一〇〇、〇〇〇	九五、〇〇〇
紅海亞典灣等	三、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	一五〇、〇〇〇
支那、日本、西比利亞	二〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
小計	七七、七五〇	五、九〇〇、〇〇〇	四四五、〇〇〇
歐羅巴洲			
英國	二〇〇	一五、〇〇〇	
歐洲大陸	一、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	三、〇〇〇
小計	一、二〇〇	一一五、〇〇〇	三、〇〇〇
大平洋諸島			
南洋諸島	四、五〇〇	一二五、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
濠州沿岸	六、二五〇	四五〇、〇〇〇	一、二〇〇、〇〇〇
馬來群島	五、〇〇〇	三〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇

於ける眞珠漁業は年々使用せる人員を記錄しあり、又糶賣せられたる眞珠の價額よりして、其市場に送らるゝ價額を推定することを得べく、濠洲ベネヂユラ等に於ても亦同樣なり、又波斯灣、カリフオルニア灣、紅海、及び太平洋中諸島に於ては眞珠漁は地方民の定業なるを以て、之れによつて生計を營める人口は稍精確に調査することを得可し、然れども亞米利加、歐羅巴、亞細亞の河湖に產する眞珠の價額及び之れを漁獲する人民の員數に至つては、遂に之を精確に知る由なし。況んや眞珠は老幼男女の別なく之れを獲ることあり、又價額は眞珠が此等の土民より寶石商の手に移り若しくは商人より商人に轉ずる度每に大なる變動を見るものなるに於てをや、されば吾人は到底正確なる統計を擧ぐること能はざるも、左にクンツが擧げたる一千九百六年度の概計を紹介す可し。但し左表に揭ぐる人員中には、介殼を開き、眞珠を洗ひ、若しくは監視炊事其他の雜用に從事する者を含まざるものとす。

地方	漁夫員數	眞珠地方價額	介殼地方價額
亞細亞州			

就中獨領東亞非利加地方の南部と、蘭領亞非利加の附近に存在せるもの稍盛なり。濠洲の澳灣は大抵眞珠を產すれども、漁業の最も盛なるは、其北海岸、スールー群島及びガムビール、フイジイ、ペンリイン等南太平洋中の諸島なり。

歐羅巴洲の海岸にて、眞珠漁場と稱す可きものなく、歐洲產眞珠の大部分は河川に產する淡水眞珠なり。

南亞米利加洲にはベネジユラの海岸に重要なる漁場あり、コロンブスの發見したるものなり、其他眞珠はパナマ、エクワドル、ペルー等の地方にも產す。

北亞米利加洲にてはカリフオルニア灣メキシコ灣等に海產の眞珠を產すれども、最も著明なるは淡水眞珠にして、特にミスシツピー河の流域に於ける漁業なりとす。

右に述べたる各眞珠漁場に於て、每年使用する漁夫其他の人員と、漁獲さるゝ眞珠の價額とは、年に依りて變動あり、且つ各漁場の組織區々にして之れが統計を知ること能はざるを以て、地球上に於て年々幾何の人員が眞珠漁業に從へるや、幾何の價額の眞珠が寶石市場に送らるゝかを知るは頗る困難なる事なり。錫蘭島に

きものに非ればなり。從つて單に重量の多寡を以て眞珠の價額を打算すること難し。これ其の大小の差の外、光澤形狀色彩等個々特有の性質一として其價値に影響せざるものなければなり。而して此等の性質の或ものは眞珠を產せし母貝の品質に從つて變化するものなれば、世界各地の眞珠漁場より產出する眞珠皆各特殊の趣を存せり。

眞珠の產地は地球上各地に散在して存し、六大洲皆之れを有すれども、尤も好適なる漁場と目せらるゝものは、其數甚だ多からず、古來眞珠の產地として最も名高く、且つ現時に於ても其產額全世界漁場中の第一位を占むるものは、波斯灣なり、之れと並び稱せられて、昔より有名なるは、印度錫蘭島即ちマナー灣なるが、此漁場は時に莫大なる眞珠を收獲することあれども、其產額は年によりて大なる變動あり。紅海の眞珠漁場は往時頗る盛況を呈せしが、今日に在りては著しく衰微せり。此外亞細亞洲中に於て注意すべき漁場は、アデン灣メルギー群島、支那日本朝鮮暹羅の海岸及び支那滿州西比利亞の河湖なり。

紅海及びアデン灣の漁場を除けば、亞非利加洲の漁場は孰れも其規模大ならず、

如き光澤を有するに過ぎざるなり。之れに反し、眞のシンジユガヒ科に屬する貝より得らるゝ眞珠は、其光澤最も喜ぶ可しとす。此關係は眞珠の色彩に關しても全く同樣なり、即ちイノカヒの如く介殼の內面黑色紫色を帶ぶるものに在りては、其中に生ずる眞珠も亦黑色紫色なるを常とし、アハビの如く紫綠色なる介殼を有する貝にありては、產する眞珠も亦紫綠色なるもの多し。此眞珠の色彩は眞珠の價値に大關係あるものにして、最も尊重せらるゝ色彩は硏磨したる鋼鐵若しくは新鮮なる鉛の斷面の如きものなりとす、黃金色なるものは銀色なるものに劣れり、云ふ迄もなく、眞珠の色彩は、之を利用する技巧によりて、著るしく引立ちて見ゆるものにして、眞珠細工人は實に其意匠に苦心するものなり。此點に於ては眞珠の形狀も亦又甚だ大切なるものなり。概して眞珠は眞球形なるを最良とし、之に次では楕圓形、茄子形等、正形なるものにして不規則形なるは最も劣れるものなり、但し形狀の不全なるものも、特殊の利用法を講じて甚だ便なる場合なきにしも非ず。

眞珠の價額は、少しく大さを增すに從つて、甚だしく高騰すること他の寶石に同じ。之れ勿論寶玉は個々獨特のものにして、金銀の如く自由に融合し分割し得べ

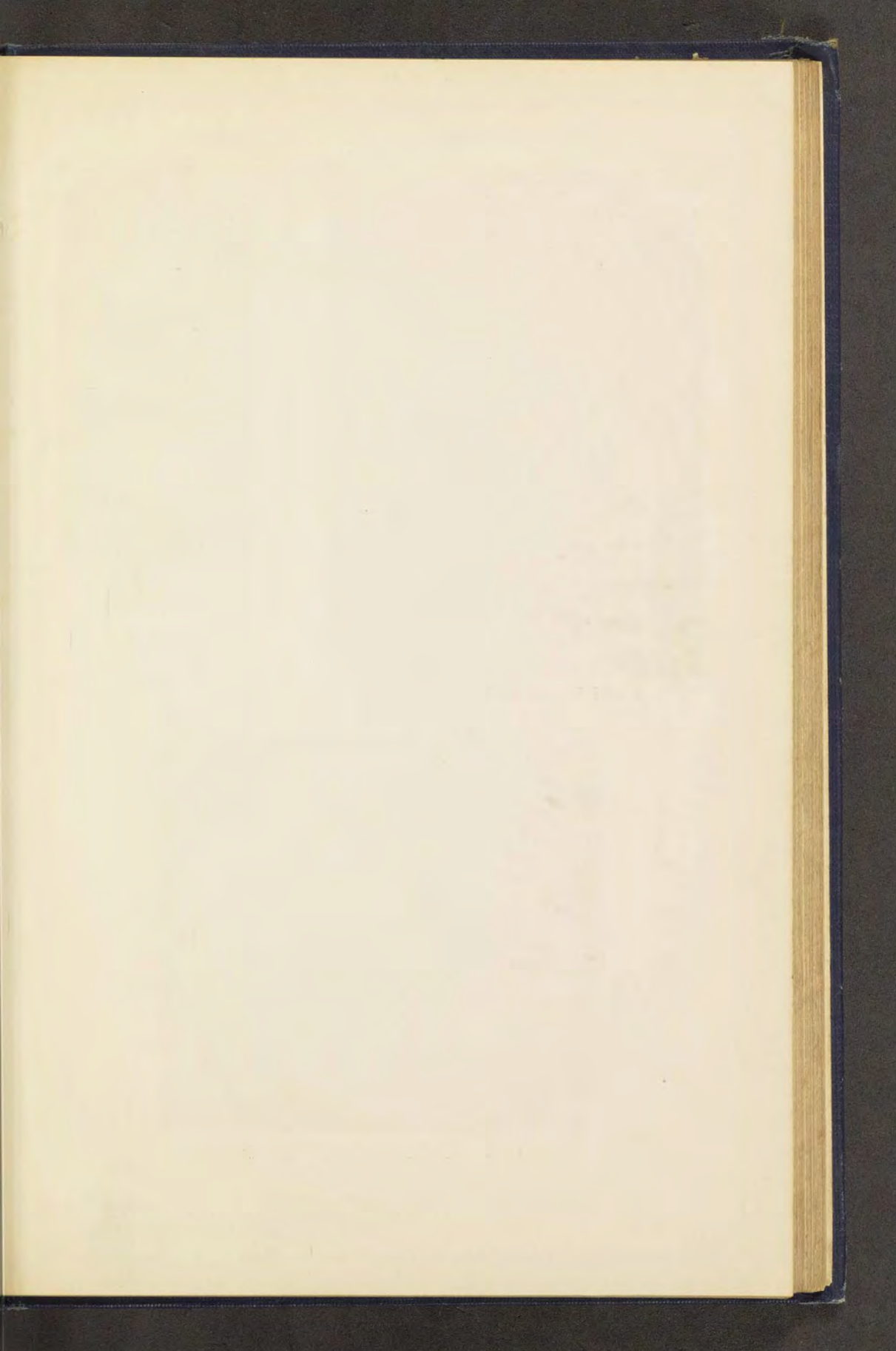
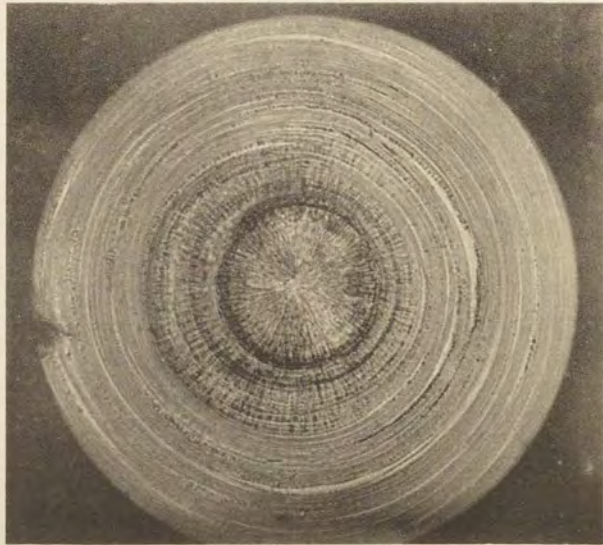
眞珠の性質と産額

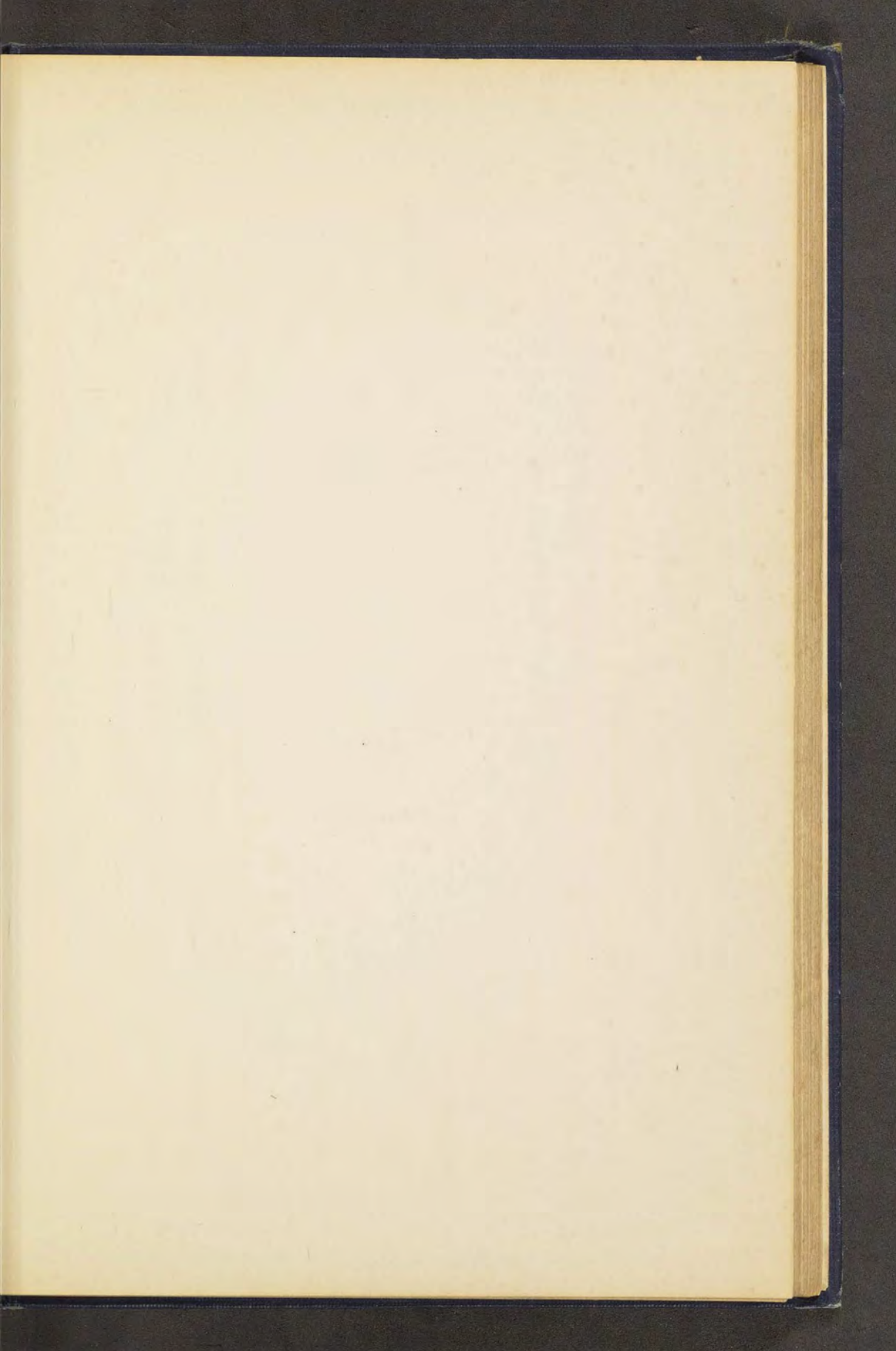
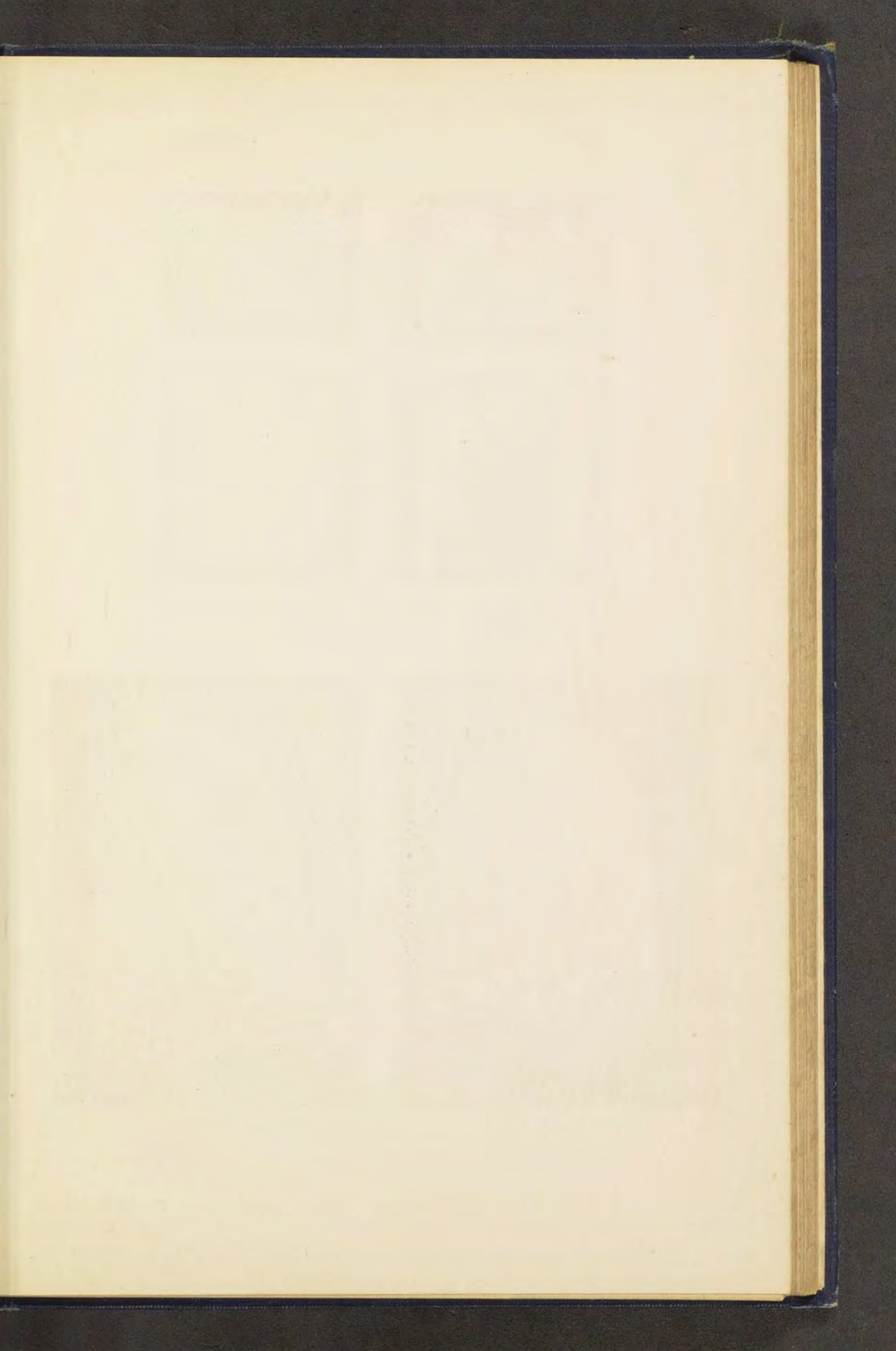
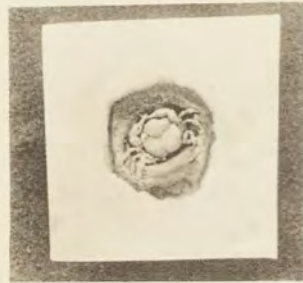
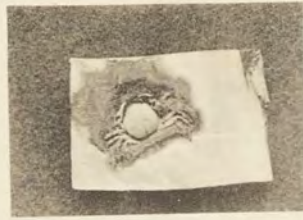
眞珠が炭酸石灰と有機質とより成れる層置的物質なることは既に云へるが如し、而して此等二種の成分の割合は歐米の河湖に産する淡水眞珠にありても、濠洲印度の海中に生ずる眞珠にありても、殆同一なるものにして、百分中九一•七二の炭酸石灰、五•九四の有機質及び二•三四の水分より成れり。眞珠の比重は測定したる學者に依りて少許の差あれども、通常二乃至二•七五なるものとす。

眞珠の最も尊重せらるゝ特徴は、其一種絶妙なる光澤にあり。此光澤や他の寶石の爛として輝けるものとは自ら異り、眞に眞珠に特有なるものなり。而して此光澤は表層の構造と眞珠を形づくれる物質の性質とに因るものなれば、表面の凹凸粗雜なるもの、若しくは眞珠質に不純物を交ふるものは、此光澤を缺くと勿論なり。前にも云へる如く、眞珠を作れる物質は、介殼の內面を覆へる物質と同一なるを以て、一般に云へば、眞珠の光澤は其母貝の品質如何に依りて異れるなり。アサリ、シャコの如く介殼の內面單に純白なる貝にありては之より生ずる眞珠は陶器の

第十六圖
半眞珠層に被れる
石灰凝塊

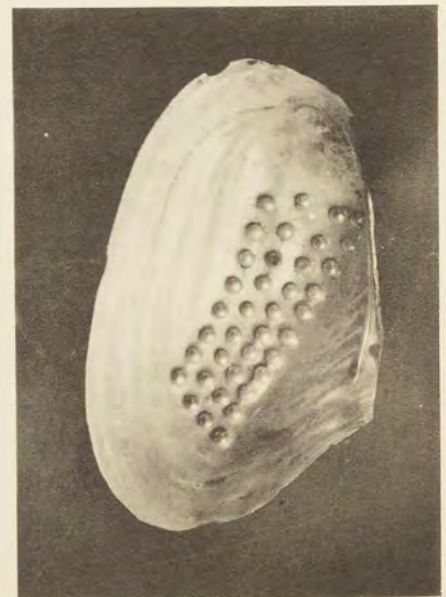
第十七圖　天然眞珠斷面（七十五倍）

第十八圖　同上中心部（百五十倍）

多數の石灰凝塊中には往々其の半面に眞珠層を被れる所謂半眞珠を見ることあり、其狀第十六圖に示せるが如し、言ふ迄もなく半眞珠は眞珠物質を分泌する細胞層が袋狀を爲さずして不完全に凝塊を被包せる場合に生ずるものにあらずして、若し此細胞層進んで凝塊の全面を蓋ふに至らば、即ち全き眞珠を生ずるなり。從つてかくの如くにして生じたる眞珠は、その核として石灰凝塊を有す可し、而して實際かくの如き眞珠ありやと云ふに、凝塊を核とせる眞珠は日本に於ては決して尠からざるなり。ヘルドマンが錫蘭眞珠に就て研究した結果によれば、袋眞珠は縧蟲類の寄生に依りて生ずれども、筋肉眞珠の核は寄生蟲に非ずして必ず石灰凝塊なりといへり。本邦產の眞珠に於て余が從來研究せる所によるに、凝塊を核とせる眞珠は比較的多くして、六七年以上の老介にありては之れを生ずること決して稀ならず、第十七圖は天然眞珠の斷面を七十五倍して見たる顯微鏡寫眞にして、第十八圖は其中央部のみを百五十倍に擴大したるものなるが此寫眞は石灰凝塊を核とせるものなり。

することあり、或は何物もなくして所謂想像的凝集中心なることあり、この石灰凝塊を酸に處理すれば、炭酸瓦斯を放ちて溶解し唯少量の有機物を殘す、即ちこの石灰凝塊は眞珠と同じく有機物と炭酸石灰より成るも、その構造に差ありて、眞珠は薄層が重疊圍繞して造られ、凝塊は針狀の結晶石灰が放射狀に凝集して成れを異れりとす。凝塊の形は球形なるを常とすれども時に數個相合して歪形をなすものあり、その大さ大なるは直徑一ミリより小なるは〇・一ミリあり。石灰凝塊は眞珠介のみ產するものに非ず、蚌にもイノカヒにも又トコブシにも見らるゝことあり。ゼームソンはアサリに甚だ多しと云へり。元來凝塊は眞珠とは別物にして、眞珠の如く眞珠袋即ち細胞層の袋を有せず、結組織中にありて一團の細胞の不規則なる集合中に生ずるものなり、而してこれを生ずる源因に就てはゼームソンは寄生蟲に關係ありとし、アサリに於てはジストマ幼蟲が貝の結組織中に入りて蟲體が分解したる結果石灰化して凝塊を作ると記載せり。然れども余の見たる本邦の眞珠貝にありては寄生蟲の痕跡だも無くして多數の凝塊の存在することあれば、此等は到底ゼームソンの云ふが如く寄生蟲に源因するものと爲すこと能はず。

第十五圖

第十二圖　眞珠層中に埋沒したる蟹

第十三圖
小球に眞珠層を被らしめたるもの

第十四圖
小像に眞珠層を被らしめたるもの

細き銀線の先端に石灰石の小球を附したるものを挿入し置くものなりと謂ふ、果して然らば挿入したる球が、眞珠層を蒙りて眞珠となり得ざるに非ること上來述べたる處によりて明なるが、然し乍らかゝる方法によりて得可きものは單に他物に珠母の薄層を附着せしめたるに止まり、到底眞の眞珠に非ること論を俟たず。

明治三十年余が志州英虞灣に獲たる一眞珠貝は七十三個の眞珠を有したりき、勿論其中には双子眞珠も尠からざりしが、奇異なることは眞珠は凡て貝の右側にのみ存し、左側には一個も見當らざりき、多くの場合にかく多數の眞珠を生ずる時には左右兩側に存するものなるが、この貝には只右側にのみ眞珠を生じたりき。然るに此貝には此七十三個の眞珠の外肉中に夥多の石灰凝塊ありて、多くは筋中に存せしが、肉を加里に處理し、組織を溶解せしめて肉中より得たる凝塊は總數實に五百個に上りたりき。第十五圖は此七十三個の眞珠のありし位置を示すものなり。

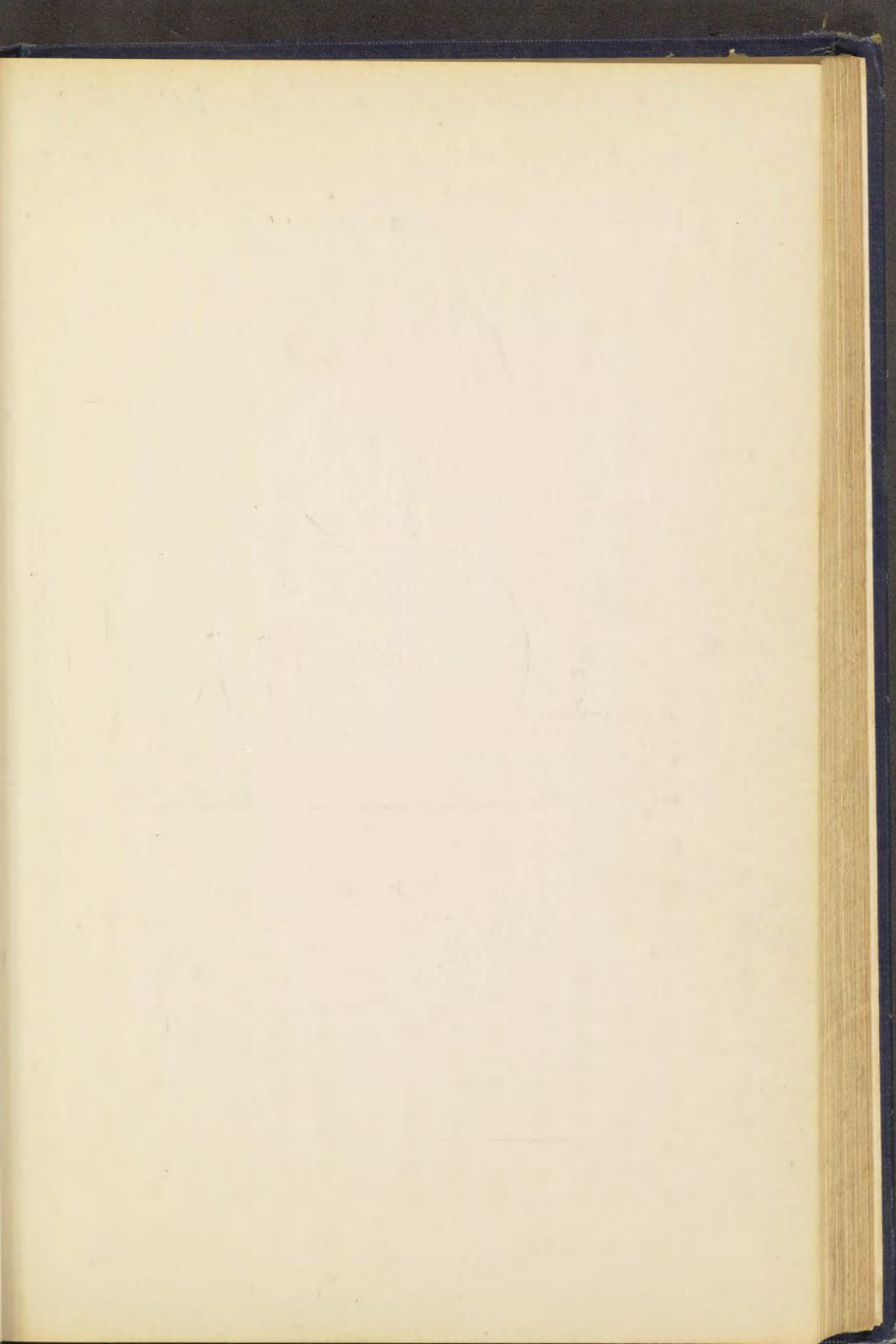
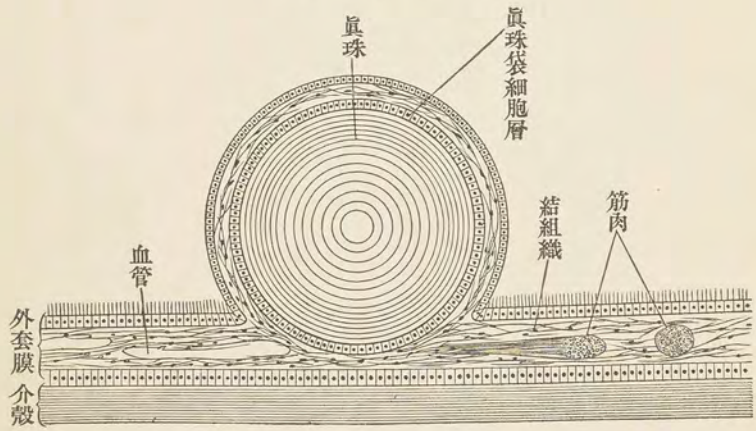
石灰凝塊(Concrestion or kalcosphaeriten)とは針狀の炭酸石灰の放射狀に凝結したるものにして、多くは透明無色表面粗にして滑かならず、中心或は有色の小凝點の存

介殼との間に入り込むときは、外套膜は蟹を蓋ひ包むに至り、恰も眞珠が介殼眞珠に變ずると同樣なる運命に陷るなり。元來外套膜の外細胞は膜の形狀如何に拘らず、又外套膜と介殼の間に他物の有無に拘はらず、常に眞珠物質を分泌するものなるが故に、蟹は眞珠層を以て被はれ始め眞珠層益分泌せられて殼厚くなるときは、遂に蟹を埋沒し了るなり。第十一圖はかくの如くにして貝中に埋沒せられたる魚類にして、第十二圖は同樣に埋沒せられたる蟹を有する介殼を其層に沿ひて割開きて見たるものなり。

斯くの如く、外套膜と介殼との間に陷入したる物體が、眞珠層に因りて介殼內面に膠着するに至る事は、既に早くより人の知れる所にして、此理を應用して人工を以て附着眞珠を作ることは、數世紀以前よりして諸國に於て試みられたるものにして、支那人は球形若しくは佛像の形をなせる物體を挿入して、之れに眞珠層を被着せしむることあり、第十三圖及び第十四圖は其寫眞なり、之と同樣なる方法は歐羅巴諸國に於ても度々試みられたるものにして、其例實に多し。近頃ヘルドマンの爲せる調査によるに、リンネの秘法も單に介殼に孔を穿つに非ずして、孔を通して、

第八圖

第九圖

第十圖

眞珠は珠中に埋沒せらるゝに至り、遂には外部より認むること能はざるに至ることと第十圖に示せるが如し。濠洲產の大蝶介殼は非常に厚きものなるが、この殼中往々貴き眞珠の埋沒して存するあり、外部よりはその存在を認め得ざるが爲め、介殼細工人が殼を切りて其の斷面を見て始めて眞珠の存せしことを知ることも少からず、若し未だ全然埋沒せずして殼面に少しく凸起を現はして居る時はその部分を注意して碎きて眞珠を取り出すなり、かくの如くして得たる眞珠にも、時に非常に大形美麗なるものあるが故に、凸面あるシロテフガヒの殼は埋沒せる眞珠を目當てとして賣買せらるゝ、こは云ふ迄もなく投機的にして、殼內には如何なる眞珠が存在するやを知らずして賣買するものなり、時に又凸起の內に眞珠の無きことありて、或は空虛なることあり、或は一種の蟹の存することありて、殼を買ひたる者大なる損害を蒙るなり。

然らば何故に蟹が介殼內に埋めらるゝかといふに、シロテフガヒの外套腔內には Pinnthères 屬の蟹と Alpheus avarus と稱する蝦の寄居すること稀ならず、又時には小魚フィラスファー (Filasfer) の寄居せることあり、この寄居蟹が誤りて貝の外套膜と

眞珠は、外套室内に向て故障なく成長することを得るも、內臟部にありては眞珠は肝臟生殖腺等の實質中に入りて成長するが故に、或る度迄成長すれば眞珠袋は外套膜の外細胞層と融合して介殼眞珠に變ずるなり。又筋肉眞珠は筋肉中にあるが故に、元より或限度を超へて成長することを得ず、遂には皆附着介殼眞珠となるなり。此故に少しく老年の介殼を見るに、內臟部に當る處には往々ケシダマが殼に附着して作れる小介殼眞珠を現はすことあり。又肉柱痕に時に多數の介殼眞珠ありて凹凸甚だしきを認むること多し。

介殼眞珠並に外套膜の不平等なる眞珠物質の分泌によりて介殼面に凸凹を生じたるものが偶然種々の形狀を現はすことありて、或は動物の形或は人の顏に似たるものを生ず、サビール、ケントの所藏せるものにビスマルクの顏に酷似したるものあり。又嘗て神田の魚商人が珍藏せるものに鮑殼の內面に入山の釋迦と見らる可き形を存するものありしが、此等皆偶然の結果に外ならざるなり。

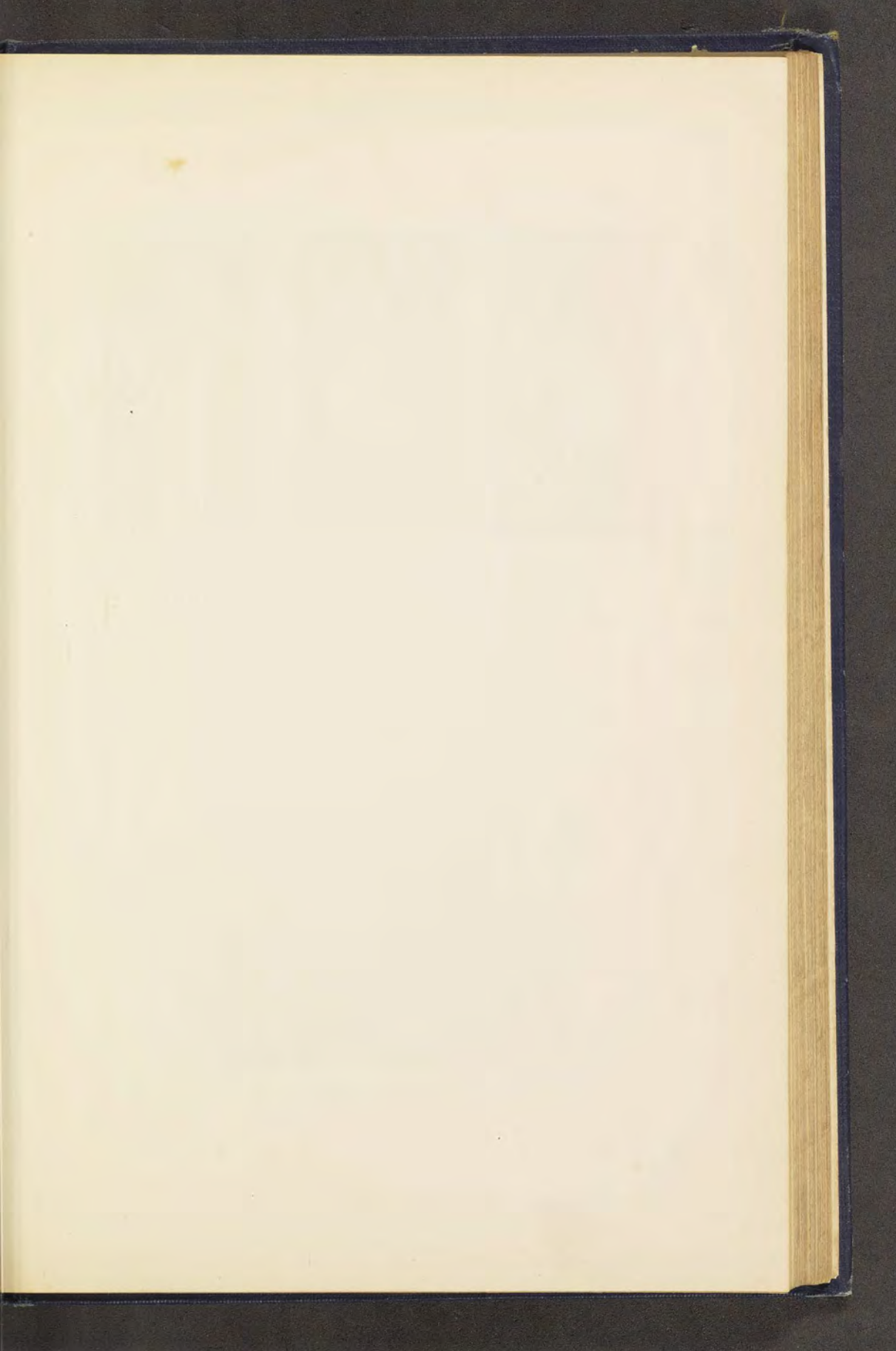
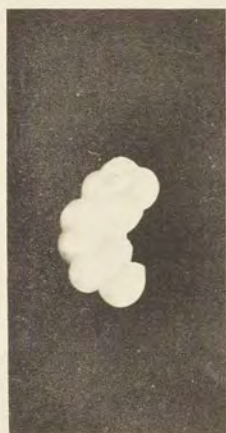
介殼眞珠は其始め附着したる當時にありては、接着せる部分極めて小く、恰も盃上に眞珠の轉がれるが如きものなるが、漸々介殼が分泌せられて厚を增すに從て、

第五圖
「サウザンクロス」

第六圖

第七圖

十一個が結合したる眞珠

第十一圖　眞珠層を被りたる小魚

は九個の眞珠が偶然十字架狀に結合し、更に介殼に附着したものに過ぎずと想はる、されば之れを生じたるシロテフガヒは一個にて九個の大眞珠を產したるなり。

第八圖は日高貴族院議員が所有せらるゝ珍眞珠にして十一個の眞珠の結合したるものなり。元來數個の獨立したる眞珠が互に相接着して双子眞珠(Twin pearl)となり、之れが又殼に附着して介殼眞珠となれば即ちサウザン、クロスの如き珍眞珠が生ずるなり、第八圖は大蝶介より得たるものにして無數の眞珠互に結合したる眞珠の一塊なり。

今如何なる理由如何なる場合に、双子眞珠若しくは介殼眞珠を生ずるかと云ふに、元來眞珠は第八圖に示せるが如く外套膜の結組織或は筋肉中の結組織內に生ずるものなるが、今若し數個の眞珠が相隣りて生じ其の成長增大するに從て相接觸するに至れば、獨立したる數多の眞珠融合して一塊となり、玆に双子眞珠を形成するなり。而して若し眞珠が一部外套膜の外面に露出して介殼に接着するに至れば、眞珠は遂に介殼に附着して介殼眞珠を形る可し。介殼眞珠の多く生ずるは貝體の內臟部に生ずる袋眞珠及び筋肉眞珠なり。そは外套膜の邊緣に生ずる袋

事多けれども、又唯一個の貝中に數個の立派なる眞珠相並びて存することあり。第五圖に示せるは世界に有名なるサウザン、クロスと命名せられたる眞珠にして、一千八百七十四年に西濠洲コサックの沖にて漁獲せられしシロテフガヒ中に發見せられたるものなり、こは七個の眞珠直線に列びその兩側に各一個附着し、九個の眞珠集りて十字架の如き形狀を呈せるものなり。この眞珠は介殼に附着せる所謂附着眞珠にして、その附着せる位置は介殼の殆ど正中線にあり、縱の七個は貝の脊腹に平行せり、此くの如き異狀なる眞珠の核に就ては種々の說ありて、スチーラーは西濠洲の海に普通なる一種の海藻 Hormosira banksii その核を爲せりと云へり、蓋しこの海藻は多數の塊狀物珠數繫ぎを爲して、恰もこの眞珠の縱の七個並べるに似たるより斯く想像したるものならん、此眞珠は價十萬圓と稱する高價のものなれば眞珠を碎きて內部を見ること能はず、果して何物が核を爲せるかを證明すること難し。サビール、ケント (Saville kent) はこれに就て、X光線は眞珠に不透性なるが、將來XX或はXXX光線の發見せられて、眞珠を透すべき光線作られたらんには、此核の實質を確め得るならんと云へり。然れども、要するにサウザン、クロス

なるが、當時この事實新聞紙上に誤報せられて、ヂユボアは貝に人工を以て眞珠を作らしむる秘法を發見したるが如くに書き立て、紙面の大部分に寫眞抔を入れて吹聽したることありき。然れどもこの妙案も遂にその目的を達せざるものゝ如く、今日迄杳として何等の消息を聞かず、千八百九十八年伊國に於て寄生蟲説者の一人なるコンバなる人ヂユボアと同樣なる事を企畫せることありて、これも當時の新聞紙はコンバが一方法を發明し、同人の法を以てすれば一個の貝に數個の眞珠を生ずと云ひ、數百萬圓の大會社を興さんとす等記したることありしが、此擧も亦遂に烟の如くに消へ去りたるものゝ如し。

然るに現今各國政府は年々莫大なる費用を投じ、或は特に研究所を設置し、又多數の學者は錫蘭に南洋に濠洲方面に將た墨國に眞珠の研究に盡粹しつゝあるが故に、吾人が遂に其の目的を達して人工に依りて眞珠を任意に產出せしめ得るに至るは必ず近き將來にあらん。

抑も眞珠形成の原因が寄生蟲なりとすれば、一個の貝に多數の眞珠が存在すること敢て怪むに足らず、實際に於て多數の貝を開くも唯一の眞珠をも見出さざる

て貝に眞珠を作らしむることの出來得可きや否やも解決せらるゝものと云はざる可からず。ゼームソンはその著書に記して曰く、眞珠形成の源因はヂストマの幼蟲に歸するものなれば、該ヂストマを盛に繁殖せしめて可成多數の貝に寄生せしめたらんには、勢ひ多數の眞珠が産出す可き理なり、假令貝を一個宛取りて一種の作業方法を加へて眞珠を作らしむることを得るとするも、人工によりて寄生蟲を貝に寄生せしむる方法に比すれば遙に拙劣なること明かなりと、即ちゼームソンの發案は例ふれば、鼠を蕃殖せしめペスト菌を散布してペスト患者を多數に出さんとするが如きものにして、ヂストマ病に罹りたる貝が眞珠を作るものなるが故に、ヂストマを繁殖せしめて病貝を多數にせよと云ふものなり。然れども今日迄實際これを應用して眞珠を多數に産出せしめたるを聞かず。

ヂユボアアは南佛海岸のイノカヒ (Mytilus gallprovincialis) が一種のヂストマの寄生によりて眞珠を生ずることを確めこのイノカヒの棲息せる場所に移殖するに、南ナユニスのガベス灣の眞珠貝を以てせり。イノカヒに寄生せるヂストマをして眞珠貝にも寄生せしめ、以て眞珠を作らしめんとてなり。これは千九百三年のこと

は眞珠多く、何處には少しとか或は無し抔稱す。錫蘭の貝と本邦の貝とは甚だ酷似し、同種ならんとの說を持する學者ある程なるに、前述の如くに眞珠を生ずる割合に大差あり。蚌にありてもイノカヒにありても同樣にして、佛國のビリヤー港附近の海岸は到る處イノカヒが捿息せるも、特に多く眞珠を生ずるものは港内に捿める貝に限らるゝと云へり。かく捿息する場處に依りて眞珠を生ずる割合に相違あるは何故なるかと云ふに、こは眞珠形成の源因に關係するものと認む可し。

先きに述べたる眞珠は寄生蟲が源因となり、これが核となりて形成すると云ふ說にして果して眞なりとすれば、場所によりて貝の眞珠を生ずる割合の異るとも容易に說明せられ得可し、即ち寄生蟲病の流行地にある眞珠貝は多數の眞珠を生ずる理なり。近頃流行の眞珠貝養殖事業が進歩して如何に多數の貝を養殖し得るとするも、寄生蟲を繁殖せしめざれば多くの眞珠を得ること難かる可し。又甲地に於て如何に多數の眞珠を產出したりとするも、其割合は乙地に行はるゝものに非ず、何となれば、眞珠の多少は貝の多少に關係なく、核となるべき寄生蟲の多少に關係するを以てなり、而して既に眞珠形成の源因が明になりたる以上、人工を以

外套膜の邊緣に生じたる一個の袋眞珠に及ばざるものなり。

經驗あるシンジユガヒ養殖者の說に據れば、本邦產眞珠貝一萬個よりは平均三十圓の眞珠を得ると云ふ。然るに錫蘭に於ける眞珠貝（M. vulgaris）の價を見るに、過去百年間の記錄によれば、千個の貝二十圓乃至五十圓にて競賣せられたり、特に千九百五年の錫蘭眞珠漁は未曾有の大漁にして、漁獲せられたる貝の數實に八千百八十七萬個、貝一千個の最高價格は百二十四ルーピーに上り、政府の收入のみにても百六十七萬三千八百圓に達せり。之れに依りて見れば錫蘭の貝は日本に比して眞珠を生ずる割合も多大に、袋眞珠も甚だ夥多に生ずるもの丶如し（錫蘭の眞珠漁は眞珠のみを目的とし介殼と肉に價格なし）。反之、眞珠を生ずる割合極めて尠きシンジユガヒは地中海チユニスの海岸にあるものにして、此處の眞珠貝は元來スエズ運河の開通の結果紅海より移住したるものなるが、一個の眞珠を得るには千二百個乃至千五百個の貝を開くを要すと記載せらる。

同種の貝にありてもその棲息する場處によりて眞珠を生ずる割合に大差あり、本邦のシンジユガヒ棲息地に於ても、漁夫は狹き局處々々を區別して、何處の貝に

澤共に不良なりき。

さて筋肉眞珠(Muscle pearl)袋眞珠(Cyst Pearl)とはヘルドマンが貝體中に眞珠の存在する位置に依りて區別せる名稱なり。筋肉纖維が介殼に附着せる部分に生じたる眞珠を筋肉眞珠と稱す、肉柱即ち閉殼筋、足筋肉、及び外套膜の介殼に附着せる筋肉等に生ずる眞珠是なり。而して他の外套膜の組織中に生ずる眞珠は即袋眞珠と稱するものなるが、此袋眞珠には正形にして光澤も亦立派なるもの多し、特に外套膜の邊緣に生ずる袋眞珠は大形にして上乘なるもの多くして、世上の一個幾十圓幾百圓に價する眞珠は皆これに屬す。本邦所謂フクミダマ("Orient" pearl)即ち之なり。內臟部の外套膜に生ずる袋眞珠は正形なるも小なるを常とし、高價なるもの尠く、皆ケシダマ(Seed pearl)に屬するものなりとす。次に左右殼の蝶番の處に當る外套膜に生ずる袋眞珠は光澤良好にして大形なるものあるも歪形なるを常とす。ミヽダマ(Hinge pearl)即ちこれなり。筋肉眞珠に至りては常に小形なるが上に極めて不正形且つ粗面にして光澤不良、裝飾に用ゐらるゝよりも藥用に使はるゝ劣等の眞珠これに屬す。故に筋肉眞珠幾百千個あるもその價格は

四個の眞珠を有したるもの 二、	五個の眞珠を有したるもの 一、	六個の眞珠を有したるもの 二、
七個の眞珠を有したるもの 二、	九個の眞珠を有したるもの 一、	十個の眞珠を有したるもの 二、
十一個の眞珠を有したるもの 二、	十三個の眞珠を有したるもの 二、	廿一個の眞珠を有したるもの 一、

即ち二百個の内眞珠を有せるもの五十四個にして、眞珠の總數は百八十八個なりき。然るに其重量を計るに全量漸く九厘にして、眞珠商の評價に從へば漸く一圓に過ぎざりき。何故にかく輕く且低廉なりしかと云ふに、百八十八個の眞珠は大部分**筋肉眞珠**にして**袋眞珠**は僅に十九個、然かも內臟部の袋眞珠十五個小形のミヽダマ三個、唯一個外套膜の邊緣に存したりしも不幸歪形にして色彩光澤共に不良のものなりしが故なり。

一個の貝よりして更に多數の眞珠を生せしは大阪池田又九郎氏の所藏に係る土佐產貝の一例なり、余は池田氏の好意により之れを調査することを得たるに總計五百八個の眞珠を算したり。勿論此中には二個以上の眞珠の癒着せる双子眞珠あり、又介殼の內面に附着せるものも少からざりしを以て貝は實に約六百個以上の眞珠を產したりしなり。されども此場合にも眞珠は總て歪形にして色彩光

珠を生ずることは貝の老幼に無關係なりとす。然れども概して比較的大形の眞貝は老貝にありて幼貝には見られざるを常とす。元來眞珠も介殼も同質のものにして、只介殼は平坦にして眞珠は球形なるの差あるのみ、而して眞珠も亦介殼物質を分泌する細胞によりて分泌形成せられたるものなるを以て、一般に論ずれば、眞珠の半徑はその眞珠を生じたる介殼の厚さを超過すること能はず。假令ば稚貝が介殼を分泌し始むると同時に、貝體内に眞珠を生じたりとするも、介殼が五分の厚さとなれば眞珠の半徑も亦五分なり。右は一般の通則なりと思はるゝが、余が從來蒐集した材料にてはこの除外例あり、即ち介殼の厚さよりもその貝より生じたる眞珠の半徑の方大なる場合なきにしも非ず。然れどもこは介殼の成長よりも眞珠の分泌が多き場合にして寧ろ稀有のことなる可し。故に大形の眞珠は貝の厚き貝即ち老貝に見出さるゝ理なり。今本邦産眞珠貝（M. martensii）の眞珠を生ずる割合は如何と云ふに、余は志州英虞灣産の眞珠貝二百個を檢して、次の如き結果を得たり、但し所用の貝は七年以上九年位の比較的老貝なりき。

一個の眞珠を有したるもの　二十五、　二個の眞珠を有したるもの　八、　三個の眞珠を有したるもの　七、

茲にマッキントッシュの結果を表示すれば次の如し。

	大貝	小貝
一個の眞珠を有したるもの	百三十六、	十二、
二個の眞珠を有したるもの	六十七、	〇、
三個の眞珠を有したるもの	三十一、	五、
四個の眞珠を有したるもの	十五、	〇、
五個の眞珠を有したるもの	七、	一、
六個の眞珠を有したるもの	十四、	〇、
七個の眞珠を有したるもの	三、	〇、
八個以上の眞珠を有したるもの	七、	二、
合計	二百八十二、	二十、

この結果によれば、幼貝には眞珠尠く、大貝にはこれを生ずること多しと云はざる可からず。この事實は啻にイノカイのみならず眞珠貝にても蚌にても總て老貝には眞珠多く幼きものには尠し、又右の表の示すが如く、一個の貝にて多數の眞

一個の貝より生ずる眞珠の數

眞珠の尊重せらるゝ所以は、その光澤、その色彩の高潔淸淨なるに由るも、又その產出の極めて稀有なるに由らずんばあらず、實に貝の眞珠を生ずるは甚だ尠きに相違なし。乍然貝の種類によりて眞珠を生ずる割合に多少あり、例へばサヾエ、ニシの如きは眞珠を生ずること極めて、尠く、反之、イノカヒ、眞珠貝蚌の如きは比較的眞珠を生ずると多し。例へば千個のアハビより必ず一個の價額ある眞珠を發見すること難く、甞て蘇國テー河に於て眞珠漁の盛なりし時、經驗ある漁夫の說に百個の貝より平均一個の美麗なる眞珠を得と云へり。近時マツキントツシユ(Mclntosh)が七百個のイノカヒに就て調査したる結果の報告を見るに、七百個中六百二十個は大貝にして八十個は小貝即ち幼貝なりしが、大貝中二百八十個、小貝中二十個の貝は眞珠を有し居たりき。即ち眞珠のありし貝の總數は總計三百個にて、全貝數七百個に對して其割合四二・八%にして、大貝のみの割合にては四五・一%なり、換言すれば、大なるイノカヒ二個を取れば何れかの貝には眞珠存す可き事となる

に特設せる眞珠研究所にありて研究に從事せるスーラート(Seurat)は大黒蝶介の眞珠は絛蟲類の一種アクロボスリウム(Acrobothrium)の幼蟲が核を爲すことを公にしたるが、この絛蟲の成蟲は一種のエイの直腸に存すと云へり。かくの如き勢なるを以て、今日に於ては眞珠は寄生蟲が原因となり、これが核となりて、形成せらるゝものなることに確定したるが如き觀あり。最近の報告によれば北米合衆國の人ソロモン(Solomon)は錫蘭島に於て此寄生蟲による眞珠養殖業を始めたりと云ふ。

膜と介殼との間に侵入せるヂストマの幼蟲は無尾のセルカリア形を以て外套膜の結組織中に止まり、半ミリメートル大の黃色斑點を呈す、而して最初幼蟲の周圍は結組織の纖維のみなれども、漸々玆に上覆層細胞を生じて、所謂眞珠袋が完成せらる。かくてセルカリア死亡する時は其の體は無構造の一塊となるも、堅きクチクラ皮を以て圍まるるが故に、依然として原形を保ち、其中一部に石灰化生の中心を生じて、炭酸石灰漸次に集積し、原幼蟲の全形は石灰凝塊を以て置換せらるゝに至る、此塊の周圍に眞珠層分泌せられて被着する時は、玆に眞珠を見ると云ふなり。一千九百三年ヘルドマンとホーネル (Hornell) は錫蘭眞珠を硏究して絛蟲、吸蟲、線蟲等が眞珠形成の源因となることを表し、特にテトラリンカス (Tetrarhynchus) なる絛蟲の幼蟲が外套膜の結組織中に入りて囊狀蟲となり、これが核となりて袋眞珠を生ずるなりと云ひ、ホーネルはマドガヒに於て同様なることを見たりと云ひ、更には此絛蟲は貝より或魚類に移り、更に此魚類を食とするエイの一種に至りて成蟲となること、並びに眞珠の形成は幼蟲の死後に至りて生じ始むるものなることを云へり。千九百六年に至り、多年ガンビアー多島中のマンガレバ島リキテア島に

マ(Distomum duplicatum)が眞珠形成の源因を爲すと云ひ、後 Atax ypsilophorus なる他の寄生蟲をも追加せり。一千八百五十六年にメビウス、一千八百五十七年にキユツヘンマイステル、一千八百五十九年にケラート及びフンバート、一千八百七十一年ガーナーは蚌、眞珠貝、イノカヒ等に就て研究して皆寄生蟲説を賛せり。輓近七八年英佛の學者續々眞珠の研究を爲し、愈々寄生蟲説を確實ならしめたるが如し。即ち一千八百九十七年にはギヤードが眞珠の核としてブラキシリイム(Brachycoelium)なるヂストマを發見し、ヂユボア(Dubois)は一千九百一年一種のヂストマ(Distoum margaritarum)の幼蟲が眞珠を作ることを發見し、翌年には、ゼームソンが亦他の種類のヂストマ(Disttomum so-materiae)の幼蟲がイノカヒ眞珠の核となることを記載せり。此最後のヂストマは三度宿主を變ゆるものにして、第一宿主は水鳥の一種にして、第一幼蟲期はアサリ又はトリガヒに入り、第二幼蟲期はイノカヒに入りて眞珠の形成を起すなりと云ふ。ゼームソンはキール(Kiel)に在るブライトン(Brighton)水族館に於て試驗し、イノカヒにヂストマを寄生せしめて、小なる眞珠を作り得たりと報告せり。其眞珠形成の徑路を說明せるものに依れば、先づ外套

ヘルドマン(Herdmann)の報告に於て錫蘭眞珠を研究したる結果、砂粒を核とせる三個の眞珠を見たりと記載せらる。ヘスリングの著書にも石英砂粒が核を爲せる眞珠の圖を畫けり、余が日本眞珠の多數に就て調査したる間、一度も核として砂粒を認めたる事なかりき。若し砂粒が核となりて眞珠を生せしむることありとするも、そは極めて稀有なることにして、先づ一般に論ずれば、此くの如きことなしと云ふも可ならん。但しこは眞の眞珠即ち其の體中に生ずる眞珠の場合にして或種の附着眞珠若しくは介殼眞珠、即ち介殼の內面に附着して生ずる不完全なる眞珠の中には外部より他物が入り來りて眞珠層を蒙りたるもの甚だ多しとす。

次に貝に寄生する或動物が核となりて眞珠を形成すると云ふ寄生蟲說は近時多數の學者が主張する所にして今日に在りては、眞珠形成の源因はこれに確定したるが如き觀あり。然れども此說たる決して新しきものに非ず最初に一千八百三十年フォンベール(Von Bear)が蚌に寄生するアスピドガスターを發見し、これが核となりて石灰質が分泌せられたることありと唱へたり。其後一千八百五十二年に至りフイリッピ(Filippi)は伊國に於て研究して、蚌の體中に見たるヂスト

決して事實に非ず。介殼が破損したる時は貝は直ちに之を修繕する力ありて、殼に孔を穿たれたる時も外套膜はこゝに眞珠質を分泌してその孔を塞ぐ、而して分泌せられたる新層は平坦なることもあれども又往々凹凸を生ずることありて、爲めに殼の内面は平滑とならず、種々の形の膨れを生ず。然れどもこは決して眞珠に非ず、ゼームソン(Jameson)の所謂殼の水膨れに過ぎざるなり、介殼に孔を生じて、之より眞珠の作らるゝことと斷じて無し。

外部源因說の一として更に砂粒が貝の體內に入りて、これが核となりて眞珠を生ずるといふ說あり。此說は何時頃より何人の唱道したるものなるか明ならざるが汎く一般に行はるゝ誤說なり。此說によれば、貝の體內に偶然砂粒の入り來るものある時は、砂粒の表面平滑ならざるを以て、貝の組織を刺戟して痛を起さしむ貝は其痛に堪へずして自ら之れを療する爲めに眞珠層を泌出し、砂粒の表面を滑らかならしむ、これ即ち眞珠なりといふなり。この說は一理あるに似たれども實際貝の體內に斯樣なる事起ることなく、眞珠を研究したる學者は大抵この砂粒核說を否認せり。眞珠の中心を檢するも、吾人は砂粒を認めざるを以てなり。唯

を認め得ざるものあり。此くの如き眞珠は貝體内部の病的變化によりて生ずると云ふの外なし、即ちパゲンステッヘル(Pagenstecher)の説に從へば、眞珠は貝の內部に於ける病的源因によりて生ずると云ふなり。ヘスリング(Hessling)、メービウス(Möbius)、キュッヘンマイステル(Küchenmeister)等は、或眞珠は此源因に因りて生じ、又他の源因によりて生ずる眞珠も有るなりと爲せり。近時の學者中にてはヂクエー(Diguet)亦內部源因說の主唱者なり。

右に述べたる內部源因說と反對に眞珠形成の源因は外部にありと爲す說あり。其一に、眞珠は貝が介殼の破損を修繕する爲めに生ずるなりと云ふ說あり。此說は主として十八世紀の諸大家に依りて唱へられたるものにして、有名なる博物學者リンネは一千七百六十一年人工眞珠形成法を發明して、國王に奏上し、人工を以て眞珠を作ることを企畫したることあり。但し其方法は秘密にして果して如何なるものなりしか、何人も知るものなし。ケムニッツ(Kemnitz)ベックマン(Beckman)等の云ふ處に依ればリンネの秘密法は介殼に孔を穿つにありといふ。果して然らば介殼に孔を生じたる時、之れが源因となり眞珠を生ずると云ふ說なるが、こは

いふものにして千六百七十三年クリストフアー、サンジウス(Christopher Sandius)は那威のシンジユカヒにて卵子の若干が母體に密着して遂に眞珠となるものなりと記載せり。後一千八百二十六年エドワード、ホーム(Sir Edward Home)も亦眞珠は流產せられたる卵に源因すると述べたり。

以上の諸說に尋で起れるは、眞珠は貝の病的現象の結果なりとなすものにして一千五百五十四年ロンデレット(Rondelet)の云ひ出だせし說なり。即此說は眞珠形成の源因を內部に求めたるものなるが、之と相似たる說を主張したる學者は頗多し。凡一千六百年の頃アンセルムス、ド、ボー(Anselmus de Boot)は眞珠と介殼內面との類似に注意して、貝が體內に過剩の液を作りたる際、其の元氣盛ならずして液を體外に排出し能はざる時は眞珠を作ると云へり。之より約百年の後レオミユール(Réaumur)は右の類似を斷面に依つて確め、或刺戟の爲めに介殼を作る可き液が過量に分泌せられて貝の體內にて凝結したるもの即ち眞珠なりとせしが、其如何にして體內にて凝結するかに就ては毫も述ぶる所なかりき。今眞珠を薄片にしてその構造を檢するに、其中心より外部に至る迄總て介殼質にして他物

眞珠の成因

眞珠生成の源因は古來博物學者をして腦漿を絞らしめたる問題なるが觀察よりも傳說を重んずる太古人民の間には頗る奇怪なる流說の信せられたるものありて或は珠者蚌之陰精也といひ、或は電光の爲めに生ずるとし、或は露滴の介中に入りて凝結したるもの即ち眞珠となるといへり。詩人には眞珠を以て天使又は泉の神の涙に基づけるものとして歌へるもの多し。而して露滴變じて眞珠となるとの說は古代に在りては一般に信奉せられたるものにしてプリニーの唱ふる所によれば、空晴れて日光輝ける朝、貝が水面に浮びて殼を開く際、偶ま露滴其中に落ちて眞珠を爲すなり。而して貝が新鮮なる空氣と溫暖なる日光を受くることの多少により、眞珠の色彩光澤に差を生ずると云ふなり。亞典地方の亞剌比亞人の間には今日尙此說行はれ、紅海產眞珠の產額多からざる年は、彼等は之れ前年の氣候が良好ならざりしに由ると爲すといふ。

十五世紀より十七世紀に亘りて最盛なりし說は、卵が眞珠形成の源因をなすと

ガヒの類)を以て太鼓を裝飾す。布哇土人は Nautilus (ヲウムガヒ)の殼を磨きて眞珠光彩を露したる斷片を連ねて頭飾に用ゆ。ニユージーランド (New Zealand) 土人は Haliotis (アハビの類)の殼を彫刻物に嵌入す。又 Cypraea, Nerita, (コマノツメの類) Ovulum, Dentalium, (ツノガヒの類)、Olivella (ホタルガヒの類)等が印度、亞米利加、ニユーギニヤ等土人の通貨として使用せらるゝは有名なる事實なり。斯くの如く未開の土人が介殼を用ゆるには、その殼の斑紋の美麗なるが爲めに然るもの多しと雖、ヲウムガヒの如き、テウガヒの如き、アハビの如き、或はカヲスガヒ科の諸種の如き、皆その眞珠光彩を放つが故にこれを裝飾として使用するものなり、文明國に於てもこれ等眞珠的介殼を以て釦を作り、櫛を製し、其他種々の裝飾細工に用ゆ。されば其巧拙の度を異にすと雖裝飾に使用する點に至りては彼等未開土人と嗜好を同くせるものなり。已に眞珠光彩の介殼を愛するものとせば眞珠光彩の介殼以上の美麗なる一物即ち眞珠を裝飾として貴重す可きこと固よりなり。唯今日彼等の用ゆること甚だ多からざる感あるは眞珠が稀有にして小形、且永久的のものに非ずして、年を經れば腐敗し破壞せられ易く變化するが故ならん。

zon) 河にはカラスガヒ科に屬する Hyria 及び Castalia の二屬の貝ありて、この大河の支流沿岸に太古の土人が殘せし此等介殼の堆積せるあり。但し當國の土人はこの殼を用ひて諸種の裝飾に使用したりしなり。

抑も野蠻未開と稱せらるゝ人種の間にも尙多少の裝飾品を有せざるはなし。これが材料としては木片、羽毛、齒牙等種々あれども、就中介殼は最廣く用ひらるるものなり、例へばフキジー(Fiji)土人は Turbo (サヽエの類)、Chama,(フネガヒの類)、Solarium. (クルマガヒの類)、Terebra (タケノコガヒの類)等の殼を胸の飾に用ひ、又 Cypraea (タカラガヒの類)、Margaritifera (テフガヒ)は酋長仲間の徽章に用ひらる、ソロモン(Solomon) 群島の土人は楯或は船首を飾るに Cypraea を以てし、Terebellum を耳輪にし、Margaritifera を頭飾にし、又 Cypraea を以て頸飾を製す。ニユーギニー (New-Guinea) の土人は Nassa (ムシロガヒの類)を並列して頭の周圍に繞し、Oliva (マクラガヒの類)、Natica (ツメタガヒの類)、Margaritifera 等にて頸飾を作り、Melo の斷面を胸邊に着け、Conus (イモガヒの類)、Turbo を切りて腕輪を作り、鼻を飾るに Cassis (チトセガヒの類を用ひ、耳に Spondylus (サクラガヒの類)を垂れ、又 Cypraea, Ovulum (共にタカラ

敗し全く光澤を失ひ、容易に碎かるゝ樣になり居れり。之に依て見れば、當時の人種は現今の土人の如く淡水産の介を常食とし、これより生ずる眞珠は勉めて採集し居たりしことを知るべし又スクワィヤ(Dr. E. G. Squier)の研究によれば、オハイオ地方の塚中の眞珠は淡水眞珠のみならず、海産眞珠も混せるものなりと云ふ。彼はこれを以て當時この地方の住民は遠く墨西哥灣沿岸地方と交通せし證據となすも、クンツ(Dr. G. F. Kunz)はこれを否定せり。然れ共如何にして此の如き多量の眞珠が聚集せられたるかは一の疑問にして、實に一塚中より發見せらるゝ眞珠は、現今數箇年間に產する米國の淡水眞珠の全量に比敵する程なりと云ふ。南亞米利加の內地土人に就ては、北亞米利加に於けるが如く眞珠を使用せる證跡を認めずと雖、彼等も亦常にカラスガヒ科に屬する淡水介殼を用ひて裝飾に供せるなり。

パラグヱイ(Paraguay)の土人は、カラスガヒ科の介殼斷片を繫ぎて頸飾に用ひ、又懸垂裝飾に介殼の卵形塊を用ゆ、ペルー(Peru)に於ても亦介殼を圓形に切り或は茄子形に作りて、頭髮、胸等の裝飾に供す。又小斷片に孔を鑽し、これに細糸を通して布に縫ひ付け、星狀其他種々の模樣を像るの風あり。ブラジルのアマヅン(Ama-

人の墓を流せし時、大形の眞珠を數多發見したりといふ。

歷史以前暗黑時代に於けるミスシッピー地方住民、即ち塚作りの人種にも猶眞珠を貴重したる證跡あり、そは彼等の殘せし塚、殊にオハイオ(Ohio)州に於けるものに就て見ることを得るなり。

ダービス(Dr. Edwin H. Davis)は曾てオハイオ州の一塚中より多數の珠形或は歪形にして鑽通せる眞珠を發見し、大なるものは徑四分の三吋、小なるものは四分の一吋ありしと云ふ。又同州リッツルミアミの溪谷(Little Miami valley)に於ける塚中より、プットナム(Prof. F. W. Putnum)は有孔及び無孔の眞珠六萬個を發見せり。ムアーヘッド(W. K Moorchead)の發掘せし塚眞珠は、現にシカゴ人類學館に陳列せるが、其の量一ガロン餘にして徑三分の二吋に及ぶものあり。多くは歪形にして直徑一乃至三·三ミ、メ、大の鑽通せる孔を有す。同氏は一塚中より十萬個以上の眞珠を發見したることあり。又眞珠を嵌入したる熊の齒四十個を發見せり、凡そ塚中の人類骨格の傍には常に銅片、雲母黑曜石、介殼等と共に多數の眞珠を認むるなり。而して此等塚中の眞珠は元より幾年間土中に埋沒したりしが爲めに、總て腐

られ、一兵卒にて眞珠六斤を得たるものありしと云ふ。又アッペラヘ(Appelache)より北方三十哩に進軍せし時、其地の酋長より贈りし物品中には貴重なる大眞珠の頸輪ありしと云ふ。而して此の地の祉殿に驚くべき装飾あり、長さ百歩幅四十歩の建造物にして、屋根は五六枚の編物もて蓋はれ、これには眞珠光彩を放てる介殼を並列し、其間には大眞珠の紐を以て飾りたれば、日光直射の際には是等は相反照して光彩を放ち、燦爛として眩きばかりなりといふ。又その室内にありては眞珠の紐は縦横に懸垂せられ、四壁には眞珠を以て飾れる木像と楯とを立つ。これ實にドットーをして新世界中最も驚くべき壯麗のものと思惟せしめたるものなり。千五百六十八年、リオドミナー(Rio de Minas)よりブレトン岬(Cape Breton)に出でたるダビッドイングラム(David Ingram)の記載にも、この地方の眞珠の過多なることを述べ、土人の各小屋には必ず多少の眞珠を見たりと云へり。

以上の記載によりても、眞珠は南方亞米利加印度人の普通の装飾品にして、其好良なるものは酋長等の使用品となり、又酋長、勇士等の墳墓には屍體と共に多量の眞珠を藏めたるものなるを知るべし、嘗てオコネー(Oconee)川氾濫して多くの土

減少せしめたるとにより、眞珠熱は單に一時的流行として除々に消滅するものにして、從つて眞珠漁は一盛一衰各地に轉々し、今日にありては、ロッキー(Rocky)山脈以東の諸州の水流は殆ど採漁し盡され、或は採漁せられつゝあるものなり、これ米國に於ける白人の淡水眞珠漁業の概況なり、然れ共、此地の先領者所謂亞米利加印度人は、歐人の發見前遠く太古よりこれを漁し、裝飾の目的に使用したるものなり。

千五百三十九年のドソトー(Hernand De Soto)の、フロリダ(Florida)よりミスシッピー(Mississippi)に至れる大遠征の記事中眞珠に關するもの多く、或は社殿の屋根に安置せる木彫の鳥の眼に眞珠の嵌入したるを見、或は酋長等が長さ五尺餘の眞珠の紐を頸に掛くるを目擊し、又一行がイチアダ(Ichiada)に於て親しく土人を集めて介の採漁法及び眞珠を採集する方法等を視察せしことあり。又彼は處々に墳墓を發掘し或は社殿を破壞して、內に藏せる金銀眞珠等を掠奪し、其戰利品を二分して一半を西班牙王に贈呈し、殘餘は分捕者に與へたりと云ふ。蓋しこの遠征によりて得たる眞珠は其戰利品中の貴重なるものなりしなり。其中クチハヒクヒ(Cutifachiqui)に於て發掘したる墳墓中よりは三百五十斤の眞珠を得たりと傳へ

も、其後も時々起る僥倖者の話、例へば遊漁に行きて圖らずも眞珠を發見し、莫大の金を得たる農夫の話、或はウヰスコンシン(Wisconsin)州の二漁夫が小川にて二個の眞珠を發見し一個二百弗にて賣りし話、或はアーカンサス(Arkansas)州に於て一農夫が釣餌に用ひんとて一介を開きしが、圖らず桃色の眞珠を得二十五弗を得たるが、後この眞珠セントルイス(St. Louis)にて二百弗にて賣れたりとの事などの傳說は、處々に眞珠熱を發生せしめ、各人皆河流に馳せて、遂に勞働者の缺乏を來し、地主は其の收獲物の始末に困難し、諸會社は傭人の無きに苦しみ、恰も濠洲ヴヰクトーリヤ(Victoria)州にて金塊の發見せられたる當時の如き有樣を呈したる地方もありしなり。アーカンサス州より產せし眞珠を送れる小包物によりて、セントルイスの寶石商の店頭に山を爲せし事ありしは、漸く七年前の事なり。蓋し一攫千金賭博的のこの眞珠獵なれば、無數の漁業者悉く僥倖を得る能はず、殊に眞珠の如何なるものかを知らざる彼等は、總て介より出でしものは、皆寶石商に送付するなり、されば中には物品の價格は送遞料をだも償はざるものありしといふ。斯くの如くにして實利が多數發見人を失望せしめたると、又濫獲の結果忽ちにして介を

又大陸內地に產する淡水眞珠に關しては、合衆國ミスシッピー（Mississippi）河流域に於ける眞珠に就て記載せるもの甚だ多し。元來延長幾千哩に亘れるその本支流の底にはカラスガヒ科の Quadrula, Plagiola, Pleurobema, Lampsilis, Trigonia 等の諸屬に屬する貝類棲息し、其殼は光澤美麗にして裝飾細工に適す。今より十數年前始めてこの介殼を用て釦を製造する業開始せられ、爾來非常なる發達をなし、千八百九十八年に於ては所用の殼七千噸、これより得たる釦は實に二百二十五萬グロス、市價五十萬弗なりしと云ふ。又これ等カラスガヒ科より生ずる淡水眞珠漁業は現時盛に行はるゝも、曾て白人の移住後久しく顧みるものなく、その米人により て開始せられたるは漸く四十餘年前の事なり。千八百五十七年ニユー、ジヤーセー（New Jersey）州ペーターソン（Paterson）市近傍の一小川より、重量九十三グレーンの眞珠を得たるものありて、チツフアニー商會（Tiffany & Co.）はこれを二千五百弗の價格を以て佛國の皇后に賣りたり。此報一度傳はりてより眞珠熱勃興漫延し、同州各地に多數の眞珠採集者を生じ、この一箇年間に於て紐育市場に送られたるもの實に一萬五千弗に及びたり。是より千八百七十年の頃迄は漸時衰退したりし

墨國に於ては眞珠は非常に豐富にして、古代よりこれを裝飾に用ひたり。其の國主モントズーマ(Montezuma)を祭れる廟をば眞珠と寶石を鏤めたる金銀を以て裝飾し、市街に立てる多數の大偶像にも皆眞珠と寶石とを嵌めたり、千六百二十六年トーマス、ゲージ(Tomas Gage)が墨國を探險したる時の記載によれば、此の地方に在りては眞珠は普通の裝飾品にして、勞働者の如きも帽子に眞珠の紐を繞らし、黒人の腕及び頸には純白の眞珠を着けたるを見、上流社會に至りては眞珠を鏤めたる金帶を着用するの風ありしと云ふ。

米國に於けるシンジユガヒ科に就て今日知られたるものは、西印度諸島及びブラジル並にヴエネズエラの沿岸に於ては印度のシンジユガヒに似たるM. radiataを產し、大平洋側なるパナマ灣(Bay of Panama)及びカリホルニヤ灣(Gulf of California)にはクロテフガヒの變種なるM. margaritifera var. mazatlanicaを饒產す。又コロンビア(Columbia)の沿岸にも現に眞珠漁業行はると云ふ。かくの如き有樣なるが故に此等より生ずる眞珠も亦此等の地方の住民によりて古くより採集せられ、使用せられたること勿論なり。

介に入るべく、このパーリヤの海岸程眞珠の生ずるに都合よき處はなかるべしと思惟せしが故なり。彼は如何なる介より如何なる眞珠を生ずるやを知らざりき。於此コロンブスは部下を督して大に眞珠を捜索せしめたりしに、意外にもマングローブの根に附着せる多數のカキには眞珠を見出すこと尠く、且つ假令これあるも甚劣等のものなるを見て大に失望せしが、種々探究の結果眞實の眞珠は深海にある介より生ずるものなるを確めたり。

超えて同月十五日コロンブスは遂に所望の眞珠場を眞珠島 (Margarita Island) 及びキユバーグア (Cubagua) に於て發見せり。但し此處は既に土人の漁場となれる所にして、一團の土人の既に採漁に從事するを見たるなり、コロンブスの乘船を寄せて之を實見したる時、一人の水夫は彩色したる陶器皿を打破して其破片を土人の一婦に贈りたるに返禮として婦は頸に繞へる眞珠の紐を與へたり。コロンブスこれを聽きて更に土人に皿及び鈴を與へしめたるに、暫時にして三封度の眞珠を持ち來れり。コロンブスは其中最大のものを撰んでこれを西班牙朝に送りしと云ふ。

亞米利加の眞珠

南北亞米利加のコロンブスによりて發見せられたると同時に、東印度地方の眞珠の豊富なることも並せて歐洲に紹介せられたり。然れども新大陸の土人所謂亞米利加印度人は眞珠の用途を歐人に學びしに非ず、コロンブス等の到着せし以前古くより專らこれを裝飾に用ひたりしなり。

千四百九十八年八月七日コロンブスはパーリヤ灣(Gulf of Paria)の海岸に土人を會したる時、土人の腕に眞珠の紐を掛けたるを見、且その灣の西海岸に於て採集せられたるものなるを聽き、嘗て「至寶の天然産物は赤道近傍に饒産す」と說きし寶玉商フエーレル(Ferrer)なる者の言を想ひ起し、この地の眞珠に豊富なるべきを推察したり。彼其後自ら海濱に至りて實際を見たるに、マングローブ樹繁茂し、其水中に蟠蜒せる根には無數のカキの附着せるを視て、彼は大なる希望を抱きぬ。そは彼はプリニーの唱へし「眞珠は介中に落ちたる露によりて形成するものなり」との說を確信せしを以て、上に枝葉茂りてこれより落つる露は直に其根に附着せる

圓に上りしと云ふ。愛蘭のタイローン(Tyrone)河、スラベー(Slavey)河にも産しフィンランドの諸湖よりも出づ、此等皆蘇國眞珠(Scotch pearls)として知られたるものなり。斯く著名なりし蘇國眞珠は近年に至りて其產額昔時の如くならず、少量の眞珠は猶市場に出づるも眞珠漁業としては存在せずと云ふ。歐洲大陸にありてはエルベ(Elbe)河の流域なるザクセン(Sachsen)及びダニューブ(Danube)の上流バイエルン(Beyern)は稍々著しき產地なり、佛國露國の諸川亦之を產す。

然れども歐洲に於て使用したる多くの眞珠の供給は此等淡水產に仰ぎしに非ずして、印度、波斯、紅海等東洋產のものなりしなり。昔時にありては印度產の物は陸路バクトラ(Baktra)を經て裏海を橫ぎり、黑海の沿岸なるファーシス(Phasis)に出でて希臘に入り、波斯灣よりは亞剌比亞を橫ぎりて希臘に齎らされたるものなり。又羅馬の眞珠は戰勝の結果戰利品として得たるもの、或は交易の中心なるアレキサンドリャ府を經て、遠く波斯及び印度より輸入したるものにして、これよりして遂に歐洲全般に傳はるに至れるなり。故に歐洲眞珠の大部は亞米利加發見前迄は東洋眞珠を以て供給せられたるものなりとす。

しむる處、遂に輓近五六年間に眞珠の價は倍加以上に騰貴したるなり。

元來歐洲には海產なるシンジユガヒ科の棲息せるものなかりしが、スエズ(Suez)水道の開通の結果、動物の分布に變動を來し、紅海所產のシンジユガヒ(M. vulgaris は、スエズ水道を通じて地中海の一部に擴まり、例へばチユニス(Tunis)のガーベス灣(Gabes Bay)、或は埃及のアレキサンドリヤ(Alexandria)等に蕃殖するに至れり。

又近年伊太利人コムバ(Comba)なる人四十年來眞珠に就て研究せし結果、人爲的眞珠形成法を案出し、伊太利半島の南端カラブル(Calabre)の某所にシンジユガヒの移殖を企圖せる會社を起せしと云ふ。

斯くの如く歐洲には海產眞珠を產せずと雖も、大陸を縱橫せる諸川、及北方フキンランド(Finland)の諸湖水は皆カラスガヒ科貝類を產し、從つて淡水眞珠の漁業は諸處に行はるゝなり。古昔に於て有名なりしものは英國產眞珠にして、殊にテー(Tay)コンウエー(Conway)カムバーランド(Cumberland)等の諸川より產するものは美麗なるを以て顯著なり。此等は前述の如く羅馬隆盛時代に於て既に交易品たりしなり。千七百六十年の頃三箇年間にテー川より倫敦に出せし眞珠は十萬

ばこの時に於ける帝は恰も眞珠の雪を被りたらんが如く、今日を晴と着飾りて列席せる諸帝王の大使の燦爛たる服裝も爲めに顏色なかりしと云ふ。

印度波斯の王族は古昔より多數の高價なる眞珠を所有して、身邊には數千の眞珠を附けたりき。曾て或印度王子が着けたる裝飾は其眞珠の一個一個が歐洲商人によりて數百萬弗と評價せられたり。此等の眞珠は其產源を錫蘭島と波斯灣に仰げるものなり。一千七百九十六年英國が錫蘭島を領有するに至りて、同島の眞珠業は大に改良を加へられたるが、多年取り荒らされたる海底の事なれば、容易に其效を收むること能はざりき。十九世紀に入りては南洋諸島、墨西哥、濠洲諸島の眞珠產地續々發見せられ、市場に出づる眞珠も年々其の額を增大し來りたりと雖も、文明の開發するに從つて奢侈的裝飾品の需要は愈增進するものなり、殊に十九世紀の末より今世紀に至りては新漁場の發見せらるゝもの尠くして、眞珠流行愈急なり、從つて需用益增加し價格日を逐ふて騰貴す。されば現今の眞珠の價格はこれを五十年前に比すれば約四倍なりと云ふ。歐洲の市場によりて支配せらるゝ此の裝飾品の價は、本邦にも影響したるのみならず、本邦に於ける流行の然ら

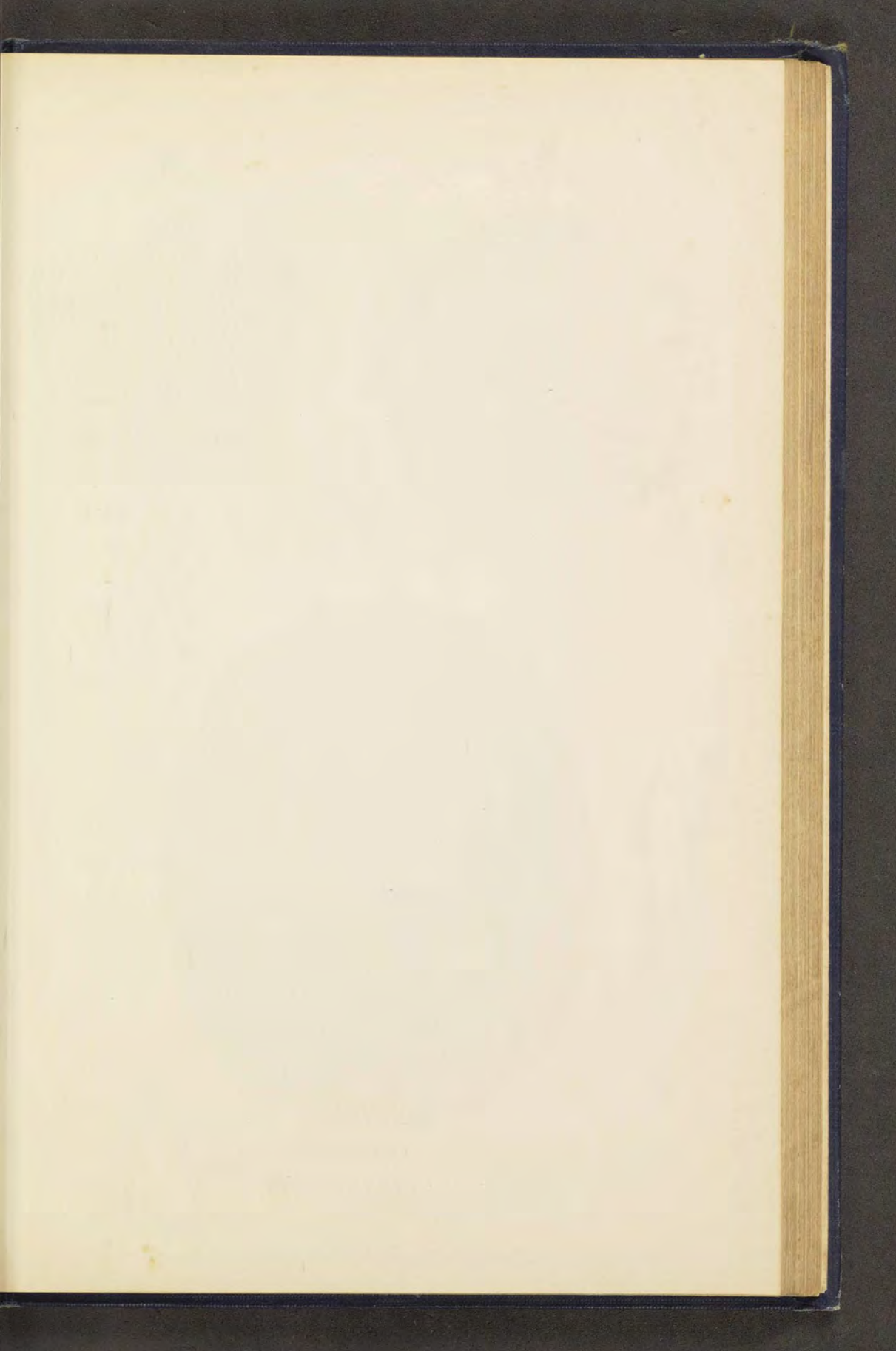
斯くの如く歐洲にありては古代より眞珠を貴重し、帝室貴顯の裝飾品たるのみならず、之を愛用すること上下一般の風俗なりき。從て眞珠は頗る高價なりしがコロンバス(Columbus)の亞米利加發見後、十六世紀に至りて新發見地より多量に眞珠を輸入し、一時に百六十萬圓の眞珠を齎せることあり。此供給過多に伴ふに價額低廉なる摸造眞珠の案出せらるものあり、又金剛石の面を切瑳して正形となすこと發明せられ、更に三十年戰爭の疲弊を受けて、眞珠の聲價は十七世紀の後半に於て大に減殺せられたりしが、十八世紀に入りて錫蘭紅海の眞珠產額著しく減少したる爲め、眞珠は再び其聲價を回復せり。一千七百二十七年ブラヂル國に金剛石の產地發見せられて、年々十四萬カラットの金剛石市場に出づるに至りしも、當時貴族令孃の金剛石を喜ぶこと、到底眞珠を求むるの急なるに及ばざりき。

千八百五十六年露帝アレキサンダー二世(Alexander II.)が、戴冠式當日に於て着用したる衣服は實に非常なるものなりさ。布は濃厚なる紫色の天鵞絨なるが、これに金線もて眞珠を刺繡し、殆ど其全面を蓋ひて布地は見えざる程なり、彼の眞珠裝飾は其の衣服のみならず、穿てる長靴も同じく眞珠もて全面を蓋ひたり。され

第三圖　墺國王冠

第二圖　英國王冠

第四圖

眞珠を着けたるマリア・テレサ

十九年にして、其後一千三百九年、一千三百三十四年、一千三百四十年、一千三百六十年、一千四百九十七年、一千五百六十二年、一千五百九十九年、一千六百〇九年の數度、或は法を易へ、或は規定を變じて、百方之れが實施に腐心し、牧師僧侶は口を酸くして奢侈を戒めたりしと雖も、滔々たる眞珠愛賞の怒濤には、遂に何物もよく抗し得ざりしぞ是非もなき。

眞珠は又諸帝王の王冠に其の光彩を放てるもの多し、獨逸帝國の王冠は九世紀カールス（Karls）大帝より傳承せるものにして、金線もて繋げる多數の眞珠あり、又眞珠を並列して CHUONRADUS DEI GRATIA ROMANORU IMPERATOR AUG の字を現せり、第二圖に示せるは澳國の王冠にして多くの美麗なる寶石と眞珠を以て裝飾せり。ルードルフ二世（Pudorf II.）の王冠には重さ三十カラットの茄子形眞珠を有すと云ふ。佛帝の冠には三個の眞珠ありき、球形にして重量二十七・十六分の五カラットのもの、及び一對の茄子形の眞珠重量五十七・十六分の十一カラット、此等の價格三百二十萬フランクなりと云ふ。又英王チャールス二世（Charles II.）の王冠はコムウヱー（Conway）河產の淡水眞珠を以て飾りしと云ふ、第三圖は現英國の王冠なり。

若し彼の女王クレオパトラと饗應の競爭をなしたるアントニアスをして、かゝる一皿を有せしめば必ずや勝利を得たりしならん。丁抹國に於てクリスチァン四世(Cristian IV.)時代の勳章たりし四十五個の胸飾には各三個の眞珠を掛けたりき。

さて眞珠の愛用は決して北歐のみに限られたるに非ず、十三世紀の劈頭ビザンチン帝國(Bysanzine Empire)の瓦解するや、其財寶は移つて南歐伊太利に入り、更に東亞より齎らされたる眞珠と共に、ベニス市に集積せり。ゼノア、ピザ、フロレンスも亦多くの寶玉を輸入し得たりき。ヘルキユールデステ(Hercule d' Este)が其子息の妻にルクレチアボルヂヤ(Lucrezia Borgia)を娶らんとしたる時、ボルヂヤの父ポープアレキサンダー四世(Pope Alexander IV.)は眞珠を盛れる箱中に双手を挿入して「此等凡へて皆汝の物たる可し、余は汝が全伊太利に於いて、最美しき最多數の眞珠を有する貴女たらんことを希ふ」と云ひしとぞ。由來ベニスは美術の重んぜらるゝ地なるに、東亞よりする寶玉の集中し易き位置なれば、其豐富なりしと論を俟たず。從つて、當時官憲が奢侈の風潮を防壓せんとしたる苦心も亦遙に他の歐洲諸國の例に超へたり。眞珠佩用を禁止する法の初て此地に布かれたるは實に千二百九

斯くの如きにも拘はらず、諸帝室にありてはこの奢侈の裝飾品は決して廢るゝことなくして、或は其の宴會卓上に眞珠と寶石を鏤めたる大盃を用ふるあり、或は眞珠を飾れる一着二十萬圓の衣服を用ふるあり、佛のヘンリー四世(Henry IV.)の皇后が王子の洗禮式上に用ひたる衣服は三千の燦爛たる金剛石と三萬二千個の輝ける眞珠を繡したるものなりしと。マキシミリヤン(Maximilian)がフェルヂナンド二世(Ferdinand II.)の女に贈りしは各千グルデンを價する眞珠三百個を連たる紐なりき。千五百七十九年パナマ(Panama)より一個の大眞珠を西班牙の朝に齎せるものあり、其形狀大さ共に鳩卵の如し、重量三十三五カラット價格一萬四千四百デカットと云ひ、後王室寶石鑑定官をしてこれを視て三萬、五萬、遂に十萬デカットと叫ばしめたるものなり。この稀有の大眞珠は"Peregrina"と命名せられ、千六百五年フイリップ三世の妃によりてマドリッド(Madrid)の大舞踏場裡を輝かせり。千六百八十年フイリップ二世より皇后エリザベス(Elisabeth)に贈りし高價なるサラド(料理の名)ありしが、所用の菜葉は大形エメラルドを以て形どり、これにルビーの酢と、黃色トパーツの油を用ひ、これに加味する鹽は實に眞珠なりしと云ふ。

風甚しきものあるに及んで、これを防壓せんが爲めに法律を布くの要あるに至れり、千三百年佛帝フィリップ(Philipp IV.)は一般市民の金と寶石を裝飾に用ゆるを禁じ、其後代々の帝皆同樣なる禁止を勵行せり。千三百四十五年ウルム(Ulm)に於て規定せられたるものは、未婚の女は衣服に眞珠を用ふ可からずとなし、千四百十一年ツーリヒ(Zurich)に會議し規定したる質素法に據れば、婦人は唯一個の眞珠頭飾を所持することを許さるゝも、重さ十二オンスを超過すべからずとなせり。然るにかくの如き規定は却つて貴族の虚飾心を刺激し、眞珠裝飾を用ひざること、これを所持するものは全然他人の目に觸れざる樣に用ふべきことの申合を決議せしむるに至れり、一千四百七十九年フランク國法は騎士に陪して武技に列する一般貴族は帽子に附したる紐を徐くの外眞珠を佩用することを禁止し、ウォルムス(Worms 1495)、アウスブルグ(Ausburg 1498)フライブルグ(Freiburg 1530)、サキソニー(Saxony 1612)の議會相次で同樣なる法律を出せり、又ハンブルグ(Hamburg)に於ては、千六百五十年令して婦人は金鎖を用ゆることを得るも、眞珠或は金剛石を以て飾ることを禁せり。

め、個人の裝飾に用ふる眞珠の嗜好益盛となり、貴公子は其所有を誇らんが爲のみに非ず、其魔力を信ずるの結果戰場に迄そを携ふるに至れり。されば冠婚の儀式に、撰擧凱旋の行列に、盛に眞珠が競ひ用ひられたること別に警するを要せざるべし。金剛石の發見せられたるは八世紀の頃なれども、其面を正しく切瑳する方法の案出せられたるは十五世紀の中葉なれば、當時眞珠の寶石中の雄とせられたることも推して知らる可し。

十四世紀以後に於ける眞珠愛玩者の名は玆に枚擧するに遑あらず、チヤールス禿侯(Duke Charles the Bold 1433—77)が一千四百七十三年五千人の綺羅を飾れる騎士を從へてトレベス(Treves)の議會に臨みたる時、着けたる金衣は價額二十萬フロランの眞珠を以て飾られたりしと云ひ、一千四百七十五年富人チヨーヂ(George)がポーランドのカシミール三世(Casimir III.)の女ヘドキヒ(Hedwig)と結婚したる際には眞珠の海を見るが如きものありしと云ふ。當時の王侯貴人の肖像の今日に殘れるものを見るに、男女の別なく帽子衣服に大なる眞珠の群がり附着せるものを見るなり。かくして眞珠流行の高貴の間のみならず廣く一般庶人に傳播し、奢侈の

げてノアヨン (Noyon) 市の監督牧師と爲し、ゼントエロア (St. Eloi) の名を與へたれば、牧師の奬勵の下に、國內の寺院は眞珠其他の珠玉を彫めたる殿堂、禮服、書籍、器具を備ふるに至り、以後數世紀の間寺院は常に夥多の寶玉を藏することゝなりたり。 シャーレマン大帝 (Charlemagne) の沒後、帝國は四分五裂して今日の歐洲諸國の基をなし、九世紀にはノルマン人 (Normans) 侵略し來りて諸地の寺院を破壞し、其財寶を掠め去り、十世紀、十一世紀は歐洲に於ける美術の暗黑時代をなせしが、しかも東歐の寺院は信徒が天國の慰安を購はんが爲めに喜捨する寶玉を得て、盛に其聖壇を飾り得たりしなり。 此時に當り偶ま淡水眞珠の英佛等の河流より產出するものあり、光澤色彩東洋よりする海產のものに劣れるにも拘はらず、彼に比して大に得易かりしが爲めに、廣く歐洲人民の注目する處となり、從つて眞珠裝飾は歐洲上下一般の風俗となり巽んぬ。 加之、羅馬以來單に裝飾の用にのみ充てられし眞珠は、他の寶玉の如く、否彼等にも增して、醫療魔法等の用に供せらるゝに至りたるを以て、眞珠に對する需要頓に暴騰せり、而してこは主として亞剌比亞の風習の輸入せられたるに起因せり。 更に十二世紀十三世紀に及びては、騎士制度の生ぜし爲

地に集積せざるを得ざりしがためなり。羅馬衰ふるに至りては、眞珠集積の中心は移りて一に此地に歸し、コンスタンチノープルは實に美術裝飾流行の焦點となれり、ラベンナ(Ravenna)にあるサンビタレ(Sanvitale)の禮拜堂に見らるゝ有名なるモザイックにはユスチアン帝(Justian 483—565)が寶玉に被はれたる王冠を戴き、皇后が三列の眞珠にて取回したる王冠を戴き、冠よりは胸のあたりまで垂れたる眞珠の紐の下れることを示せり、當時帝王の用ひし飾りは實に羅馬の最も豪奢を極めたる主權者のそれにも勝ること實に數等なるを常としたりしなり。

眞珠の重んせられしは雷にコンスターンチノープルのみに非ず、羅馬を蹂躪したるゴート(Goth)人は眞珠の嗜好を北方に齎らし、遂に之れを全歐に傳播せしめたり。而してゴート人の掠奪し得たる羅馬の貴品重寶は又もやフランク人(Franks)の爲に耗盡せられぬ、さればフランク人が六七世紀に於て歐洲國民の最上位に昇ると共に、其の都市の宮殿寺院は饒多なる寶玉を以て飾らるゝに至りぬ、就中ダゴバート王(Dagobert 623—638)は印度波期の王と豪奢を競ひたるを以て、益々此等の風潮を盛ならしめたりとす、且つ王は寶玉師エリギウス(Eligius 588—659)を擧

て長く胸の上部に懸くるなり、如斯く三紐を用ふるを Trilinum と稱し、二本のものを Dilinum、單一の時は Monile と稱す。

帝王時代に於ては、耳に大眞珠を懸ること流行したりしが、其風下流に及ぶに至りて、上流の貴婦人は專ら茄子形の眞珠を用ふるに至れり、之の眞珠を Elenchen (尊重眞珠の意)と稱す、又時に眞珠とエメラルドを幷用す、これ色と光彩の對照美なるのみならず、頭の運動につれて一種の妙音を發するが爲なり、この飾を Crotalia と稱す、小鈴の意なる Crotalum より出たるなり。

耳のみならず指にも亦眞珠の裝飾を用ゆるあり、甚しきは脚部の裝飾にも用ふるなり、斯くの如く奢侈甚しき時に當りて之を攻擊するもの亦尠なからず、二百年の頃に於てテルッリアン (Tertullian) のこれを諷したる語あり、「一本の紐に百萬セースタス！ 頸に、耳に、指に總て財寶なきはなし、實に婦人は己の所有せる財產を擧げて己の體に運べるものなり、虛飾も玆に至りて極まれりと謂ふべし」と。

羅馬の盛なる頃、更に東方に寶玉貴品の集中地ありき、そはコンスターチノープル府なり、蓋し此地は歐亞貿易の咽喉を約せる地にして、東方より來る眞珠は勢此

彫めたるミユーズ女神の寺院が作られたることを記せり。此外當時の有名なる英雄貴人は皆絶美なる眞珠を得んことを望みたるものゝ如く、ジユリアス、ケーザー(Jurius Cæsar)は殊に眞珠の嗜好者として有名なるものなりき。彼のブルータス(Brutus)の母サービリヤ(Servilia)に與へたる眞珠は實に四百萬圓を投じて購ひたるものなりと云ふ。スートニアス(Suetonius)の説によれば、彼の不列顛大遠征は眞珠を得んと欲すること蓋しケーザー帝の眞意の一部なりしと、果して帝の凱旋するや、蘇國眞珠を以つて飾れる手楯を齎し歸りて、之れをゼネトリツクス女神(Venus Genetrix)の神殿に捧げしと謂ふ、蓋し當時既に英國産の眞珠、殊に蘇國眞珠は著名なるものにして、英國と羅馬との交易品の一なりしなり、又女王ロリヤポーリナ(Lollia Poulina)の頭髪に、耳に、頸に、指に總て眞珠の彩れるを見る、其の價格四百萬セスタース(約二十萬圓)と算せらる、而してこれ等は實に諸外國よりの戰利品なりしと云ふ。

當時羅馬の風俗、貴婦人の頸飾には三本の紐あり、一は頸の周圍を繞らすに眞珠の紐を用ひ、他の二本は青色或は綠色の寶石と眞珠を混したる紐にして、頸を繞り

歐羅巴の眞珠

美術を好みし希臘人が眞珠を愛用したるはホーマーのイリアッド、オデッセイ二編に「三重の滴」と名づけて呼べるに徵することを得べし。古代の希臘人が眞珠を得たるは主としてフィニキアの商人の手によりて東亞よりしたるもののなるべし。・アリストートルの門人テオフラスト（Theophrast 372—287 B. C.）は、眞珠はタヒラギに似て稍小なる貝より產するものにして、高價なる頸輪を作るに用ひらるゝものなりと記せり、蓋し紀元前五世紀の波斯戰爭は大に希臘人の眞珠に關する智識を擴めたりしなる可し。

希臘の眞珠に對する嗜好は移りて羅馬に擴がり、マルガリテの名は普く人口に上るに至りぬ。されど羅馬人は良き眞珠をユニオと呼び、惡しき眞珠をマルガリテと呼ぶを常とせり。羅馬に眞珠の饒多となりしは紀元前七八十年頃ミトラダテス征討とポンペウスの雄飛せし頃より後の事にて、プリエーは紀元前六十一年に行はれたるポムペイの凱旋に際して眞珠の冠三十三個、多くの眞珠飾、及び眞珠を

要なる貿易品たり。又波斯王のタベルニールより購ひし眞珠は實に百八十萬圓なりしと云ふ、嘗て王の佛國世界博覽會に出品したる眞珠の紐は各々豌豆大なりしと云ふ。

波斯國に眞珠の行はるゝに至りしは甚だ古き事にして、史籍に徴すれば、實に西曆紀元前七世紀の頃既に普く人口に膾炙したりしものゝ如し。今日ルーブル宮の波斯部に陳列せらるゝ一頸飾りは近頃モルガン氏が波斯王の冬宮の在りし地なるスサ(susa)にて堀出されたる王子の棺中に見出したるものなるが、少くとも西曆紀元前四百年の時代に造られたるものにして、今日迄に發見せられたる最古の眞珠を用ひたる頸飾なりとぞ。

亞刺比亞人の眞珠を貴びたることはコランの中特に其樂園を叙するに之れを引けるによりて知らる、例へば「散り布ける石は眞珠と風信子石にして、木の果は眞珠と綠玉なり、天國の怡樂を許されたる人々は眞珠と風信子石と綠玉との帳を垂れ、類なき光澤ある眞珠の冠を戴き、潛める眞珠に似たる美しき女に侍づかる」と云ふが如し。

と唱ふ、されば一盃の酒價は將に六十萬圓なりしなり、驚くべき高價ならずや。されど按ずるに、主として炭酸石灰より成れる眞珠が酸類に遭へば有機物を殘して他は溶解するものなれども、今重量一厘の眞珠を取り稀薄なる酸類を以て溶解せしむるには十時間以上を要す、女王の持ちしと云ふ大眞珠を飲料に供する酸類を以て卓上にこれを溶解せしめんこと決して爲し得ることに非ざるなり、さればこの傳説の如き事實を誇大したるに過ぎざらん。

埃及眞珠に關しては印度より輸入したるものなりとの説あれど、元來埃及の沿岸紅海は著名なる眞珠の産地なり、此處には印度と同じく小形の Margaritifera vulgaris あり、又クロテフの變種 M. margaritifera var. erythraensis を産す。その漁業の中心はヂッダ (Jidda) にあり、又紅海の北部埃及沿岸にも大漁場あり。是を以て考ふるに埃及眞珠は自國紅海の産ならん。波斯灣は眞珠漁業地にして、五千の漁船專ら眞珠漁に從事すと云ふ、漁場はシャーハ (Sharja) よりビドルフ (Bidulph) 群島に至る間及びボーレーン (Bohrein) 島附近等其の主要なるものなり。此處にも亦 M. vulgaris 及びクロテフガヒの變種 M. margaritifera var. persica を饒産す。從て眞珠は埃及の重

ものは誠は眞珠なるべし」、彼答へて「余は眞珠に對する税を拂はん」、是に於て、收税吏は遂にアブラハムが税を拂ふことを拒む可き物を云ひ當て得ざるを知りて、「卿はその箱を開きて何物の入れるかを一見せしめざる可からず」と、かくて箱は開かれたれば四方遽にサラアの美の光に照り輝けり（意譯）。是等の記載によりて當時眞珠の如何に貴きものたりしかを推することを得るなり。

埃及人は男女共に特有の背懸を用ひ、これを裝飾するに亦眞珠を使用す。埃及眞珠に就ては女王クレオパトラに關して有名なる傳説あり。艶麗クレオパトラ女王最眞珠を愛す、就中左右の耳に懸れる眞珠は歴史ありて以來最大のものなりと傳へらる、一日女王はアントニーと饗應の競爭に勝利を得んが爲一方の耳より眞珠を取り外し、之を酯を盛れる器中に投じて溶解せしめて饗したるが、女王再び他方の耳より眞珠を取らんとしたる時、ルシヤス、プランカス出でゝ女王の手を押へ勝利は判然せりと宣言し漸く止むことを得たり。而して此殘れる眞珠は二分して神廟の女神の耳輪に用ひたりと云ふ、後世此眞珠を評價する者一個六十萬圓

また天國は好眞珠を求んとする商人の如し、一の値たかき眞珠を見出さばその所有を盡く賣て之を買なり。

同第七章第六節に曰く。

犬に聖物を與ふる勿、また豕の前に爾曹の眞珠を投與する勿れ、云々。

約翰默示錄第二十一章第二十一節に曰く。

十二の門は十二の眞珠なり、云々。

又希伯來人が如何に眞珠を貴重したるかは次の物語を以ても知ることを得べし。

埃及に近づくやアブラハム(Abraham)はサラア(Sarah)を箱の中に潜ましめて、異國人が其美を見ること勿らしめたり。かくて關稅を拂ふべき所に至りけるに、收稅吏は云ふ「卿は關稅を拂ふべし」彼答へて「余は稅を拂ふべし」彼等曰く「卿は布を携へり」彼曰ふ「余は布に對する稅を拂はん」彼等次で曰ふ「卿は金を有てり」彼答ふ「余は金に對する稅を拂ふべし」彼等又曰ふ「卿は必ずや最美しき絹を有てるならん」と、彼答へて「余は最美しき絹に對する稅を拂ふべし」彼等曰ふ「卿が携ふる

出さしめ、其の元價の二倍を以て買上ぐるなり、如此きが故にマーバー王の所有せる眞珠の數は實に無量にして算すべからざるなり。

希伯來人もまた古來眞珠の愛玩者なり、前に述べたる如く希伯來語にて眞珠はPeninimと云ふ、而して其の古き眞珠の記載は聖書に見るを得べし、即ち約百記(The Book of Job.)第二十八章第十八節に曰く

珊瑚も水晶も論にたらず、智慧を得るは眞珠を得るに勝る。

箴言(Proverb of Solomon)第三章第十五節に曰く

智慧は眞珠よりも貴し、汝の凡ての財寶も之と比ぶるに足らず。

同第二十章第十五節に曰く

金もあり、眞珠も多くあれど貴き器は知識のくちびるなり。

同第三十一章第十節に曰く

誰か賢き女を見出すことを得ん、その價は眞珠よりも貴し。

基督は人に教ゆる際に貴きものゝ比喩として能く眞珠を用ひたり。

馬太傳十三章第四十五節第四十六節に曰く

とを以て飾り、其の周圍は眞珠の紐を繞らし、天蓋の頂上に一羽の雀孔あり、體は金製にして其の擴張せる尾は青色のサファイヤーと種々の色彩寶石を鏤め、胸には大形のルビーあり、此處に又茄子形の大眞珠を懸く其の大さ五十カラット稱せらる。而してこの天蓋は十二本の柱の上に安置せられ、この柱は皆球形の六乃至十カラット眞珠を以て圍繞せられたり、且つ天蓋の左右に高さ七八尺の涼傘あり、赤天鵞絨に眞珠を繡したるものを以て張り、柄は金剛石、ルビー及び眞珠を彫めたりと云ふ、慮ふに印度は世界の寶石並に眞珠の寶藏なり、其の帝王の威を以て王冠を作るかくの如かりしもの敢て怪むに足らざらん。

マルコポロの印度の眞珠に關する記載にはマーバー(Maabar)のことを記せりマーバーとは印度大陸のマナー灣(Gulf of Manaar)沿岸地方を云ふなり、其の記述に曰く

マーバー王は百四個の眞珠とルビーの紐を頸に懸け居れり、この國にては半サギオ(Saggio とは一オンスの六分の一を云ふ)以上の眞珠は總て國外に出すを許さず、且つ年に數回令を出して大眞珠或は寶石を有するものは悉く王の許に

又講堂精舍宮殿樓觀皆七寶莊嚴自然化成復以眞珠明月摩尼衆寶以爲交露覆蓋其上云々。

無量寶綱彌覆佛土皆其金縷眞珠百千雜寶奇妙珍異莊嚴交飾布四面云々。

この經は釋迦の作にして天竺康僧鎧の譯せるものなり。又佛敎に所謂七寶なるものあり、内に鉢摩羅伽と稱するものあり、飜譯名義集に曰く

鉢摩羅伽、梵語鉢摩羅伽、華言赤眞珠、佛地論云、赤蟲所出、大智度論云、此寶出魚腹中、其色明瑩、最爲殊勝、故名爲寶。

ケッペン(Koeppen)の寶石の記述(Natural History of Precious Stones.)には赤色の眞珠を梵語にて Lohitamukti と云ふとあり、梵語にて眞珠は Mukta と云ふこと前に述べたるが如し。

十七世紀の中頃に航行したるタベルニール(Tavernier)の記載によれば、當時印度の風俗、上下を通じて皆眞珠を以て耳を飾りしと云ふ。又結婚の儀式には必ず眞珠を用ゆ、これ其の女の清淨無垢なることを表明するなりと云ふ。印度モンゴル帝の王冠の記載を見るに贅澤實に驚くべきものあり、天蓋は全部金剛石と眞珠

印度希伯來埃及の眞珠

印度にありては、流石世界に有名なる眞珠の產地とて、其のこれを貴重したるは古く歷史以前にあり、漁場は印度半島とセーロン(Ceylon)島の間マナー灣(Gulf of Manaar)なり、貝の種類は小形にして學名をMargaritifera vulgarisと稱し、本邦のシンジュガヒに酷似し、或は同種に非ずやとも思考せらるゝなり。

暗黑時代に於ける傳說に、クリスナ(Krishna)と稱する神、海中より眞珠を獲てこれを印度に傳來し、其の女パンダイア(Pandaia)を飾りたりと云ふ。ミトラ(Mithra太陽の神)の神像には眞珠の紐(眞珠を貫きて珠數繫ぎにせるものを云ふ以下同じ)、並に眞珠の耳輪の裝飾あり、又眞珠或は金剛石は種々の神像の眼に挿入せるもの多しと云ふ。

佛敎經文中にも眞珠の記載多し妙法蓮華經普門品第二十五に曰く

若有百千萬億衆生爲求金銀瑠璃硨磲碼瑙珊瑚琥珀、眞珠等寶云々。

佛說無量壽經に曰く

介を指せるものにて、庶物類纂に記せるが如く「蚌一名珠母」なり、又珠母は介の肉を稱することもあり、即ち庶物類纂に曰く

取小蚌肉貫之、常曝乾、謂之珠母、客桂人率如晡、燒之以薦酒肉有細珠云々。

何れにしても眞珠を產むものゝ義にして、英語の Mother of Pearl とは指すものを異にせりと雖も、眞珠の母と云ふ意あること東西相通せるは一奇と謂ふべし。

茲に廉洲と云ひ、或は合浦縣又は威寧縣と云ふはいづれも皆廣東省の地名なりといふ。

リッテル(Ritter)亞細亞地誌(Erdkunde von Asien)に福建海峽の支那沿岸にも眞珠漁行はると記載せりと聞く。我琉球及び臺灣にクロテフガヒを產することより視れば、福建省の適當なる部位にも亦これ有るべしと雖も、果して此處に眞珠漁業行はるゝや否やは詳かならず。

支那は中古印度と交易するに至りて海產眞珠を盛に輸入し、マルコポロはフユ(Eaju)は其の交易の中心なりと記載せり。其他フイリッピン群島より來るもあり、又近世に至りては南洋諸島よりも輸入せり、かくの如きを以て普通には蚌珠とは唱へざるものか、ロブスチャイルド氏著英華字典には珍珠とありて蚌珠とは見へず。

眞珠光彩を有せる介殼(例へばテフガヒの介殼)を英語にてMother of Pearl獨語にてPerlmutterと謂ふ。又支那にも珠母なる語あり、本草圖經に「生於珠牡、俗謂之珠母」又本草衍義に「珠母與廉洲珠母不相類」など云へり、即ち茲に云ふ珠母とは眞珠を生ずる

又海產眞珠に關する記載あり、白虎通に曰く「海出明珠」と、即ち特に海にも眞珠ありと云ふなり、されど支那には太古には淡水眞珠ありて、海產眞珠の知られたるは比較的後世に屬するが如し、本草綱目に曰く

熊太古冀越集云、禹貢言淮夷蠙珠、後世乃出嶺南。

嶺南とは廣東省の謂なり。 元來支那廣東省東京(トンキン)灣はクロテフガヒ(Margaritifera margaritifera.)の產地にして、漁場は廉洲半島の南、蓬萊島並に雷洲半島にあり、其の產額一千八百七十五年に約四萬圓と云ふ(M. Weber: Pearls and Pearl-Fisheries. による)。

この地方の眞珠に關する記載亦尠からず、本草圖經に曰く

今出廉洲、北海亦有之、生於珠牡、俗謂之珠母、云々。

庶物類纂に曰く

廉洲志云、合浦縣海中、有梅青嬰三池、蜑人每以長繩繫腰、携籃入水、拾蚌入籃、即振繩令舟人急取之。

又曰く

威寧縣、有穿洲、其上多珠。

眞珠の產することはリッテル(Ritter)の亞細亞地誌(Erdkunde von Asien)及びアミオット(Amyot)のTransaction of Royal Asiatic Soociety II.等に記載せるありと云ふも、今この書手許になき故詳細を知り難し。

太古に於ける眞珠の記事はいづれも淡水眞珠に關したるものなり、周の應賓(紀元前一千年の頃と稱す)の著なる爾雅に曰く

以金者謂之銑、以蜃者謂之珧、以玉者謂之珪。

註曰、金蚌玉飾弓兩頭、云々。

說文云、唇屬郭云卽唇也、謂老產珠者也、一名蚌、一名含漿、周禮謂之貍物。

卽ち周の世既に蚌を以て裝飾に供せしなり。更に古きを書經とす、その禹貢の篇に曰く

厥貢惟土五色、羽畎夏翟、嶧陽孤桐、泗濱浮磬、淮夷蠙珠暨魚。

淮夷とは今の江蘇省淮水の上流地方の稱なり、而して蠙は蚌の別名なり、則ち知る支那にありては五千年の昔、淡水眞珠を貢物に徵したることを。而してこの書經中の記載は世界に於ける眞珠に關する最も古き記載の一なり。

中の蚌珠に關するものは其の一例なり、

又庶物類纂に

本草衍義曰、眞珠小兒驚熱藥中多用、河—北塘—濼中、亦有圍及寸者、色多微紅、云々。

河北とは河南省の北にして黄河の北方を云ふなり、且つ色多微紅と云ふこれ明に淡水眞珠なり。

本草綱目に曰く

蜀中、西路女瓜出者、是蚌蛤產也。

蜀中とは今の四川省の地なり、故にこれ亦淡水眞珠を云ふなり。マルコ、ポロも亦支那淡水眞珠に關して記載せることあり、其の (Province of Caindu) 一節に曰く

此處には一大湖水ありて眞珠を饒產すと雖も、人民の自由に漁獲することを許さず、蓋しこれを放任する時は眞珠の供給多きに過ぎその價の減せんことを慮ればなり、この湖水にて眞珠を漁するは只快樂の爲め皇帝の欲する處に從ひてなさしむ、若し自己の爲めこれを漁する者あらば直に死刑に處せらるゝなり。

(Caindu) とは今の四川省の南方並に雲南省の地を指すなり、なほこの地方に淡水

高數丈、復堅、意無如之何。

戰國策云、川蚌出曝、而鷸啄其肉、蚌合而拑其喙、鷸謂蚌曰、今日不雨明日不雨、即有死蚌、蚌謂鷸曰、今日不出、明日不出、即有死鷸、考此諸説、則蛤海中者、蚌河湖中者、必焉。

按蚌井貝(ドブガヒ)之大者也、江州琵琶湖多有之、云々本艸所謂、眞珠乃蚌珠也。

是れによりて之れを視れば、蚌とは長形の辨鰓類の總稱に用らるゝも、元來蚌なるものはカラスカヒ科(Unionidae)の種類を謂ふものにして、大倭本草又は本草啓蒙に記載せるが如く、我邦のカラスカヒ又はドブガヒに當るものなり、前記せる本草正僞摘錄にいふアコヤ貝是蚌なりとは非なり。

按ずるに、支那には大河湖沼多くして蚌、馬刀の如きカラスガヒ科の介を產すること夥しく、この介殼を粉にし蚌粉と稱し、墻壁を塗るに用ひたること本草綱目等に記載せり。之れに反して海に產するシンジユガヒ科、或はアハビ科は之を產すること多からず、從つて眞珠はカラスガヒ科の蚌より生ずるもの最も普通なりしならん、故に眞珠のことを一に蚌珠と唱へしなるべし。

支那には淡水眞珠即ちカラスガヒ眞珠に關する記載頗多し、前に記せる洞庭湖

さて、この蚌とは如何なるもの謂ふか。本草綱目に據れば

蚌、蚌與蛤同類、而異形、長者通曰蚌、圓者通曰蛤、皆形象也、後世混稱蛤蚌者非也。

雀入大水、爲蜃、蜃即蚌也、生江漢渠瀆間、老蚌含珠、殼堪爲粉。

又曰く

蚌類甚繁、今處々江湖中有之、惟洞庭漢沔獨多、大者長七寸、狀如牡蠣輩、小者長三四寸、狀如石決明云々。

庶物類纂に曰く

邵武府志曰、蚌生溪澗池澤中、殼薄形圓、而者大者、幾如掌、本草謂蚌全無毒、云々

又曰く

宋范致明岳陽風土記曰、洞庭湖中舊有蚌、其大如半席、深夜側立一殼、乘風往來煙波間、中吐珠與月相射、漁者百端取之莫可得近、久不見。

和漢三才圖會に曰く

五雜俎云、吳陣湖傍有亘潭、中產老蚌、其大如船、一日張口、灘畔有浣衣婦、以爲沉船也、蹴之、蚌閉口而沒、婦爲驚仆、嘗有龍來取其珠、蚌與鬪三晝夜、風濤大作、龍爪蚌於空中、

支那の眞珠

支那にては眞珠又は珍珠と謂ひ、又之を蚌珠、或は蠙珠と稱す、康熙字典によれば蠙是蚌之別名とある故、蚌と蠙とは同じものを云ふなり。呂字箋に曰く

珍珠其種甚多、不止于蚌、而蚌珠爲最。

本草綱目に曰く

龍珠在頷、蛇珠在口云々皆不及蚌珠也。

又曰く

蜀中西路女瓜出者、是蚌蛤產、云々。

和漢三才圖會に曰く

按、眞珠以鰒珠爲最上、然得之者鮮、故今用蝛蟽(アコヤガヒ)淺蜊(アサリ)二種而已、蚌珠亦不多依和漢土地有異乎。

本綱一日、石決明產也、一日蚌蛤產也、中以蚌珠爲眞矣。

如斯支那にては蚌の眞珠を以て眞となし、又最も普通としたりしものなり。

でざるなり。目今の如き眞珠の價格最も騰貴せる時に於て猶且つ此くの如し。これを本邦の他の重要水產物に比すれば誠に些々たるものにして、彼の濠洲トーレス(Torres)海峽、西濠洲の沿岸、印度のマナー灣(Gulf of Manaar)波斯灣、墨西哥のカリホルニヤ灣(Gulf of California)等に比すれば誠に雲泥の差あるなり。然れども幸に本邦の眞珠は世界に有名なるものなれば、若し其產額を饒多にしてこれを歐米に輸出しなば顧客を得んこと甚だ易々たるべし。而して前述の如く、本邦に於けるシンジュガヒの分布は廣大なり。若しその蕃殖保護の方法宜しきを得ば、彼の印度或は波斯灣と拮抗せんこと敢て難事に非ざるべし。

著名なる所以は恐らくは十三世紀中葉に出でたるマルコポロ(Marco Polo)の記事に原因せるならん、そのチパング島(The Island of Chipangu)の記述(The Book of Sir Marco Polo)中に曰く

この島國には薔薇色の美麗なる大球形の眞珠饒產し、死人を火葬にする時にはこの眞珠一個をその口中に納むるの風習あり。

チパング島とは我が日の本瑞穗の國を云ふなり。當時支那に於けるポロの本邦觀は實に一種極樂土なりしものゝ如く、ポロ以後ケンプエル(Kaempfer)タベルニール(Tavernier)ツンベルグ(Thunberg)等本邦の眞珠を記載せるもの亦皆其の豐富なることを唱せり。

抑も本邦に於けるシンジユガヒ科(Pteridae)の分布は頗廣く一府十六縣の沿岸に亘れり。其內最著名なる產地を擧ぐれば、沖繩諸島を始め、薩南大島の瀨戶、肥前の大村灣、對州の淺茅灣、土佐の高岡灣、志摩の英虞灣、能登の七尾灣等なり。而して此等の諸產地より出づる眞珠の產額を見るに、元より正確なる統計を缺くが故に明に知るによしなしと雖も、大約總計一ヶ年本邦を通じて二萬圓乃至三萬圓を出

たらんには再び訪ね來たらんに、其時はこれと換へ給へとて、一升許の小石の如きものを質にして出立し往く處を知らず、後幾年を經るも便なかりければ、主人は其小石の白色にして盆石に用て妙なればとて誰、彼と近隣のものに配ち與へたりとのことなり、この談を聽きし石井氏はそは面白きこと哉、其小石の如きもの是非に一見したしとの請に、宿の主人は彼此と奔走探索して、漸く戸棚の引出しより二握り許りを得て氏に與へたりと、余は石井氏の厚意により其の少許を得てこれを檢するに、確に眞珠にして歪球形のもの多く、小豆位のものを最大とし大さ不揃なり。カキの眞珠に非ざれば、アサリか、或はウバガヒの眞珠なるべく、余程古きものと見え光澤を失へり。假へ何の種類の眞珠なりとも一升許も集むることは容易の業に非ればば、旅人の大切にしたるも道理なり、前記三才圖會に記す處と合せ見ば、昔はかゝる裝飾にもならぬ眞珠を多く集めたるものと見ゆ。

爾來本邦は眞珠の産地として其名外人間に嘖々たり、されば世界の眞珠のことを記載するもの必ず本邦を擧ぐ。先年南米の智利政府は我シンジユガヒの移殖を企て、農商務省水産講習所に交渉したることありしと聞けるが、此の如く本邦の

これに依りて見ればイガヒ眞珠は尾張眞珠と稱したるものゝ如し。本草綱目啓蒙に曰く

尾張眞珠は、色濁白にして光彩なし、或は黒色を帶るあり、是蛤仔、文蛤、魁蛤等の珠にして眞珠に非ず

淡菜に稀に珠あり、色微紅紫にして濁れり、藥舖尾張眞珠の中に雜ゆ

これに依りてこれを視れば、アサリ、カキ、イガヒ等の眞珠をはじめ總て劣等の眞珠はこれを尾張眞珠と名けたるものゝ如し。

漢方醫によりて眞珠が藥用に供せらるゝに至りてより裝飾に堪へざるアサリ眞珠の如きもの多少市場に出づるに至りしものならん。神奈川の紳士石井直方氏の奇談あり、氏先年信州松本に遊び居ること月餘、或る時旅宿の主人の語るに、昔時一旅人ありてこの宿に投じ、偶々病に罹りて永く滯在す、漸く癒て去るに臨み、旅人に貯なく宿料を支拂ふこと能はざりしかば、白色の小石の如きもの一升許を袋に入れたるを出して主人に告ぐる樣、これは自分が命よりもと大切にせるものなれど、永々の厄介謝するに法なければこれを殘し置くべし、されど若し後年金を得

ヒをイカヒと謂しと云ふは非なり。　イガヒのことは令義解或は延喜式などにも見へたり、されば平安朝以前よりこの介の採集せられたるは明にして、既に介の捕獲せられたる上はこれより生ずる眞珠も亦同時に採集せられしや疑なかるべし。

以上述べたるが如く本邦古代に於ける眞珠の種類にはシンジユガヒ眞珠、アハビ眞珠イガヒ眞珠並に淡水眞珠のありしを知るべし。　然るに近代に至りて伊勢眞珠、尾張眞珠の名を以て區別したることあり。　即ち和漢三才圖會に曰く

伊勢眞珠、蠣蜒(アコヤガヒ)珠、勢州多取之、海面大村亦有、其眞珠小者大如猪實子、中者如麻仁、大者如黄豆而重五人分者爲上云々

尾張眞珠、淺蜊(アサリ)貝珠也、尾州多取之、近年藝州廣島亦有、其珠大小與伊勢眞珠不異、但無光澤、如魚眼價亦不價

斯くの如く尾張眞珠とはアサリの眞珠なりとあり。　然るに倭訓栞には貽貝の珠は尾張眞珠なりといへり、又黒色のもの多しともいへり。

目八譜に曰く

觀文介譜云、淡菜肉中珠あり即ち尾張眞珠是なり

貝盡浦の錦に云ふ

貽貝、蚌類是はイカヒとも云なり、和歌にて云イカヒと此圖とは大に違へり云々

西行の歌によめる時はアコヤと云ふべからず、イカヒと云ふべし、寶のあとゝ云は中の眞珠を取しからと云意なるべし、されども眞珠は石決明より出るものなり貽介よりは出まじ、此事うたがはし識者にたゞすべし。

然るに西行法師の詠せし歌の端書に曰く

イラコへ渡りたりけるに、イカヒと申蛤に、「アコヤ」のむねと侍るなり、其をとりたるからを、たかくつみをきたりけるを見て

とありて、其場處を明指せり。而してイラコとは三州伊良胡にして、其の附近はシンジユガヒ即アコヤガヒの捿息する處にあらざれ共古來イガヒの饒産地たり。これを以て視れば法師の歌のイガヒは、今日云ふイガヒ即 Mytilus crassitesta にしてシンジユガヒには非ず、且イガヒは、比較的眞珠を多く産する介なり。西行がアコヤと云ひし故イガヒをアコヤガヒなりと疑ひしものならんか、されど前に述たるが如く、アコヤとは眞珠と云ふ意味なりと見るべく、これに抗泥して古はアコヤガ

述べたる萬葉集の阿波妣珠必しもアハビ眞珠を指すにあらざるが如く、共に只眞珠と云ふに同じ。されば萬葉集の鰒珠を六帖にアコヤダマと點せるも、何れも眞珠と云ふことにして變りあることなし。廉持大人曰く「品類をきはやかに辨ることをむねとする後世の心になすらへて古をはかるべきに非ざればなり」と。前出西行山家集の歌にてイガヒの眞珠も亦源平時代以前既に採集せられしことも判るべし。然るにこの和歌のイガヒに就て疑を挾むものあり、目八譜に曰く

白石和名抄の貽貝と云し註に、黒色の貝也と見へて一名黒貝とは見へず、或云しはイ貝はアコヤ貝なり夫より出し珠をアコヤの珠と云ふなりと云へり、後に西行法師の歌にイカヒのからをと、さらば今アコヤのカヒと云ひて其珠の蛤より は長くして黒き珠を産したるは蚌と云し者是なりとぞ見たりと云へり、今按に、世にイカヒと云ふものは其形不典にしてアコヤ貝をも古はイカヒと云しと見へたり。

斯くの如く目八譜には、眞珠介一にアコヤ貝又貽貝と云ふとありて、西行のイガヒはアコヤガヒなりとするなり。

ほし君を」と云へるが如く親、子、妻、戀人をも友をも、總て最愛類ふるに上なきを眞珠にたとへたり、「白玉の吾子ふる日」(萬葉集)「世になくきよらなる玉のをのこ御子さへ」(源氏物語桐壺之巻)の如し。　かく考ふればアコヤとは最愛、貴重の意にして即ち眞珠と云ふことなり、而しそは特にアコヤガヒ(シンジユガヒ)の眞珠を指すに非ず、西行法師の歌に「アコヤとるイガヒ」と詠せるにてイガヒの眞珠も亦アコヤと云ひしこと明なり。　又宇治拾遺物語に「珠の價無量なること」の條下に、淀にて船に乘る時珠を賣る男あり、其男袴のこしよりアコヤの玉の大なる豆計ありけるをとり出してとらせたりければ、遂に其の珠と古水干と交換したりと云ふ記載あり、按ずるに、淀にてとあれば恐くはこの眞珠は淡水眞珠なるべく、淀川或は伏見附近巨池等より出でしカラスガヒ眞珠なるべしと推せらる。　そのシンジユガヒ眞珠に非ざること明なるべし、しかもこれをアコヤのタマと云へるなり。

此くの如くアコヤとは眞珠と云ふに異ならざるなり、而してアコヤガヒと云ふは今シンジユガヒと呼ぶが如く、アコヤ即ち眞珠を出すが故にしか名けたるものなり、猶これを換言すれば、アコヤタマは必しもシンジユガヒ眞珠に非ず、恰も前に

アコヤを尾張の所名とせば、珠の眞珠は尾張なるべきに、今伊勢にて此貝をとりて、名はアコヤと稱するものは、昔尾張に多き貝の今伊勢にのみあるとは見へたり、しかのみならず、六帖鰒玉、西行歌の貽貝とともにアコヤといひしは、むかしアコヤにいろ〳〵の貝より、多くの珠をとりし故に混じて總名をアコヤとはいひしなるべし

即ちこの說は、總て眞珠のことをアコヤと唱ふるはアコヤと云ふ處に種々の介ありて眞珠を產したるが故ならんと云ふなり。今假りにアコヤなる場所ありとするも、此處よりアハビも出で、イノカヒも產し、シンジユガヒもありしとは考へ難し。何となれば此等の貝類は同處に捿息すること能はざるものなればなり。奥州の如き北部位にはシンジユガヒを產する處なく、尾州知多郡に今アコヤといふ地名なし。衣ヶ浦に沿へる處に阿久比と云ふ處あれど、此邊にては古は知らず、今はシンジユガヒなどの捿息する處にあらず。

余は寧ろ和訓栞の所說の如く、眞珠を寶として貴重し、愛寵の意味なりと云ふ我子ヤの說取るべきなりと思へり。古歌にも「白玉の見まほし御面」或は「白玉の見ま

以上列記せるが如く、平安朝以後にはアコヤダマ(或はアクヤタマと云ふコとクは音便によれる變化なり)と記せるもの多く、然もアハビタマと云へるものなし。殊に近世に至りては萬葉集古義品物解に説けるが如く、眞珠はアコヤガヒ(シンジユガヒ)のタマを云ふとせるなり。 例へば日本山海名産圖會に曰く

眞珠、是はアコヤ貝の珠なり、即ち伊勢にて取て伊勢眞珠と云ひて上品とし、云々

本草正僞摘錄に曰く

眞珠、用藥須知、伊勢を上とす、蚌珠なりと云ふ、今按ずるに志州鳥羽の海中に出づアコヤ貝の珠なり、是れ蚌なり、云々

偖て、このアコヤと云ふ意義に就て、日本山海名産圖會に曰く

或云、アコヤと云るは所の名にして尾張の國知多郡に有、又奥州にも同名あり、云々

又倭訓栞に曰く

阿古耶は所の名、尾張知多郡にあり、又奥州にもありといへどアコヤは吾子の義、愛寵の辭ヤは呼びかけ成るべし、云々

とあり、前出西行法師のアコヤとるの歌に就て日本山海名産圖會に曰く

宇治拾遺物語巻十四「珠の價無量なる事」の條に曰く
袴のこしよりあこやの玉の大なる豆許ありけるをとり出して、とらせたりければ云々。
百練抄巻に曰く
白河天皇承保三年六月二日、諸卿於殿上、完申大宗國返信物事、可ㇾ遣和琴、或云可ㇾ遣金銀類、或云可ㇾ遣細布、阿久也玉。
西行山家集に
あこやとるいかひのからを積みおきて
　　寶の跡をみするなりけり。
又前に記したるが如く、古今和歌六帖には
いせの海の海士のしわさのあこやたま
　　とりて後もか戀のしげけん。
新猿樂記に曰く
本朝物、云々阿久夜玉云々等也。

湖より眞珠を護たるを知るべし。　現今も琵琶湖よりは僅少なりと雖も年々淡水眞珠を産出しつゝあり。

奈良朝以後の記載にも亦眞珠に關するもの決して尠からず、先づ延喜式を見るに內藏寮式、諸國年料倶進の條に

白玉一千丸、志摩國所進、臨時增減。

民部式下、交易雜物の條に曰く

志摩國、白玉千顆。

雜式に

王臣、家使不得到對島島、私買眞珠擾亂百姓。

玆に云ふ白玉とはシンジユガヒ眞珠なること其の産地の志摩なるより推知せらる、且つこれを以て平安朝以前既に志摩及び對馬より眞珠を産出し且つ眞珠賣買の行はれしを知るべし。

皇大神宮儀式帳を見るに、出座御床裝束物七十二種の內に

白玉囊二口、納白玉一兩三分。

マにして重量一厘乃至三厘の眞珠の銀線にて數珠繫にせるものを以て縦横に飾られたり、其數幾何なるを知らず内には銀線の切斷して脱落せるものも尠からず、而してこの眞珠は確にシンジユガヒ眞珠なることを知る。この觀音像の眞珠は余が實見したる最古代の眞珠にして、又本邦に於て現存せる古代眞珠の一なるべし、これと殆ど時代を同くしては、奈良正倉院の御物中に眞珠を飾られたるものありと承れど、之れを拜するの機會なく玆に報道するの不能なるを悲む。實に奈良朝時代の我工業發達の度は或點に於て今日に比して敢て遜色なしと聞く、特に介殼應用の裝飾に至りては夜光介殼、アハビ介殼の螺鈿の精功を極むるものあり。斯くの如く介殼の裝飾に供せられたるを以て視れば、眞珠の貴量視せられたることと些の疑もなかるべし。當時最も尊重せられたる不空絹索觀音の白毫に寳冠に之れを用ひられたることは確にその好例證たるを失はず。かく奈良朝時代にアハビ眞珠並にシンジユガヒ眞珠の存在せしことと確實なるが、この外尙カラスガヒ科の眞珠卽ち、湖水珠の當時既に用られたりし證左あり。萬葉集卷十一の歌に淡海（アフミ）海沈白玉（ミシズクシラタマ）と云へり、この淡海（アフミ）の海とは近江の琵琶湖を謂ふものなれば、當時琵琶

島（シマ）にしてアハビの產地なり。　さればこの鰒珠は明にアハビ眞珠を指すならん。延喜式神名帳を見るに伊豆國田方郡二十四座の內に、鰒玉白珠比咩命（アハビダマシラタマヒメノミコト）神社と申すがありて、大日本史神祇志によれば今は君澤郡赤崎にありて赤崎明神と云ふとあり、伊豆國はシンシユガヒを產する處に非ず、これ又明にアハビ眞珠のことなるべし。

此の如く、天平年間に於てアハビ並にシンシユガヒの眞珠ありて共に裝飾に用られしことは明に推知するを得べきが、更に其の實例を示す可きものあり。　余は新納忠之助氏の好意に依りて、これを奈良三月堂に安置せられたる不空羂索觀音の像に就て觀ることを得たり、この觀音像は天平年間の製作にして實に太平洋中の光明とも稱せらるゝものなりと云ふ、今これを拜するに白毫並に寶冠の裝飾に眞珠を用られたるを視る、白毫のものは直徑二分五厘計、重量一分計の偏平圓形のアハビ眞珠なり、而して寶冠中央に一對の眞珠かゝれり、其內一個は紛失せるも他の殘れるものを視るに歪形茄子形にして長さ四分計重量二分計、その一端に孔を穿ちて銀線を貫かれたり、これ亦アハビ眞珠なり、その他寶冠には歪形の所謂ミヽダ

てアハビダマなる語は單に眞珠と云ふ意味に用ふるに至りしならんか。今萬葉集中のアハビダマを詠せる歌に就て其産地を見るに、伊勢、木の國即ち紀伊なりと云ふ、此等の地方はアハビを産せざるに非ざれども亦眞珠の有名なる産地なり、卷十八に載する所の爲贈京家願眞珠歌中に珠洲の海士のかつくアハビダマとあり、偖て此の珠洲とは今の能登を云ふなり、萬葉集中には他にも珠洲の浦なぞ云へり、珠洲とは珠を生ずる場所の意にして眞珠を出すが故にしか名けたるものならん、そは能登七尾灣は有名なるシンジユガヒの産地なればなり、日本地理志料には珠洲は須須即ち錫なりなどあれど余は此の說は當を得たるものに非ずと思ふなり、次ぎに此の歌を見るに、長歌には安波妣多麻とありて、後の短歌には白玉又は思良多麻とあり、即ち安波妣多麻とは必ずしも特にアハビ眞珠を指したるに非ざるが如し。

されば萬葉集中の安波妣珠は今の所謂アハビ眞珠を意味するに非ず、又廉持大人の所說の如く總てシンジユガヒ眞珠を指すにも非ず、單に眞珠と云ふに他ならずと解すべきものならん。卷六に野島のアマノ鰒珠と云ふ、野島は蓋し淡路の沼

眞珠を指すものならん、古代にはアハビもシンジユガヒも區別せずして、シンジユガヒ眞珠を安波妣珠と唱へしものならんと云ふなり。

さて既に前に述べたるが如く、シラタマなる語は確にシンジユガヒ眞珠の存在を證明すと雖も、萬葉集中に詠せる安波妣珠なる語、總てアハビ眞珠を指せるものなりや、或は應持大人の唱ふるが如く、シンジユガヒ眞珠をアハビダマと云ひしものなるや。

元來アハビ並にシンジユガヒは共に太古より食料として採集せられ、從て兩種の眞珠は共に知られたるに相違なからんも、シンジユガヒの分布は澳灣の局處に限られたるに反し、アハビは沿岸岩礁到る處に多し、故に假令アハビはシンジユガヒに比して眞珠を生ずること尠しと雖、比較的廣く存在し、廣く用られたるはアハビ眞珠なりしなるべし、且又大形の眞珠はシンジユガヒ眞珠に非してアハビ眞珠にあり、されば今日にありては、アハビ眞珠の聲價は遙かに木口に及ずと雖、古代にありてアハビ眞珠は最も貴重せられたるものならん。前記武烈太子の御歌に影姫を以てアハビダマに例へたるにても推知することを得んか。斯くの如くにし

とあり、即ち倭訓栞、並に日本山海名產圖會に記せるが如く、萬葉集の鰒珠を六帖にてはアコヤダマと點せり、而してシンジユガヒは一名アコヤガヒと謂ふ、即ちアコヤダマはシンジユガヒの眞珠を謂ふなり、かくの如くアハビ眞珠とシンジユガヒ眞珠と混同せるなり、而して萬葉集の鰒珠に關して、鹿持雅澄は其の著萬葉集古義品物解に辯じて曰く

按に、今眞珠と云ふは蚌(アコヤガヒ)より出る珠なり、この貝をやがて土佐にては蚌貝(タマノカヒ)と呼べり、石決明(アハビ)より出るには非らず、これによりて思ふに、安波妣珠とはいへども實には蚌(アコヤガヒ)の珠にぞありけむ、しかるを上つ代には石決明をも蚌(アコヤガヒ)をも一つ物として安波妣珠と呼りしにもあらん歟、云々今は眞珠は石決明より產するに非ずと云ふ說を正として、其定に本草家にては決め言ふとなれど品類をきばやかに辨ふることをむねとする、後世の心になすらへて古をはかるべきに非ればなり、さて今の世にアハビ珠と云ふものをば眞珠とはいはず貝の珠と呼て、云々眞珠に似て眞珠よりは微し青みありて硬しとぞ猶よく考ふべし。

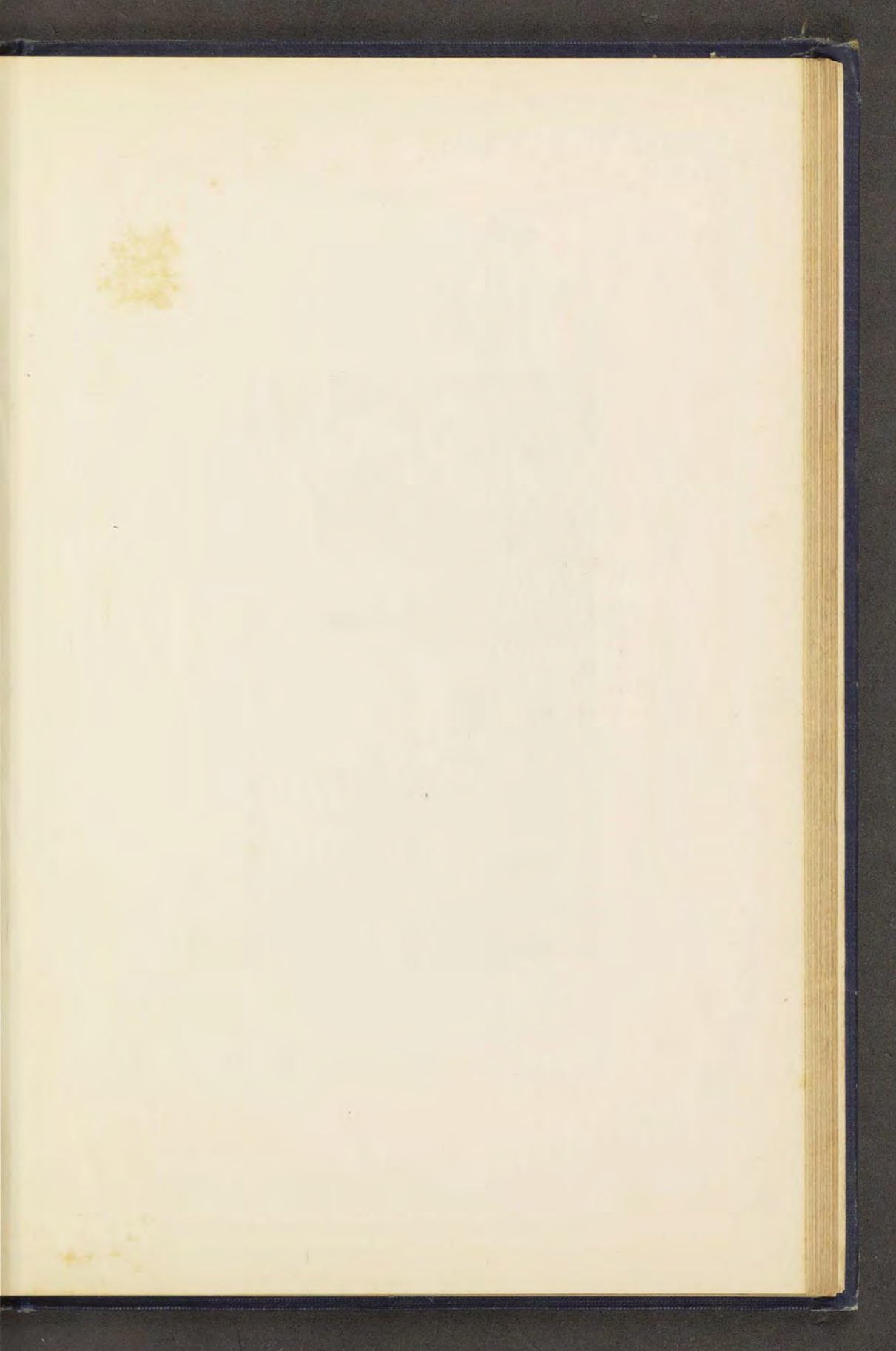
即ち鹿持大人の說に據れば、萬葉集中のアハビタマは實は今のシンジユガヒの

語はシンヂユガヒ眞珠即ち、本口より起りしなり。前に述べたるが如くアハビの眞珠はアハビ介殼の色の如く紫綠色を帶べり、此れをシラタマ(白いタマの義の)とは云ひ難し、之に反してシンジユガヒ眞珠は銀色のものを普通とす、故にこれらをシラタマと唱へしなるべし、即ち元來シラタマとはシンジユガヒ眞珠より出てし言葉なれど、遂に何の種類を問はず總て珠のことをシラタマと唱ふるに至りしなり、さればアハビの眞珠を武烈太子の御歌に阿波寐之羅佗魔(アハビシラタマ)と云へり、而て又シラタマなる語の行はれしことは當時既にシンジユガヒ眞珠を貴重したるを證明するに足る。

萬葉集中にはアハビダマを詠せるもの多し、卷六、卷七、卷十三、卷十八に於けるが如し、又允恭紀の記事に據りて和漢三才圖會に曰く

按、眞珠以二鰒珠一爲二最上一、然得レ之者鮮、故今用二鹹蜷(アコヤガヒ)淺蜊(アサリ)二種一而已、云々

然るに玆に考ふべきは前記萬葉集卷七中の一首を古今和歌六帖には

伊勢の海の海士のしわざのあこやだま
とりて後もか戀のしげゝん

第一圖　蜑女の眞珠貝採取作業

白玉之、緒絶者信、雖然、其緒又貫、人持去家有

巻十八に

爲贈京家願眞珠歌一首

珠洲乃安麻能、於伎都美可未爾、伊和多利弖、可都伎等流登伊布、安波妣多麻、伊保知毛我母、波之吉餘之、都麻乃美許登能、許呂毛泥乃、和可禮之等吉欲云々

反歌

白玉乎、都々美氐夜良波、安夜母具佐、波奈多知波奈爾、安倍母奴我禰

於伎都支麻、伊由伎和多里弖、可豆具知布、安波妣多麻母我、都々美弖夜良牟

和伎母故我、許已呂奈具佐爾、夜良無多米、於伎都之麻奈流、之良多麻母我毛

思良多麻能、伊保都々度比乎、手爾牟須妣、於許世牟安麻波、牟賀思久母安流香

巻十九に

白玉之、見我保之君乎、不見久爾、夷爾之乎禮婆、伊家流等左奈之

奈古乃海部之、潜取云、眞珠乃、見我保之御面、云々

如斯眞珠はシラタマ又はマタマと云へり、偖て此のシラタマ即白色のタマなる

海神、手纏持在、玉故、石浦廻、潜爲鴨
遠近磯中在、白玉、人不知、見依鴨
安治村、十依海、船浮、白玉採、人所知勿
海底、沈白玉、風吹而、海者雖荒、不取者不止
水底爾、沈白玉、誰故、心盡而、吾不念爾

卷十一に

淡海海、沈白玉、不知從戀者、今益
白玉、纏持、從今、吾玉爲、知時谷

卷十二に

眞珠服、遠近兼念、一重衣、一人服寢

卷十三に

木國之、濱因云、鰒珠、將拾跡、云而云々

卷十六に

眞珠者、緒絶爲爾伎登、聞之故爾、其緒復貫、吾玉爾將爲

擧騰我瀰儞、枳謂屢筒瞪比謎、艴摩儺羅厖、婀我哀屢艴摩能、阿波寐之羅佗魔ハビアを割て眞珠を得たるは之れ即ちアハビ眞珠なり、又阿波寐之羅佗魔と云ふも亦明にアハビ眞珠なり、この御歌によりて視るも、當時既にアハビ眞珠ありて其の如何に貴かりしものなるかを推することを得ん。

天平十九年二月十一日調、大安寺資財帳に曰く

白玉壹佰參拾伍丸、一如棋實

萬葉集中には眞珠を詠みたる和歌尠からず、例へば

卷五山上憶良天平五年の詠に

和我中能、產禮出有、白玉之、吾子古日者、明星之、開朝者云々

卷六に

野島之海子乃、海底、與津伊久利二、鰒珠、左盤爾潛出、云々

卷七に

伊勢海之、白水郎之島津我、鰒珠、取而後毛可、戀之將繁

海神、持在白玉、見欲、千遍告、潛爲海子

き珠の意なり、此の日本書紀の記載と同じ事の土佐風土記に載せられたるあり。

皇后下島、休息磯際、得一白石、團如鷄卵。皇后安于御掌、光明四出、皇后大喜詔曰、是海神所賜白眞珠也、故爲島名云々。

本居翁の説に據れば、『一つ事なるを國の異なるは傳の異るなるべし』と云ふ。

日本書紀允恭天皇の曰く

十四年秋九月癸丑朔甲子、天皇獵于淡路島、時麋鹿猿猪、莫々紛紛、盈于山谷、焱起蠅散然、終日以不獲一獸、於是獵止以更卜矣、島神祟之曰、不得獸者是我心也、赤石海底有眞珠、其珠祠於我、則悉當得獸爰、更集處々之白水郎以令採、赤石海底深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、勝於諸海人、是腰繫繩入海底、差頃之出曰、於海底有大蝮、其處光也、諸人皆曰、島神所請之珠、殆有是蝮腹乎、亦入探之、爰男狹磯抱大蝮而泛出之乃息絕、以死浪上、既而下繩測海底六十尋、則割蝮實眞珠有腹中、其大如桃子、乃祠島神、而獵之多獲獸也、唯悲男狹磯入海死、之則作墓厚葬、其墓猶今存之。

同書武烈紀太子の御歌に

授鹽盈珠鹽乾珠拜兩個云々

こは一の比喩的記載なるべければ、玆に云ふ鹽盈珠、乾鹽珠とは如何なるものを指すにや明言し難しと雖も、海より出でたる貴き珠とあれば、眞珠のことを指して云へるならんかと思はる。

神代に於ける眞珠の記載は以上の如し、これを以て直に神代眞珠の存在を確證するに足らずと雖も、其存在を推知するには難からざるべし。

和銅年間に奉られし肥前風土記に曰く

昔時纏向日代宮御宇、天皇誅滅珠磨噌唹、云々寳有二色之玉、一者曰石之神木蓮子玉、一者曰白珠云々天皇勅曰、此國可謂其足玉國、今謂彼杵郡訛之也。

纏向日代御宇天皇は景行天皇なり、彼杵郡とは現今本邦に於ける眞珠の著名なる産地大村灣沿岸の地方なればこの條に云へる白珠は正しく眞珠のことなるべし。

日本書紀、仲哀天皇の巻に曰く

秋七月辛亥朔乙卯、皇后泊豐浦津、是日皇后得如意珠於海中。

此の如意とは佛敎字典によれば如意即至寳なり即珠なりとありて、如意珠とは貴

日本の眞珠

由來本邦は九州、四國、本土にシンジユガヒの産地多く、加ふるにアハビの分布は廣濶なり。且つ此等の介は獲るに易く、食料として最良好なる材料たり、從つてこれより生ずる眞珠は裝飾として有史以前頗る古昔より貴重せられたること疑なしと雖も、今明に之を知るに由なし、只眞珠に關する舊記にては古事記玉依比賣の御歌に

阿加陀麻波、袁佐閇比迦禮杼、斯良多麻能、岐美何余曾比斯、多布斗久阿理祁理。

玆に云ふ斯良多麻とは眞珠を指すものなりとは斷じ難けれども、日本紀私記にも云へる如く眞珠をシラタマと云ひしこと明なれば、此の御歌も眞珠を指すものと推して可なるべし。

箋注和名類聚抄に曰く古所ㇾ云之良多麻蓋皆眞珠非二白玉一也と。

又古事記に海神が火遠理命に遇ふ條に

其綿津見大神誨曰之、云々出鹽盈珠而溺、若其愁請者、出鹽乾珠而活、如此令惚苦云々

病的產物なる膽石、牛の膽石或は齒科醫コーシユ(D.E.Caush)の人類の齒髓中に見たる小體を云ふなり。北セレベスに於て得たる椰子眞珠の標本は英國キユー博物館に保存せられ、又之に類似のものは他の植物の花、果實にも見出さるゝことありと云ふ。竹類に"Tabascheer"と稱する硅酸分泌物あり、これ亦植物眞珠の一なりと云ふ人あり。余は曾て鯨獵家高橋新太郞君の齎せるマツコウクヂラの齒の髓中に半透明なる眞珠的結成體を見たることあり、これ鯨眞珠(Whale Pearl)と稱すべきものか。支那にても前に記せる如く龍珠、蛇珠、魚珠、鼈珠、蛛珠など云へり。印度にも亦これに似たる傳說あり、卽ち眞珠は象、魚、蛇、龍、竹等よりも生ずと云ふなり、然れども此等軟體動物以外より生ずるものは眞珠とは稱し難く、單に珠と云ふべきならん、されば Pearl なる語は時に珠と同意味に用ひらるゝものとなすべきか。

Modiola modiolus　イガヒの類

Strombus gigas (West India Conchshell)　ソデガヒの類

Turbinella scolymus (Chank shell).　オニコブシの類

Turbo olearius　ヤコウガヒ

Turbo sarmaticus　サヾエの類

Haliotis　アハビ

Anodonta, Unio, Dipsas etc.　カラスガヒ科の諸種類

かくの如く眞珠を生ずる貝の種類は多しと雖、裝飾用として普通市場に出づるものはシンジユガヒ科(Pteridae)、カラスガヒ科(Unionidae)、アハビ科(Haliotidae)、及びイガヒ科(Mytilidae)に屬するものなり。其他例へばシヤコ眞珠の如きは寧ろ珍奇なるものとして玩賞せらるゝものなり。

ハーレー(George Harley)或はローレンスハミルトン(J. Lawrence-Hamilton)は哺乳動物或は植物にも亦眞珠を產すと唱ふ、例へば哺乳類の眞珠(Mammalian Pearls)、人間の眞珠(Human pearls)、椰子眞珠(Cocoanut Pearls)等稱するものなり、即ち人類器官の

Tridacna gigas　シヤコ

Arca noae　アカガヒの類

Trigonia pectinata　サンカクガヒの類

Venus　オニアサリ

Malleus　シユモクガヒ

Anomia cepa　ナミマガシハの類

Placuna placenta　マドガヒ

Ostrea edulis　カキ

Ostrea hippopus　カキ

Pinna squamosa　タイラギ

Pinna nobilis　タイラギ

Spondylus gocderopus　メンガヒの類

Mytilus edulis　イガヒ

Modiola vulgaris　イガヒの類

(Tapes)、ハマグリ (Cytherea)、ウバガヒ (Trigonella)、バカガヒ (Mactra)、ツバメガキ或はナガテフ (Melina)、シヤクシガヒ (Pecten)、又腹足類にはアカニシ (Rapana)、ヤコウガヒ (Turbo)、トコブシ (Haliotis) 等あり。第五回内國勸業博覽會に於て水產館内鹿兒島縣よりの出品中に稀有の眞珠ありしが、比較的透明にして桃色の班紋あり、桃色大理石の球の如し、裝飾としては用に適せずと雖も珍らしきものなり、これはマンネンガヒ (Cassis rufa) の眞珠なりと云へり。

今日知られたる種類は以上列記したるが如しと雖、若し特に力めて之を探索すれば、此等の外尙諸種の貝よりして眞珠を發見するなるべし。

眞珠はこれを生ずる介の種類によりてその名を附す、例へばアワビより生じたる眞珠はアワビ眞珠と云ひ、ホタテガヒのものはホタテガヒ眞珠と云ふ、又カラスガヒ科の種類より生じたるものは之を淡水眞珠或は湖水珠と稱す、英語にても"Fresh-water Pearl" (獨にては Susswasser Perle) と唱するなり。

以上は本邦に於ける眞珠を產する貝の種類なり。今シンジユガヒ科以外の貝にて眞珠を生ずと稱せらるゝ種類を擧ぐれば

球眞珠と呼ばるゝ種々の色彩を有する眞珠はこれより生ずと云ふ。

以上はシンジユガヒ科の種類なり。この他にイガヒ (Mytilus crassitesta) よりも亦眞珠を生ず。其の色は乳白のものもあれど、黒色を普通とし、光澤佳なるを通例とす。又ホタテガヒ (Pecten yessoensis) より眞珠を生ず、乳白色にして裝飾用に適せず。腹足類にてはアハビ (Haliotis gigantea) より眞珠を生ず、其の光澤美なりと雖も、色介殼の眞珠層に似て濃艶なるを以て、聲價本口に及ばず、時に銀色にして本口に匹敵するものありと云へども、こは頗る稀なりとす。

淡水産の貝類にてはカラスガヒ科 (Unionidae or Naiades) に屬する諸種類より美麗なる眞珠を生ず、其の色彩光澤共に本口と區別し難きものあり、又時には獨特の珍奇美麗なるものを生ず。この他シジミ (Corbicula) よりも生ずることあり、この眞珠は薬用として最も効果多しと傳へらる。

以上の種類より生ずる眞珠は裝飾用或は薬用として市場に見るものなれど、此他に自ら實檢し、或は當業者の眞珠を生ずと確言せる介の種類には、諸種のタイラギ (Pinna)、マテ (Solen)、ハイガヒ (Arca)、シヤコ (Tridacna)、カキ (Ostrea)、アサリ

眞珠を生ずる介の種類は尠からず、辨鰓類にも、腹足類にも、海產の介にも、淡水產の種類にもこれを生ずるなり、總ての介は眞珠を產するものに非ずやとも思はるるなり。然れども介の種類によりてこれより生ずる眞珠の性質を異にし、裝飾に堪ゆるものと然らざるものとありて、美麗なる眞珠は勉めてこれを探索すれども、然らざるものは捨てゝ顧る者なし。本邦にては裝飾に堪えざる眞珠も藥用として貴重するが故に、種々の介より眞珠は採取せらるゝなり。

現今本邦に產する裝飾用として最も普通のものはシンジユガヒ或はアコヤガヒ (Margaritifera martensi) より生ずる眞珠なり。この眞珠は市場に於て本口(ホンクチ)と唱へられ、最も光澤に富める上乘の眞珠なり。この他シンジユガヒ科 (Pteridae) に屬するものにてはクロテフガヒ (Margaritifera margaritifera) 及びマベ (Electroma sp.) の兩種あり、マベは本邦に於けるシンジユガヒ科中最大の種類にして、殼の高さ尺餘に及ぶもの尠からず。從つてその眞珠は稀に非常なる大形のものあり。クロテフガヒの眞珠は其色彩其光澤共に本口に優るものを生ず。此等の他に尙琉球にて普通にシンジユガヒと稱せらるゝ Margaritifera panassesae なる小形の種類あり、世に琉

にBacca なる語を用ゆ、蓋し漿果の意味なるべし、又詩的に球形の眞珠を Unio と稱す、これ單一の意味にしてプリニウス (Plinius) の唱へし眞珠の價値は光澤、形狀、重量、大さ等によりて定まるものにして、然も幾多の眞珠を集むるとも決して相等しき眞珠二個を得ること能はず、各個各自に獨特無双單一のものなりとの說に出でたるなり、誠に趣味ある語と謂ふべし。希臘語に眞珠を *Μαργαρίτης* と云ふ、こは梵語にて清淨無垢と云ふ意味なる Manâaritâ より出でたりとの說あり。之より又英語にて Margarite とも唱ふるなり、且つ Margaritum なる語は羅馬の末期に於て Unio に對して歪形眞珠を呼ぶに用ひられたり。梵語にては眞珠を Mukta と云ふ、放逸或は脱出の意なり。蓋し眞珠は介より脱出する涙の凝固したるものなりとの考より出でたるなり。支那にては眞珠或は珍珠(チンチユ)と云ひ、又蚌珠或は蠙珠、蚌胎、玖瑰なぞ唱ふ。本邦にてはシラタマ又はマタマと唱へしなり。日本紀私記には眞珠を之良太麻と云ふとせり。萬葉集にも思良多麻或は之良多麻と記されたり。マタマとは眞珠より出しならん、シンジユなる言葉は支那語の眞珠より起りしものにして、もとより遠き古には唱へざりしなり。

珠玉謂自生爲珠、作者玉也

とあり、按ずるに山より出づる寶石にありては、多少人工を加へざるべからず、故に作爲玉と云ひ、山より出づるを玉とすと云へるなるべし。然れど珠は海より出づるものと限るは誤ならん。本草綱目に曰く

陸佃曰龍珠在頷、蛇珠在口、魚珠在眼、鮫珠在皮、鼈珠在足、蛛珠在腹、皆不及蚌珠也。

康熙字典に曰く

江珠琥珀別名也。

又曰ふ

或出於龍魚異物腹中、非獨出於蚌也。

即ち兎に角に珠とは啻に貝類より產するものに限らず實に介義解に說ける如く自生爲珠ならん。

眞珠とは眞の珠の謂なり、即ち軟體動物の諸種類より生ずる光彩ある結成物にして、主として炭酸石灰より成り有機物を交ふる層疊的物體なり。英語にこれを Pearl と云ひ、佛語に Perle と云ふ、拉丁語の Perla より出でたるなり。羅馬詩人は眞珠

必ずや彼等の眼を射て、彼等を誘ふこと恰も巴里倫敦の寶石店頭に羅列せる金銀珠玉が貴紳の眼を惹くに劣らざる可ければなり。實に眞珠は世界の歴史に於て、常に最貴重なるものとせられ、又文學に詩歌に、或は豪奢を語らんが爲めに、或は美妙を説かんが爲に屡用ひられしものなり。近年裝飾用としての眞珠の流行益盛にして、一般人士の眞珠に對する嗜好は著るしく增進し來れるが爲に、眞珠とは如何なるものか如何にして產出せらるゝものなるかを知らんと欲するもの漸く多きを加ふるなり。

さて珠とは如何なるものを謂ふか、珠玉と對にして唱へ、又珠と玉とは混用せらるゝも、二者意味を異にせるものなり。

康熙字典には

石之美者玉

とあり、倭訓栞には

たま、珠玉をよめり海に出づるを珠とし、山に出づるを玉とす云々。

又令義解に曰く

眞珠

理學士　西川藤吉遺稿

緒論

何れの時何れの世を問はず、人は其身邊を飾らんが爲めに、美衣を被り、金銀珠玉を佩ぶるものなり。就中寶玉の類は人民の文化程度如何に拘らず、均しく愛用せらるゝものにして、各時代を通じて常に貴重せらるゝものなるが、多くの寶玉はそを吾人が天然より得たる儘にて用ひ得可きものにあらずして、多少の人工を施さざる可からざるに、獨り眞珠に在りては然らず、天然の儘にて完全なる美、充分なる價値を發揮せるものなれば、古代未開の人民も、孤島絶域にある野蠻種族も、現時の文明人と毫も異なることなく、皆眞珠を用ふることを知れり。河川湖海に臨める部落の住民が肉を食はんとして貝殼を開く時、中に潜める眞珠の燦然たる光輝は、

目次終

目次

Pl. III.

次に掲ぐる二個の寫眞中、上圖は故西川藤吉の發明したる人工形成法を用ひて作りたる眞球形眞珠を撮影したるものにして、總て施法後五年にして貝中より採取せられたるもの、下圖はかゝる眞珠をX線を用ひて透寫したるものにして、其中心に黑色部の存するは、天然眞珠との比較上豫めかくの如くX線を遮る可き手段を講じあるが爲にして、然らざる場合には採取後に於てそを天然眞珠より區別す可き何等の特徵無し。以て該方法の眞僞を知る可し。

未だその曙光をだに認め得ざる人工形成法の光輝ある發明が、君によりて爲されたることは、我日本國民の忘る可からざることにして、之によれる眞珠養殖を邦家生産の一たる可く發展せしむるは、實に我官民の義務なりと信ず。
一斯くて遺稿の編纂は早く成りしも、一は予の疎懶なると、一は或る事情の爲に遷延今日に至りしは、深く君の靈と君の知己とに謝する所なり。
一本書の出版に就きて君の二兄一弟がなせる多大の盡力は勿論にして、君の親友工學士武田五一氏は、表紙及び扉の圖案を描き、且本書の體裁に就きて指示する所ありき、又印刷に關しては石井清氏の力に待つ所多かりき。而して遺稿の整頓と編纂とは全く川村理學士の勞に屬せり。

大正三年六月

荻野仲三郎

數旬なる明治四十二年七月十日、飯島博士は東京帝國大學卒業式に際し、君が前年來の試驗的施術によりて得たりし數個の眞珠を天覽に供へ奉られしことゝ之なり。本書卷頭に揭ぐる人工眞珠の寫眞は、之と同一物には非るも、君の方法によりて得たる眞珠の標品にして、實に君の親友醫學博士鹽田廣重氏の好意を以て撮影せられたるものなるが、讀者は之に據りて大凡該方法の實果如何を推測せらるゝならむと信ず、君は眞珠の人工形成を論じて、吾人は天然に產する袋眞珠の成因を明にし、品質に於て實際之に匹敵す可き良眞珠を作らしむる方法を得るに至つて、始めて人工眞珠形成の發明を爲し得たるものと謂ふを得可きなり(本書第百十頁)と記せるが、此句やがて君の方法を批評するに用ひらる可し。言ふ迄も無く眞珠養殖業の經營は、右發明方法の實効若しくは學術的智識の外尙別種の技倆を要し、天の時と地の利も亦之に關係するを以て、君の創設せし淡路志摩の養殖場は近年に至り閉鎖するの止むを得ざるに到りたるも、之を以て君の學識と方法の價値を秤價せんとする者あらば、未だ深く考へざる者と云はざるべからず。歐米の學者が千有餘年來腐心して、

り得たる智識とに基き、若干の章句を添加して、玆に單行本の體裁を調へ、明治四十三年の秋予に送致せられたるもの即ち此稿なり。

一本稿には君が苦心考究せし人工媒助眞珠形成の方法に關しては、單に古來の傳說を擧げ、泰西諸家の所說を紹介せしのみにて、該方面に於ける該博なる造詣は一も之を洩らさず、これ本書を繙讀せらるゝ諸氏の均しく遺憾とせらるゝ所なるべし、本書中「眞珠の原因」及び「眞珠の人工形成」なる二章は、其の骨子を君が明治四十年一月に物せる一個の貝より生ずる眞珠の數と題する篇中に取りたるものなれば、當時既にその人工形成方法の發明の大半を成就し居たりし事勿論なるに、然かも一言自家の研究に論及せざりしは、當時我が學界並に眞珠養殖業の狀況が之を沮みたるに因るのみ、此事情は爾來今日に至る迄依然として持續せるを以て、君の發明に關しては、其の智識を繼承せるもの、現存せるあるに拘らず、未だ同方法の內容を公表せしむること能はず、從て一般世間は勿論知友諸氏に對しても、之を具體的に紹介し得る時期に達せざるは、最不本意とする所なり。然れども玆に該方法の眞價如何を立證す可き一大事實あり、そは君の沒後僅に

凡例

一此稿は故西川藤吉君が、明治卅七年二月より四月に至る、動物學雜誌に掲載せる「眞珠」と題する一編と、明治四十年二月、同誌に載せたる「一個の貝より生ずる眞珠の數」と題する一編とを合せたるものにして、前者に關しては特に該篇の冒頭に

客年十月某日學友文學士荻野仲三郎君を訪ひ偶机上の萬葉集古義を繙き眞珠に關する古歌を讀むこれより同君の懇篤なる助力により諸書を渉獵して漸くこの一篇を得たり其梵語に關しては博士南條師を煩し支那地理に關しては學友理學士平林武君を介して某々清國留學生に質せり又聖書の記載に就ては同僚松崎正廣君の取調ぶる處に依る玆にこれを草するに當り謹て諸君に感謝の意を表す

との附言あり、而して君は此稿を單行書として公刊するの意志を有せざりしが、君の學友理學士川村多實二氏が世人の眞珠に關する智識を欲することの甚切なるを想ひ、他日適當なる機會にこれを出版せんとて該二篇を併せて按配區分し、更に氏が君の存生中の談話と、其後公表せられたる歐米論著の二三所説によ

九、濠亞に於ける兎の話（邦文、動物學雜誌第十五卷明治卅六年）
十、再び赤潮に就て（同右）
十一、眞珠（邦文、動物學雜誌第十六卷明治卅七年）
十二、浮鯛（同右）
十三、日本產セラチウム屬目錄（理學博士岡村金太郎氏と共著、英文、日本動物學彙報第五卷明治卅七年）
十四、イハシの發生（邦文、水產調查報告第十二卷第二冊明治卅七年）
十五、珍らしき烏賊（邦文、動物學雜誌第十八卷明治卅九年）
十六、浮遊性烏賊卵の一例（同右）
十七、一個の貝より生ずる眞珠の數（邦文、動物學雜誌第十九卷明治四十年）

同　四十年四月廿四日　休職滿期、
同　四十一年八月十三日　東京帝國大學附屬臨海實驗所養殖取調を囑托せらる、
同　四十二年一月十六日　二女文枝生る、
同　　　六月廿二日　東京市本郷區駒込西片町十番地に易簀、

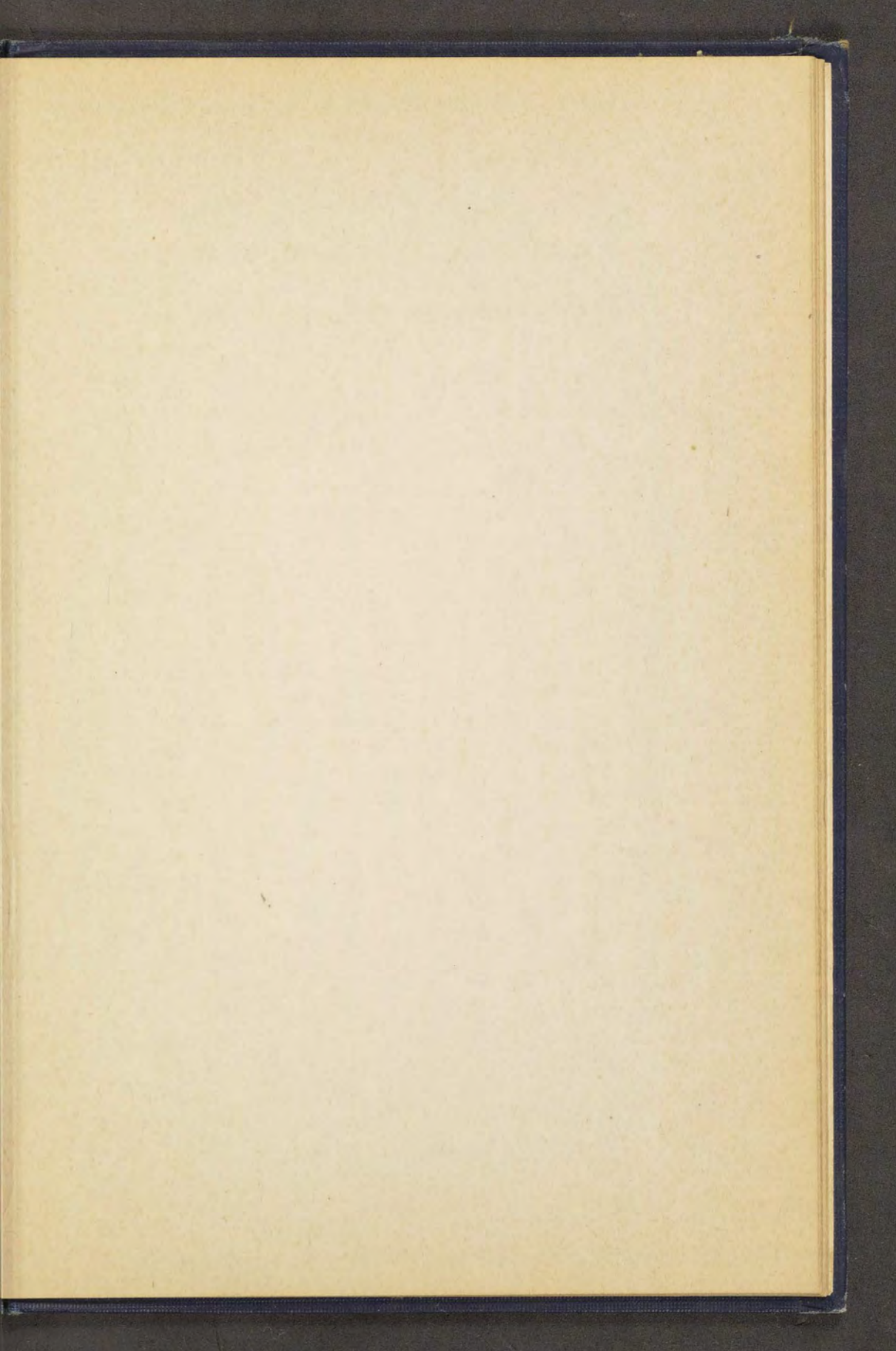
Pubs of Nishikawa

西川藤吉君著述中の主要題目

一、ヒラメの眼の移行法に就て（英文、日本動物學彙報第一卷明治二十九年）
二、ラブカの胚に就て（英文、日本動物學彙報第二卷明治卅一年）
三、ヤリイカの發生（邦文、動物學雜誌第十卷明治卅一年）
四、赤潮に就て（邦文、動物學雜誌第十二卷明治卅三年）
五、英虞灣の赤潮に就て（英文、日本動物學彙報第四卷明治卅四年）
六、ヒシコ調査報告（邦文、水產調査報告第十卷第一冊明治卅四年）
七、赤潮調査報告（同右）
八、三つ眼の動物（邦文、動物學雜誌第十四卷明治卅五年）

同　卅二年五月廿七日　農商務技師に任ぜられ、高等官七等に叙せられ、水產局勤務を命ぜらる、
同　同　六月二十日　從七位に叙せらる、
同　卅三年十月一日　高等官六等に陞叙せらる、
同　同　十二月廿五日　正七位に叙せらる、
同　卅四年　秋より翌年春迄濠洲に出張す、
同　卅六年　第五回內國勸業博覽會附屬堺水族館を經營す、
同　同　十一月四日　御木本峯子を娶る、
同　同　十二月十七日　高等官五等に陞叙せらる、
同　卅七年三月三十日　從六位に叙せらる、
同　八月七日　長女滿枝生る、
同　卅八年四月廿五日　文官分限令第十一條第一項に依り休職を命ぜらる、爾來理科大學動物學敎室に入り眞珠研究に從事す、
同　卅九年八月一日　長男眞吉生る、

西川藤吉君年譜

明治七年三月十七日　大阪市南區桃谷町十一番地に生る、
同　十三年四月一日　私立森學校入學、
同　十八年七月一日　同校卒業、
同　同　九月一日　私立豫備學校入學、
同　廿一年九月十日　第三高等中學校補充科入學、
同　廿五年七月十日　第三高等中學校豫科卒業、
同　同　九月十日　同校本科第二部に編入、
同　廿七年七月十日　第三高等中學校卒業、
同　同　九月十日　東京帝國大學理科大學入學、
同　廿九年七月十日　本學年中特待生に撰定せらる、
同　三十年七月十日　東京帝國大學理科大學動物學科卒業、
同　同　七月十七日　水產調査所技手に任せらる、
同　卅一年十月三十一日　農商務技手に任ぜられ、水產局勤務を命せらる、

らざるなり。

大正三年六月

荻野仲三郎

借らず、其間惡戰苦鬪具に辛苦を重ねたり。而して志業漸く成り功果將に收むるに近からんとして、一朝忽焉として歿す。眞にこれ人生痛恨の事に屬す。

君の生涯や短しと雖も、玲瓏透徹珠玉の如き性行を以て、其志す所を果し、生前自ら名譽の月桂冠を戴くこと能はずして、學術界の戰場に殪れ、發明の凱歌其死と共に世界に響かんとして、君自ら之を聞く能はずして逝きぬるも、名聞利養の念に淡き君は、必ずしも生前にこれを聞かんことを期せざりしなり。君病漸く重く、また起つ能はざるを知るや、熱烈なる求信となり、近角常觀師に依りて、遂に絕對他力の信仰に安住し、怡然として安養の淨土に赴きぬ。君逝きて月餘ならざるに明治天皇親しく東京帝國大學卒業式に臨御あらせられ、標品幷に實驗を天覽あらせらるゝに際し、特に君の發明になれる眞珠形成法は、恩師飯島博士の說明に依りて、畏くも天聽に達することを得たるの一事は、君が生前の努力に報ひられ、死して餘榮ありといふべし。

君逝きて歲月玆に六周年、遺稿の印刷漸く成りて、知己の間に頒たれんとす。眞にこれ一臠の味に過ぎずと雖も、亦以て其全鼎を知るべく好箇の記念物たらずんばあ

その胃癌たることを診斷するに至れり。然れども君尙病軀を以て研究と經營とに盡碎し、屢藥籠を提て或は實驗室に出入し、或は養殖場に往來せしが、四十二年四五月の交より病勢益進みて又起つ能はず。遂に六月二十二日午前九時七分溘焉として東京本鄕西片町の僑居に長逝す、享年三十有六。法諡して珠光院釋唯信居士といふ駒込眞淨寺に葬儀を行ひ、荼毘して遺骨を大阪なる先考の塋に葬る。配御木本氏一男二女を擧ぐ皆幼稚なり。君二兄一弟あり、長兄は工學博士西川虎吉氏にして今福岡帝國大學工科大學教授たり、次兄麻生二郎氏は日本銀行支店長として現に大阪にあり、共に令名あり。令弟新十郎氏は君の遺志を繼ぎて養殖に從事せり。君資性眞摯剛直にして一點浮薄の氣を許さず、所信を確守して容易に人に下らず、直情逕行眞に當世稀に見る所の眞面目の人なりき。其人に對するや頗る親切を極め、事に當り他の爲に身を挺して盡すを常とせり、故に一旦交を君に得し者は、始終君の誠實と温情とに感動せざる者なかりき。君の學に忠なる眞に一身をこれに捧げ、その明晰なる頭腦と、緻密なる實驗とを以て、遂に空前の大發明をなし、而して養殖場を各地に創設するや、施設經營獨力之に當りて、敢て他人の力を

心惨憺到底尋常人の忍ぶべからざるものありき。君が努力の結果遂に空しからず、眞珠に關する先人未發の學理を發明するに至れり。友人即ち君に勸むるに論文を提出して學位を得んことを以てし、偶來朝せし眞珠專門の某外人は君に會して切に其の發明を賣らんことを以てせり。君二ながらこれを却けて聽かず。當時君竊に予に語りて曰く、予は徒らに學理を學理としてのみ研究する學究たるを欲せず、學理を以て更に利用厚世の途に資せんことを希ふ、予は敢て名の爲めにせず、又利の爲めにせず、一に國家の殖産興業に資せんことを欲するが故に、予の發明は力めてこれを秘密にするの要あり、國家若し眞珠養殖を官業として經營するあらば、予は喜んで予の眞珠形成法を提供せんと。予乃ち君の心事の高潔なるに感じぬ。君の恩師飯島博士は君の希望と心事を以て時の大學總長濱尾男爵に建言する所あり濱尾總長これを諒とし、即ち相州三崎の理科大學臨海實驗場に、君の指導に係る眞珠養殖の試驗を開始せらる。君また淡路の福良灣に自家の試驗場を設け、尙肥前大村灣及び志摩の御木本眞珠養殖場にこれが養殖を試み、漸く成功の半途に至りしが、四十一年春以來胃を病みて荏苒癒へず、八月に至りて醫師は終に

西川藤吉君小傳

君は明治七年三月十七日大阪桃谷に生る、西川新助氏の三男なり。明治二十一年第三高等中學校補充科に入學し、同二十七年同校第二部の學科を卒業し、進みて帝國大學理科大學に入り、動物學を專攻す。在學中選ばれて特待生となり、同三十年其の業を卒へたり。同年水產調查所技手に任ぜられ、同三十二年農商務技師となり水產局に勤務す。同三十四年官命を以て南洋に航し、遍く水產の調査をなす。同三十六年大阪に內國勸業博覽會の開かるるや、君堺水族館の經營に參して大に盡力する所ありき。君の職を奉ずるや、恪勤にして忠實、上司同僚の等しく推重する所たり。君夙に眞珠の需要多く、殖產上頗る有利にして、然かも眞珠形成の原理未だ世界學者の發見する所とならず、從て半圓眞珠の養殖のみ僅かに行はれて、球圓天然眞珠の養殖を見る能はざるを慨し、一身を眞珠形成原理の研究と球圓眞珠の養殖に委ねんと欲し、三十八年斷然官を辭して、再び理科大學動物學實驗室に籠居し、學理と實驗の兩方面より之れが研鑽に耽り、一意專心又他事を顧みず、其間苦

が胸裡に在て謳ふる能はざる事實である。聊か所思を述べて序に代ふる次第である。

大正三年六月

理學博士　飯島魁

四十年の頃、故西川君は既に業に、右のァ氏と同一の材料即ち蚌貝を用ひて、同一の方法を施し而して同一の結果を得られたることである。ァ氏は蚌貝に眞珠を形成せしむることは出來るも、生ずる所の眞珠は不規則形にして價値なきが故、氏の發見に係る方法は殖產上に利用するの望みなしと云ふて居るが、此點に於ても亦故西川君は全然同一の意見なりしこと、予の憶に記憶する處である。遮莫ァ氏は蚌貝に眞珠を形成せしむる一種の方法を案出し、其有効なることを證明し、而して其れを誰よりも先に世に公にしたるなれば、一般の慣例上、該方法の發見者と仰がるゝことであらうが、慣例は慣例で宜し、予が信ずる眞事實はまた別なるを妨げず、要するにァ氏の試驗は故西川君が五六年も以前に施行して同結果を得たものであると云ふことは、予

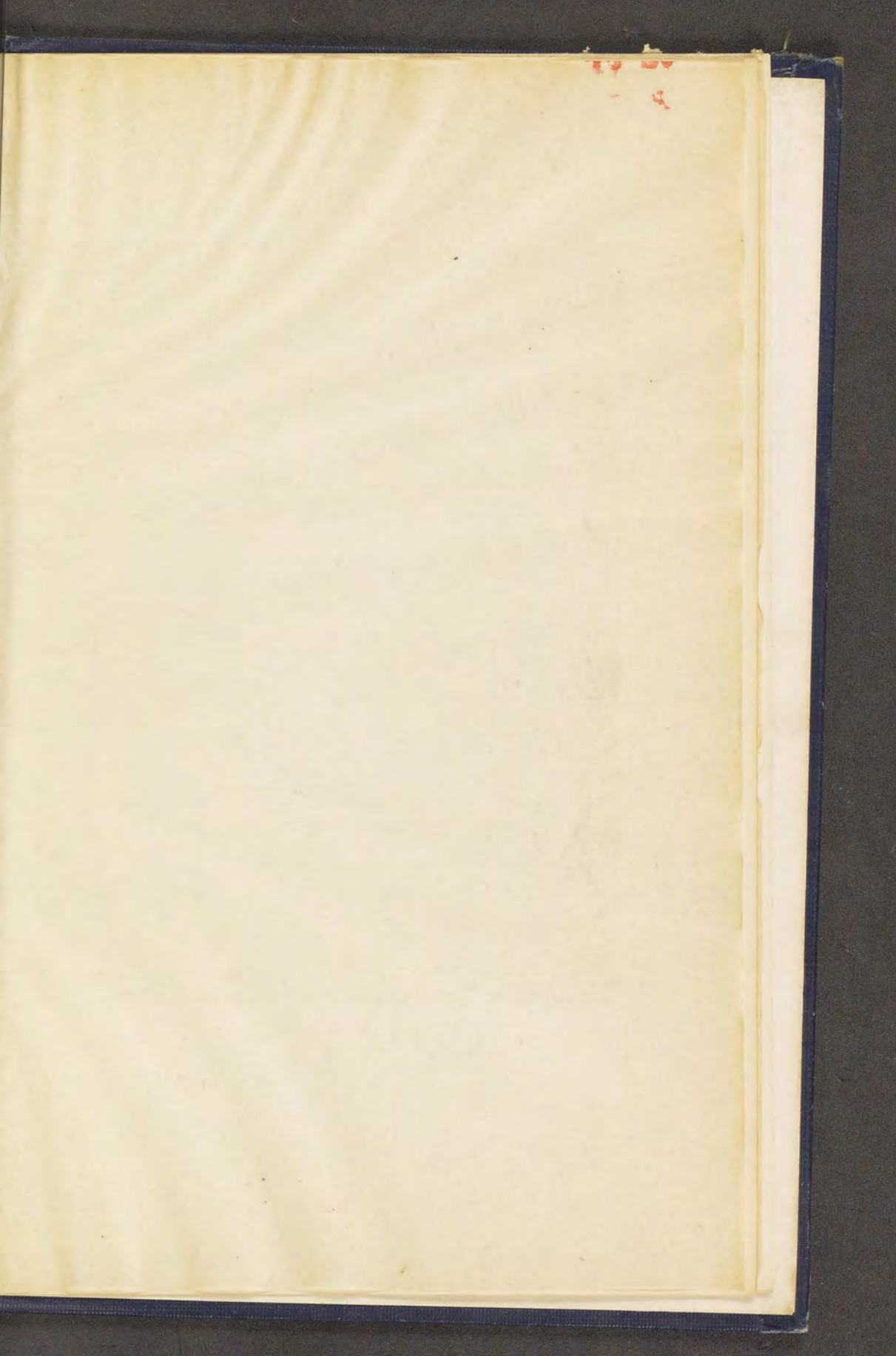
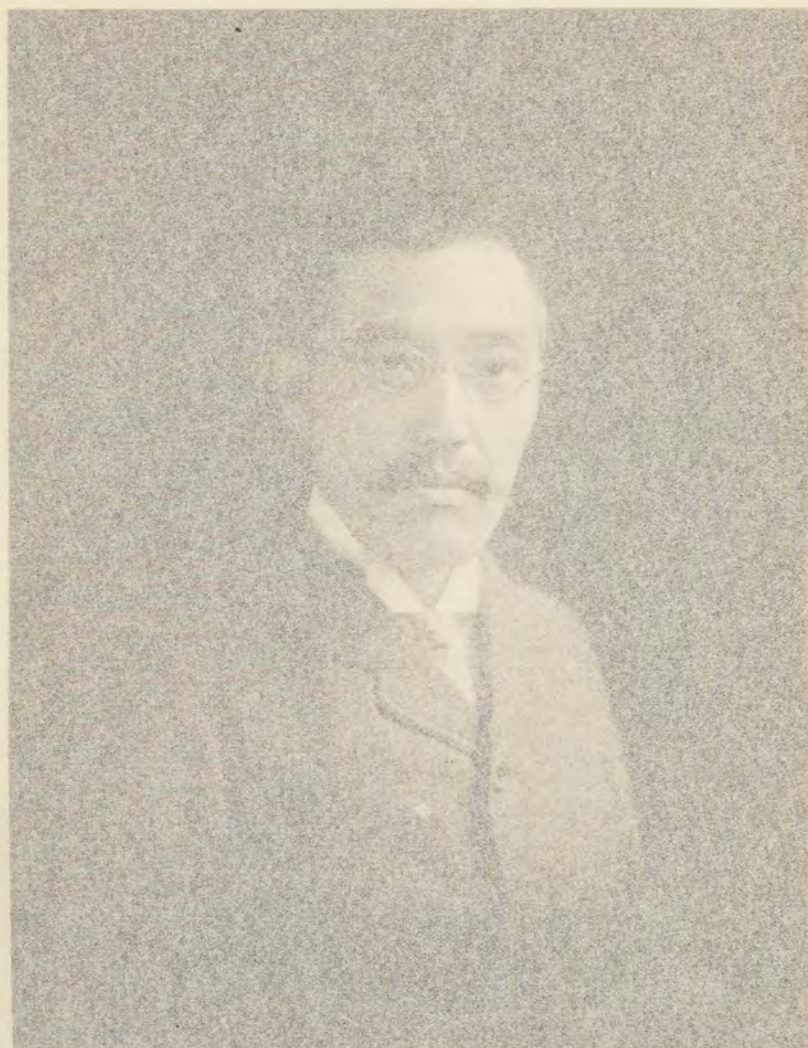
れを應用して、人爲媒助に依りて、珠母貝（アコヤガヒ）をして球圓の天然眞珠を生産せしむるに在つたので、君は此問題に對して、合理的且つ根本的なる解決の道を啓かれたるは、予の夙に熟知する所にして、其殖產上の效果は兎も角、學術上より觀て一大成功なりと云ふを憚らない。　但し故西川君の右の光輝ある、成績は故ありて未だ世間には發表してないが、何づれ近き將來に於て公表するの機會が來るのであらうと樂しみにして居る次第である。

今一つ辯じて置きたい事がある。　开は何かと云ふに、昨大正二年の秋、獨乙國にて發刊する動物學上の一雜誌に。　アルフェルデスと云ふ人が、淡水產の蚌貝（カラスガヒ）に、人爲媒助を以て眞珠を形成せしむる試驗のことを報告して、其道の人の注意を惹きたる樣子である。　予は該報告を一讀して忽ち想ひ起したる事は、明治

序

眞珠は見るにつけ、聽くにつけ、故理學士西川藤吉君を想ひ起さしむる品である。況して今や君の遺稿眞珠の上梓せられて、舊友に頒たれんとするに際しては、一層追想の念深きを覺ゆる次第である。乃で予は君が熱心なる眞珠に對する研究の經過を克く知るものゝ一人として、此處に一言述べて置くも無用ではあるまいかと思ふことは此眞珠なる遺稿は、好個の記念物には相違なきも決して君が研鑽の結果などゝ云ふべき程のものでは無いので、言はゞ折に觸れて物せられたる小副産物に過ぎないのである。然らば主産物は什麽であつたかと云ふに、それは別に立派な大なる物がある。抑も君が心血を濺ぎて盡瘁したる研究事業は、自然に在て眞珠の形成する原理を闡明して、之

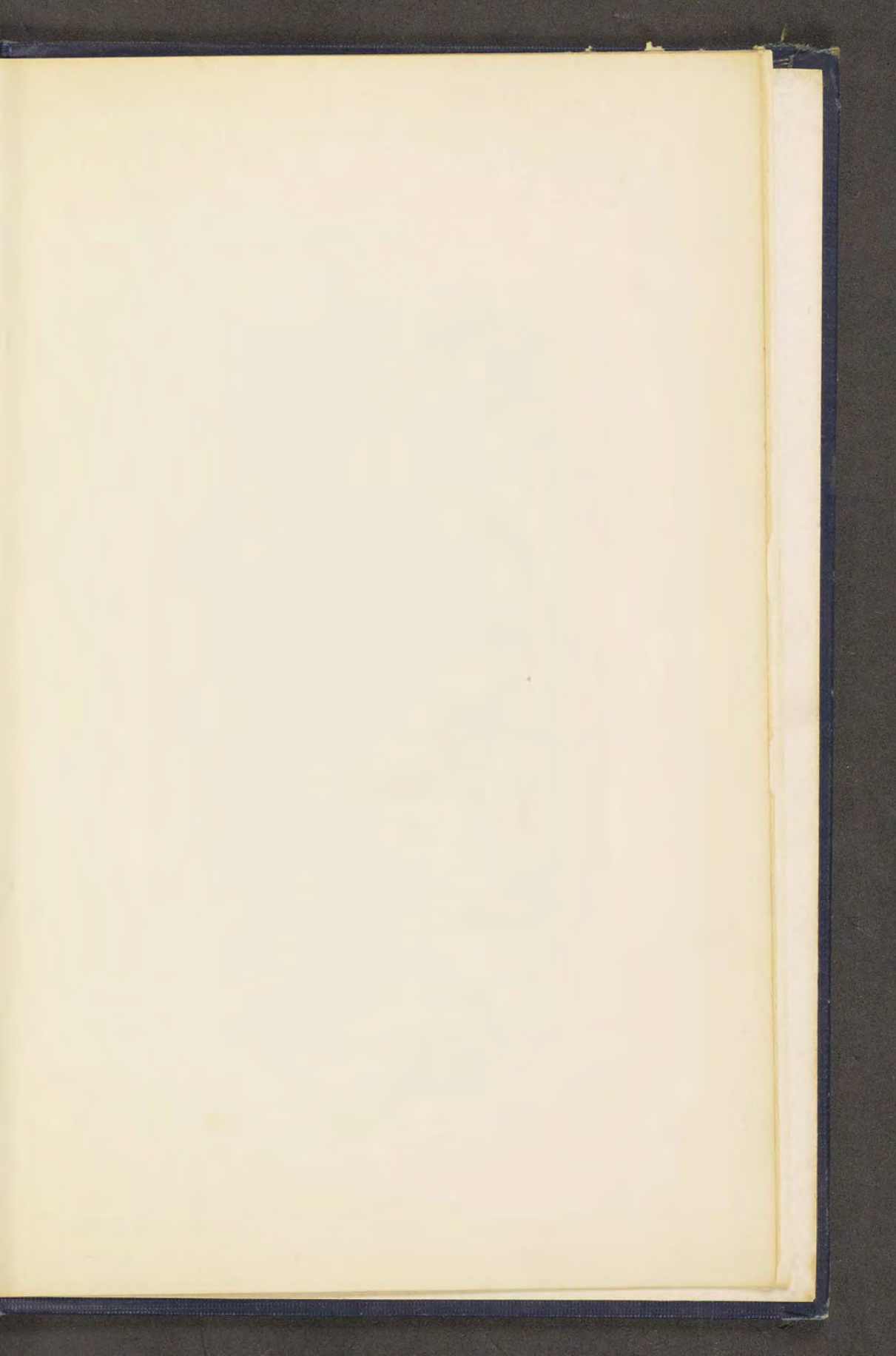
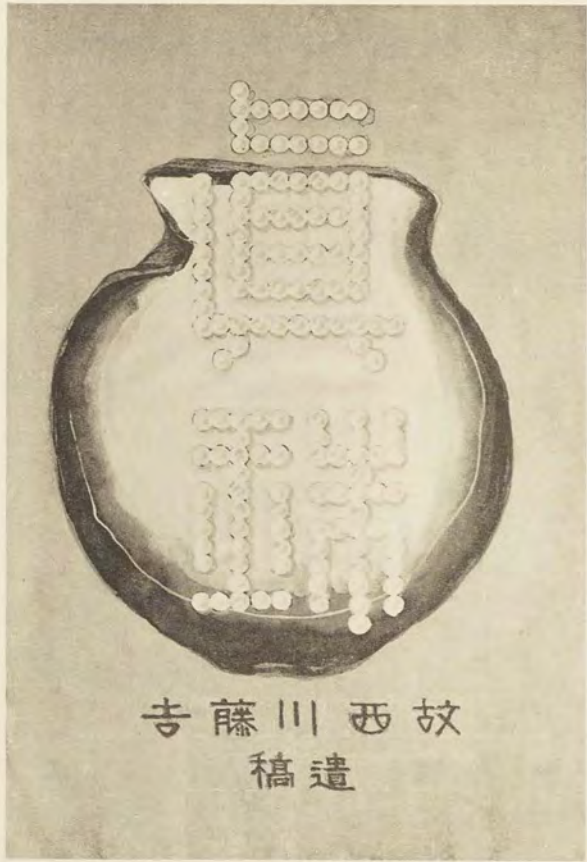
Pl. 11

西川

Nishi Kawa.

Nishi Kawa.

pl. I

1914
TOKYO

pl. I

1914
TOKYO

PEARL

TOKICHI NISHIKAWA

SANKYO, TOKYO, 1914